

不登校の心に寄り添い 育ち・学びを支えるために

私たちが行ってきたこと
みんなで いっしょに考えたいこと



認定特定非営利活動法人
リヴォルヴ学校教育研究所

目次

はじめに	1
I 不登校って何？ライズ学園が大切にしていること	3
II 私たちが行ってきたこと	19
1. ライズ学園の活動概要	20
2. ライズ学園の実践記録	
(1)実践にあたって	30
(2)教科学習	
国語	38
英語	46
数学／算数	54
理科	60
社会	68
(3)体験活動からの学び	
スポーツ	72
絵画造形	74
ライズタイム	78
カルチャー教室	80
農業体験	82
被災地支援	85
III みんなでいっしょに考えたいこと	87
1. 実践から見てきた課題	88
2. 私たちが目指すべきところ	94
巻末資料	97

はじめに



「オノムー！ 見て、見て！」

午後の公園。男の子が大声でさけぶ。

「それでね。私もいろいろ考えたの」

私はベンチに腰掛けて、女の子の話に耳を傾けている。

「もう、オノムー、見てた？ 今、じょうずに跳べたんだよ」

「見てた。見てたよ。すごいじゃないか。今度は一人ずつ順番に入って、3人で跳んでごらん」

小学3年生から中学3年生までが、縄の回転に合わせて、ぴよこん、ぴよこんと跳びはねる。初めて教室を訪れたときの彼らの不安げな表情が、ふと思い浮かんだ。

「じょうずになったね」

私のつぶやきに、女の子がやさしく微笑み返す。

(ライズ通信1号から抜粋)

あの頃、A君はみんなが大縄を飛んでいる横で、回転に合わせて体を上下させていました。「跳んでみる？」と声をかけると、小さな肩をさらに小さくすぼめて、

「ぼくは何もできない」といったときの表情が、今も目に焼きついています。

スタッフミーティングでは彼に「挑戦させてみよう」、「せっかく元気になってきたのに、ここで自信を失わせたら…」と話し合いを繰り返していました。ところがある日、

「何やってんの！？」と、もう一人の子に背中を押されたA君は、振り下ろされた大縄跳びを無意識に避けるように跳び、反対側へと抜けたのです。

その後、大学まで進んだ彼は、なかなかのスポーツマンになりました。今は、社会の荒波にもまれ苦勞をしているようですが、たくましさは昔日の比ではありません。

リヴォルヴ学校教育研究所は、2000年7月に元公立学校教師がかつての教え子や同僚らとともに立ち上げたNPO法人です。(認証2001年3月) 私たちの活動は、以下の4つに

① ライズ学園の運営

② 教育講座の開催

③ 「いばらきマナビィ・ネット」の運営

④ 教材の開発・販売事業

東日本大震災当時の生徒の発案で始まった「災害支援活動」を加えた計5つの柱から成ります。そして、その中心となるのがライズ学園の運営です。

「国民の形成」を目的とする「国家戦略としての学校教育」は、子どもたちに少なからず「単一性」を強制してきました。かつて日本の学校でも方言の使用を禁止したなどは、富国強兵策の一環として理解できます。たしかに国民が‘てんでばらばら’でも都合が悪い面もあるでしょう。しかし教育は、国や地方公共団体によって施されるべきものではないのではという疑問があります。

急速に進む国際化の中で国家という枠組みが揺らぎつつある今、学校教育に求められるものも変わりつつあります。人種や文化的背景が異なる人々が隣り合わせて暮らす社会では、学校は子どもたちに「お正月には凧あげて…」などと歌わせることすらできなくなると考えられます。他方、国家間経済競争の激化は、「真面目で従順な労働力」とともに「特異な才能」の輩出も期待しています。

確かに日本の学校教育制度は、奇跡と言われた経済成長を下支えし、私たちの暮らしを‘豊か’なものとなりました。しかしその反面、何ごとに対しても受け身の姿勢を広く私たちに植え付けてしまったことも事実です。共有する文化をもたず、何ごと他人まかせとなりがちな「国家」は、今後、ますますその影を薄めていくと思われます。それはそのまま、コミュニティにもあてはめられると考えます。

ライズ学園は、商店街の中ほどにある洋品店の二階にあります。すぐ近くには公立の小学校や高校があって、朝夕にはたくさん子どもたちが行き来をします。しかしこの商店街もご多聞に漏れず衰退傾向にあり、この15年間で何軒もお店がシャッターを下しました。少子化、そして学校の統廃合が進められ、子どもたちの学びの場は暮らしからますます遠のきます。人の気配が薄れた通りをバスで登下校する子どもたちは、そこで何を感じるのでしょうか。学校規模の‘適正化’により物質的な環境は整えられるかもしれませんが、ICT(情報コミュニケーション技術)を介して子どもたちは何を学ぶのでしょうか。

今、取り組むべきは、大切な子どもたちの教育を他人まかせにしないという私たち自身の意識改革ではないでしょうか。私たちが目指すところは「地域の人々によって支えられた、もう1つの学びの場」です。あの震災の後、ライズ学園の子どもたちは、「自分たちにも何かできることはないか」と話し合い、文具を集め始めました。全国から送られてきた数万点もの文具を目にした子どもたちは、「日本って素敵だね」「まだ、捨てたもんじゃない」などと言葉を交わしながら、鉛筆一本一本からていねいに仕分けをしました。

私自身、文具を届けるため被災した街を訪ねたときには、あまりの自然の猛威に言葉を奪われました。しかしライズ学園に戻り、子どもたちには「人は弱い。どんなに強がって見たところで、自然には勝てない。だけど弱いからこそ、助け合いが必要となり、力を寄せ合うからこそ美しいのだと思う」と、話しました。

ライズ学園のモットーは「みんなちがって みんないい」です。彼ら彼女らの多くは素晴らしい可能性を感じさせるとともに、苦手も抱えています。しかし一人ひとりが、宝物であることは間違いありません。彼ら彼女らは次代を指す光であり、希望です。その可能性の芽を埋もれさせてしまうということは、単に一個人、一家庭の問題ではなく、社会にとっても大きな損失です。

公立中学教師として勤務した16年間は、無力な自分に苛立ち、後悔を重ねた日々でもありました。「そんなお前に一体何ができるのか」という声が、今でも聞こえてくるような気がします。それでも小さなライズ学園は、たくさんの素晴らしい出会いに恵まれて、今日までやってきました。力不足は言わずもがな、「ありがとう」とともにたくさんの「ごめんなさい」も言わなければなりません。しかしだからこそ、ここに15周年誌をまとめ、わずかでも次の世代の皆さんのお役に立てればと思います。

2015年11月



認定NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所 理事長

ライズ学園 代表

小野村 哲

I 不登校って何？

ライズ学園が大切にしていること

ライズ学園に通う子どもたちの多くが「不登校」を経験しています。不登校と一言にしてもその背景は様々ですし、人と‘違う’生き方を選ぶことは必ずしも‘悪い’ことではないと思います。ではなぜ、不登校は「困った！」ということになるのでしょうか。

ここではまず、不登校とは何か、なぜ問題なのかについて考えた上で、ライズ学園のスタッフが日々の活動の中で「大切にしていること」をご紹介します。

I 不登校って何？ ライズ学園が大切にしていること

1. 不登校って何？なぜ「困った！」なの？

① 単純に「学校に行かない」というだけなら

困難に直面したとき、私たちの視野は狭くなりがちです。「困った！ 困った！」と繰り返しながら、問題の本質を見失っていることも少なくありません。例えば今ここに、机の上に足を投げ出して授業を受けている生徒がいて、あなたは先生だとします。「これは困ったことだ」というあなたは、具体的に何に困っているのでしょうか。

ある人は「投げ出された足」と、答えるかもしれません。では、なぜそれが困ったことになるのでしょうか。周囲の生徒に迷惑をかけるから？ 他の生徒は本当に、迷惑だと感じているのでしょうか？ 私自身は「いや、別に…。それより授業を中断して大声を出している先生の方が…」と言われたことがあります。ムツとききましたが、今となればそれもそうだったかもしれないと思います。往々にして私たちは「子どもたちのために…」などといいながら、自分目線でものごとを判断しがちです。

そこで視点を「私(あなた)」から「彼(彼女)」に移してみましょう。彼(彼女)はなぜ、机の上に足を投げ出しているのでしょうか。授業がつまらないから？ わからないから？ だとしたら私たちが本当になすべきは、「その足をおろしなさい」と注意することではなく、彼(彼女)がどこでどのようにつまずいているのかを知り、教え方を改めることです。見方を変えれば、机の上に投げ出されたその足は彼(彼女)からのメッセージ以外の何ものでもありません。

では、同じように「不登校」について考えてみましょう。不登校になると、何が困るのでしょうか。勉強が遅れる？ 生活のリズムが乱れる？ 社会性が育たない？ なぜ、それが困ったことになるのでしょうか。就職して自立ができないから？ 健康が損なわれるから？ だとしたら、毎日家で勉強をし、地域のクラブなどで運動していれば、何か特技を身につけるなどしていれば、不登校は困ったことではなくなりませんか？

「不登校」が単純に「学校に行かない」ということであるなら、それ自体は困ったことではないと思います。問題は、学校に行かない自分をダメだと思い込んでしまうこと、それで自信を失ってしまうことではないのでしょうか。

② そもそも「学校」とは

ある面において、日本の学校教育制度は世界でもっとも成果をあげている、といって良いと思います。しかしすべてに完璧な制度などあるはずがありません。プラスもあればマイナスもあるはずですが、私たちはあまりに多くのものを学校に求め過ぎていたのかもしれません。

最近、ある個人競技の選手が「練習時間を確保するために通信制高校を選択した」と、聞きました。ある職人さんからは、「‘高校ぐらいいは’なんて言われるもんだから、いい職人が育たない。15歳でも遅いくらい、できればもっと早くから修業を始められればいいんだが」とも聞かされました。

乱世といわれる時代には、なぜか人材が輩出します。それはひとつに、世の中が乱れることで子どもたちへの締め付けが少なくなるためかと思われます。一方、世の中が安定し制度的な教育が行われるようになると、個性は矯められ、枠からはみ出した子どもたちは排除されがちになります。司馬遼太郎氏はその作品「世に棲む日日」の中で、「もともと教育という公設機関は、少年や青年というものの平均像を基準とし、一定の課程を強制することによってかれらの平均的成長を期待するものとして、設置され、運営されている。自然、平凡な学生にとっては学校ほど有意義な存在はないかもしれないが、精神と智能の活動の異常に活発すぎる青年 —天才といっている— にとっては、この平均化された教授内容や教育的雰囲気というもののほど、有害なものはないかもしれない」(一部省略)と言っています。少々過激とも取れますが、的を射た発言だと思います。

ここで考えたいのは、「学校って何なのか」ということです。学校という仕組みが合っていないと訴える子どもたちにも、やはり我慢をしてでも登校させるべきでしょうか？ しかし何とかを成した人の多くは、子ども時代は‘悪ガキ’で‘学校嫌い’だったりするものです。ある面で突出した才能を発揮する人は、また別の面ではたくさんの苦手を抱えていたりもします。その「天才の卵」を誰がどう見出したらいいのでしょうか。天才同士ならともかく、平凡な私たちにそれがわかるのでしょうか？ あなたが先生なら、あなたのクラスにいるレオナルド・ダ・ビンチや高杉晋作の生まれ変わりを、見抜くことができるでしょうか？

彼らほどではなくとも — そもそも比べること自体がおかしいと思いますが — 人とはちょっと違った才能を授かって生まれてきた子は、私たちの周りにもたくさんいます。その子には、その子に合った選択肢が用意されて然るべきではないでしょうか。

③ 常識という名の先入観・偏見

中学校に行かなければ、高校には進学できないと信じ込んでいる方もいますが、そんなことはありません。高校には行かず、高卒認定試験から大学に進むという選択肢もあります。事実、私たちの教室からも、高校には行かずに難関とされる大学に進んだ生徒がいます。「でも、それはできる子の話ですよ。高卒認定試験も難しいそうじゃないですか...」と、言われることもあります。しかし不登校であったり、勉強に集中できない状態にあったなどしたなら‘とりあえずできない’のは当然ですし、「今、できない」からといって、「ダメだ」と思いこんでしまうのは早計に過ぎます。高卒認定試験も、普通に高校で単位を取ることに比べ、特に難しいとは思えません。数学が苦手なら、数学以外をがんばってもいい。「勉強は全部苦手」というなら、高校には行かずに就職をしてもいい。就職をし



問題となるのは、「自分はダメだ」と思い込み自信を失ってしまうこと

てから、新たに学び直してもいい。辺りを見渡せば、不登校を経ても社会で活躍している人はたくさんいます。

ただ、現実問題として、不登校になると学びや経験の機会が狭められてしまうことは確かです。それは子どもたちの問題ではなく、大人の側の問題です。不登校と呼ばれる状態にある子どもたちにも、より質の高い「学び・育ちの機会」が提供されて然るべきです。彼ら彼女らは遠回りをしてやってきます。そんな彼ら彼女らが、10年後、20年後... 充実した生活、幸せな生活を送ることができるよう、これまでの学校とは別の選択肢も用意すべきです。



写真はイメージです
積み上げられた知識、常識が見る目を奪ってしまうこともあります。

そこで改めて、彼ら彼女らにとっての充実した日々、幸せとは何かと考えると思考の深みにはまってしまいます。より質の高い「学び・育ちの機会」などと言葉にはできても、具体的にはそこで何をすればよいのか。例えば何かに思い当たると一晩も二晩も寝ずに没頭してしまう子には、「規則正しい生活を...」と指導すべきでしょうか？ 偉人といわれるような人は、一事に没頭すると「昼も夜も忘れて...」ということはよく聞くことです。いわゆる常識を押しつけることは、彼ら彼女らの可能性の芽を摘んでしまうことにならないとも限りません。アルベルト・アインシュタインは「常識とは、18歳までに身につけた偏見のコレクションである」と言っています。不登校を考える際には、私たち自身が常識という名の先入観、偏見から脱却する必要があるかと思います。

④「違い」と「障害」「不調」

不登校について相談すると、「一度、病院に...」などと勧められたりします。そして病院に行けば「〇〇障害と言われました」ということになりがちです。しかし、そこで改めて「『〇〇障害だ』と、先生は断定されましたか？」と尋ねると、

「あっ、いや、その疑いだったか ...」ということが、実に多くあります。

そもそも「障害」とは何なのでしょう。この辺りに関して、私たちは専門外であることをはっきりさせておく必要があると思いますが、発達障害についてはまだわからないことだらけだということは明言してよいと思います。例えば LD(学習障害)についても、全面的に受け入れられるような定義はなされていません。

LD(学習障害)は一般に Learning Disabilities の略とされますが、この場合、disability は「能力(ability)がない(dis)」ということですから非常に強い否定を意味します。しかし日本では Learning Disorders(disorder: 不調、混乱)や Learning Differences (difference: ちがい)までをごちゃまぜにして「学習障害」とし、「学習障害は治りません」などとされています。具体的には、いじめを受けるなど普通(ordinary)ではない状態であったがゆえに不調(disorder)におちいつている子や、教えられた方法とは違った(different)方法で解法を導き出そうとして混乱(disorder)している子までを「学習『障害』」としてしまっているのです。

先ほども話題にした司馬氏は自身について「もともと耳が精密でなく」、どう耳を澄ませても「お紅茶」が「お餅」としか聞き取れなかったと書き残しています。この点に関しては disability と見なしても良いかと思われます。しかし司馬氏は実生活の中では、「目で見てそれが紅茶であることはわかる」と場面などから推測を働かせ困難を補っていたようです。果たしてこれを、「学習‘障害’」とすべきでしょうか。

答えはもちろん ‘No’ だと思います。しかしこのような子どもたちが、どこかでつまずきその困難が顕在化すると「学習‘障害’」とされてしまう。根本的な障害も二次的な困難やつまずきも一緒くたにして「学習‘障害’」として扱われてしまう。これが現状ではないでしょうか。

昨今の科学はヒトの脳が思っていた以上の可塑性をもつことを明らかにしています。ある部位に機能障害があったとしても、他の部位がこれを補うなどする事例も報告されています。これだけを見ても LD等を「治らない」と決めつけてしまうのは早計に過ぎるように思えます。現段階では、「根本的には治らないかもしれないが、支援次第では相当の改善も期待できる」と、考えるのがふさわしいように思います。

司馬遼太郎氏でさえ、「家内は、ほとんど毎日だという」が「自覚的には一月に一度ぐらい」であり、「どうやら若年のころからそのようでありました」というほどです。自覚さえされにくい困難が、周囲に理解されにくいのは当然です。「できそうなのにできないのは、さぼっているから」と責め、意欲を削いでしまったり、その結果としての学力不振を知的障害と誤解してしまうこともあります。周囲が理解していたとしても、本人が「自分はダメだ」と思い込んでしまうことも多々あります。

事実、不登校の背景には LD等の発達障害やそれに類する困難が潜むケースも少なくありません。フリースクールのような場にあっても、子どもたちがどこにどのような困難を感じているのかを理解した上で、個に応じた支援を心がける必要があります。「違い」を知るということは、授業の改善を図る際にはもちろん、ちょっとした声かけ1つを考える際にも、貴重な示唆を与えてくれるものでもあります。LD等の発達障害に関する知識は、教育に関わるものすべての常識とされて然るべきだと考えます。

この点、「不登校を考える際には、私たち自身が常識という名の先入観、偏見から脱却する必要がある」などとした前言とは矛盾するかもしれません。しかしこの矛盾を自覚した上で、「違い」は「違い」として認め、「個性」は「個性」として伸長し、「困難」は「困難」として支え、「障害」は「障害」として受け入れ、生活改善のための手立てを講じるなどすることこそ重要であると考えます。

補足したいと思いますが、専門家といわれる方々から「〇〇障害の疑い」などと言われれば、保護者の方の心には「障害」という言葉のみが刻み込まれがちです。この点にはくれぐれも留意が必要かと思います。一方である医師からは、

「保護者の方から、‘〇〇障害でしょうか、それとも…’ のように聞かれれば、何でもないとは言いにくい。たしかにその傾向がないとは言えないケースも多い」と、聞かされたこともあります。このあたりは実に難しいところですが、だからこそ教育、心理、医療などの枠を超えた連携が重要なのであり、コミュニケーションをスムーズにするためのコーディネーターの配置などが推し進められるべきではないかと考えます。

2. ライズ学園が大切にしていること

ライズ学園は、いわゆる「学校」で個性を発揮できずにいる子どもたちのための、もう1つの「学びの場」です。通園生の大半は不登校と呼ばれる状態にある子どもたちですが、不登校を経験せずにライズ学園を選択する子もいます。

① ロゴマークに込めた思い：地域で支える子育て

NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所の活動の中心にあるのが、ライズ学園の運営です。ライズという名称は、リヴォルヴ学校教育研究所の英語名である“REVOLVE Institute of School Education”の頭文字“R.I.S.E”を組み合わせ



たもの、そしてロゴマークの下の丸い部分(茶色)

は私たちが暮らす街を、rの文字をかたどった部分(緑)は地域に育まれた若芽を表しています。

「教育改革」は、すなわち「学校教育改革」のように語られることがあります。しかし学校の在り方を改めるだけで事は足りるでしょうか。コミュニティーの衰退は深刻な問題です。まだ十分に語る言葉を持たない子どもたちではあるかもしれませんが、彼らは世相を敏感に感じ取る触覚を持っているように思えます。教育は国や地方公共団体によって保障されるべきではあっても、それらによって施されるべきではないとも考えます。国家権力の統制下にある教育が、いかに危ういものであるかは歴史が証明しているところです。

一方、「親が変われば子どもも変わる」とも言われます。もっともなことかもしれませんが、親であろうと教師であろうと、誰しものがそんなに立派になれるわけではありません。反対に、立派でなくてはならないという思いが、子育て・子育ちを窮屈なものにしてしまっているという面もあるのではないのでしょうか。「孤育て」に悩む人に「親が変われば…」と説いても意味があるとは思えません。

今、求められるのは、大切な子どもたちの教育を人まかせにすることなく、一人で背負い込むこともなく、地域の人々で子どもたちの育ちを見守れるようにすることではないのでしょうか。ライズ学園が目指しているのも、地域の人々によって支えられた「もう1つの学びの場」です。

ライズ学園のような場所があるから、不登校が増えるんだという考え方もあります。「子どもたちを小さなかごの中に囲い込み、社会から遠ざけている」といわれれば、それも一面の真理であるかもしれません。しかしそれは、「保健室があるから保健室登校が増える」と言っているようなものだと思います。ライズ学園では子どもたちを学校に戻すこと自体を目標にはしませんが、子どもたちと社会とのつながりは大切にしています。「ライズ学園の実践」の中でご紹介する「いやしの庭看板制作プロジェクト」や「農園体験」はその具体例であり、「カルチャー教室」から授業の一環へと発展したものです。

② みんながって みんないい

日本語の「ちがう」という言葉からは、否定的な意味合いが強く感じられます。しかし「人とちがう」ということは必ずしもマイナスと捉えるべきことではないと、私たちは考えます。私たちが目指しているのは、これまでの学校とは異なる「もう1つの選択肢」としてのライズ学園です。いわゆる「学校」が大型観光バスなら、ライズ学園は小回りがきくタクシーでありたいと思います。大人数で効率的に観光スポットを見て回るには大型バスがいいでしょう。しかし中には、バスが苦手な子もいます。バスにはどうしても酔ってしまうという子には、別の選択肢も用意されて然るべきだと考えます。

ライズ学園には、様々な個性が集います。不器用なところもあるかもしれませんが、一人ひとりが異なる可能性を秘めていることは確かです。例えば「書くこと」が苦手という子には、タイピングを教え授業はコンピュータを使って行うようにします。地理が得意だという子がいれば、漢字や算数の勉強も地図を使って行うなど、私たちは一人ひとりに異なるニーズに応じた子育て支援を心がけています。

もちろん苦手を克服するための支援も行います。いじめに合った子は、「(自分は)もっとひどい目にあっただんだよ」といいながら、他の子に意地悪をし返すこともあります。そんなときは「ダメなことはダメ」と厳しく指導することもあります。しかし私たちは得意の伸長を優先させることでセルフエスティーム(自己肯定感)を伸ばすこと、多少の「でこぼこ」はあったとしてもその子がその子らしく輝けることを目標としてサポートに取り組んでいます。

昨今、「インクルーシブ教育／インクルージョン」という言葉が注目を集めるようになっていきます。教育関係者の間では特別支援教育用語と認識される向きもありますが、本来のそれはより広い意味をもちます。具体事例として、植民地化した地域で母語の使用を禁止などする「インテグレーション:統合、同一化」に対して、「インクルーシブ教育／インクルージョン」は少数派とされる人々の権利や一人ひとりに異なる個性など、違いを尊重し、特別な配慮を要する人々には当然の権利としてそれを保障する「包括的な教育」を意味します。「インテグレーション」の背後には、同化を拒む人々への排除の色が見え隠れしますが、「インクルーシブ教育／インクルージョン」は「排除しない教育」と言い換えることができます。

価値観の多様化、多文化共生が進み、国家間での経済競争が激しさを増す中で、学校に期待される役割も変わってきています。「インクルーシブ教育／インクルージョン」という概念は時代の要請であり、今後無視できない潮流となることは間違いないでしょう。しかしそこで何を、どのように教えていくべきなのかについては、明確な答えが出せていません。激変の時代に、先を見通そうとすること自体に無理があるとも考えられます。

であるならば、次の時代のことは次の時代の人々の判断に任せるべきです。あとでもお話するように、私たちは普遍的価値について学ぶ機会を大切にしています。しかしできるだけ、教え込むようなことは避け、自身で課題を発見し、自ら考える力を伸ばすことを大切にすべきです。

私たちは、不登校と呼ばれる状態にある子どもたちを、かわいそうな子どもたちだとは思っていません。そんなに立派でもなければ強くないところは、誰しも同じだと思います。しかしだからこそ、彼ら彼女らが自身を見つめる時間を大切に、試行錯誤の機会を尊重し、自らの足で立ち、歩いていけるようにかたわらで見守っていきたいと思っています。

③ ‘学校に戻すための指導’はしない

すでにお話したように、ライズ学園では「子どもたちを学校に戻すための指導」はしません。子どもたちには、「(学校に行くことが)プラスになると思えば行けばいいし、プラスにならないと思えば無理に行かなくてもいい」と、話します。学校のために子どもたちがいるのではなく、子どもたちのために学校があるのですから、ある意味これは当然のことだと思います。私たちが心がけるのは、「戻すこと」ではなく、その子にとって「良い循環」を生み出せるようにすることです。

初めて見学を訪れた子には「休めている？」とも聞きます。すると多くの子がきょんとした顔をしますが、「明日こそは行かなくちゃ！」との思いから心労を重ねているケースもあります。そんなときには、ライズ学園に通うか通わないかを考える前に「まずは少し休んでみたら…」とアドバイスすることさえあります。

「風邪をひいたらまずはゆっくり休むこと…。心が風邪をひいたときも同じこと。ゆっくり休んで気力が回復したら…、そのときライズ学園がいいなと思ったら改めてご連絡ください」と、お話ししたりします。

学校に戻そうと周囲が力めば、それはプレッシャーともなりかねません。「一生懸命になっている親を見るのが一番辛かった。期待に応えられない自分が情けなかった」と振り返った子もありました。「明日からでも毎日通わせたい」という保護者の方もいらっしゃいますが、ライズ学園までもが「行かなくちゃ」という場所になってしまっただけは元も子もありません。

他方、「まあ、ゆっくりいきましょうか」と本人、そして保護者の方とも話していたら、ある日突然本人から「すいません。やっぱり学校に行ってもいいですか」と、言い出されて驚いたこともあります。

「勉強がわかるようになってきたから、試しに1回だけテストを受けてきたい」と、言うのです。十分に力をためた上でのことでしたので、結果はびっくりするほど(スタッフにとっては予想通り)の好成績。それを機に登校を再開したということもありました。

もし子どもたちが、「学校に行ってみようかな」と言ってきたときにも「そうか！ それじゃ早速、担任の先生に電話しようか」などとはせず、まずは、「そうなの。それもいいかもね」くらいに返します。例えば悪いのですが、このあたりの微妙な間合いは魚釣りに似ているかもしれません。いざ登校ということになったときも、「やっぱり無理」となったときのことを考えて、「がんばっておいで」ではなく、軽く笑顔で「いってらっしゃい」と、言うくらいに留めます。

④ ‘教えること’も大切にする

しばらく授業を離れていた子どもたちが学校に戻ろうとしたとき、大きな壁として立ちふさがるのは教科学習の遅れです。私たちは、「がんばってみる」といって教室に戻った生徒が「授業がわからない」といって再び学校を去る姿を何度も目にしてきました。「みんなちがって みんないい」とはいつても、社会で暮らすためのマナーやルール、基礎学力を身につけさせるなど教えることもおろそかにはできません。

不登校の背景に、LD(学習障害)などが潜むこともあります。その場合、専門的なサポートも必要です。最近では、「どうしても英語が苦手な…」などと理由がはっきりとしているケースも出てきていますが、LD(学習障害)は単なるさぼりとされ、誰にも気づかれないままに放置されていることも少なくありません。

ライズ学園では、教科学習支援にも力を注ぎ、各教科担当が計画的に学習サポートにあたっています。開園後しばらくは支援体制も整わず、時間割を定めるには至りませんでした。今でこそほとんどの子が毎日50分×2コマの授業に臨んでいます。それでも「その気になれない」「集中が続かない」という子は毎日1コマ、または30分ずつ2コマなど、その子のペースで学習しています。各教科の学習指導について、詳しくは後述します。

そしてライズ学園一番の自慢は、15年間に一度も風邪が流行ったことがないことです。洋品店の2階を間借りした教室は、窓が少なく環境に恵まれているとは言えません。それでも集団風邪で休園などということにならないのは、子どもたちが隅々まできれいに清掃をしているからだと思っています。

分担などは決めていません。帰りのバスまでに時間がない子はほとんど何もせずに帰りますし、教室の隅で立っているだけの子もいます。それでも「誰々はずるい」などということにはなりません。もともとはスタッフが清掃していたものを、一人、二人と手伝ってくれる子が増えてきたというだけのことです。新しい子が入ってきたときは「よかったら手伝ってくれる」などと声をかけますが、強制はしません。手伝ってくれたときにスタッフは「ありがとう」と声をかけます。

私たちはこのような雰囲気、ウナギ屋さんや焼鳥屋さんの「たれ」のように大切に守ってきました。毎年3月には何人もの子が巣立っていきます。それでも新学期に、まとめて何人もの子を受け入れることはしません。新たに通園を始める場合も、まずは週に半日くらいから、少しずつ慣れてもらえるようにします。登校を再開した子が「やっぱり無理」といったときにも受け入れられるように、また、新規入園した子が張り切り過ぎて疲れないように、周囲の子ともゆっくり理解し合えるようにという思いもあります。これらは、ライズ学園秘伝の「たれ」、家庭的な雰囲気を守ることにもつながっています。

⑤ 到達目標は「プラス1」

清掃にせよ教科学習にせよ無理強いはしません。しかし、ただ待っているだけでも時間を浪費してしまいかねません。何事にもやる気を見せなかった子が、教科学習によって自信を身につけ、気力を充実させていくこともあります。ここは背中への押し具合が難しいところです。そこで私たちは毎日、始業前と放課後に計2時間程度のミーティングをもち、一人ひとりの支援について話し合います。ライズ学園での教科学習の時間は50分×2コマしかありませんが、まずは教室にやってくるだけで良しとするのか、それとも2コマとも集中して学習できることを目標とするかなど、本人はもちろん保護者の意向も尊重しながら、何をどのようにサポートしていくか、背中への押し具合を検討します。

到達目標を考える場合、長期目標を先に設定し、その実現に向けて中期、短期目標を設定していくことが多いと思います。しかしライズ学園にあってはその方式はふさわしくないように思えます。通園を始める前後の子どもたちは、自分本来の姿を見失っていることも多く、その後の変容ぶりはスタッフの予想の域を超えることもしばしばです。そんな中で私たちが心がけているのは、その子をよく見て、その子にとっての「プラス1」、今いるところから一歩先に到達目標を設定することです。



写真はイメージです
今いるところから「一歩先」に、到達目標を設定する

入園を希望する子に「ライズで何がしたい」と聞くと、多くは「勉強」という答えが返ってきます。それでも最初は、鉛筆さえ持とうとしないこともあります。保護者の皆さんからは「本人も、勉強がしたいと言っている...」と言われ、確かに子どもたち自身も「(このままじゃいけない)勉強しなきゃ」と思っていたとしても、「勉強したい」というのと「しなきゃ」というのでは意味合いが違ってきます。そこに大きな隔たりがあると判断すれば、50分の内40分おしゃべりをしていたとしても良しとすることもありますし、それで気力が充実してきたと判断すれば、「何分はおしゃべり、何分は学習と決めようか」と提案していくことになります。学習内容もまた然りです。学年という枠にとらわれることなく、その子の興味や関心を大切にしながら学習計画を考えていきます。

最終的な目標は、10年後、20年後... 彼ら彼女らに充実した生活、幸せな生活を送ってもらえるようにすること他なりません。それを果たすためには、具体的に全日制高校に通えるようにするなど中期目標を定めたりもしますが、その子が今いるところから少しずつ前に進んでいけるよう、まずは「プラス1」の位置に到達目標を設定することを心がけています。

⑥ あたりまえ？ わかったつもりにならない

一歩先に到達目標を設定するといっても、その子が今いるところがわからなければ目標を設定することはできません。そこで大切になってくるのが「アセスメント」です。ジョン・デューイ(1897)は、次のように述べています。

Education must begin with a psychological insight
into the child's capacities, interests, and habits.

教育は、子どもの能力や興味、habits を見抜く
心理学的洞察をもって始められなければならない

「assessment: アセスメント」は辞書で「評価、査定」などありますが、原義は「かたわらに座ること」、すなわち「座ってよく見ること」を意味します。もちろんただ見ていればよいということではなく、デューイの真意はともかく、ここでいう「心理学的洞察」も「アセスメント」に等しいと考えて差し支えないでしょう。私たちは毎日のミーティングの中で、子どもたちの興味関心や habits 等について意見交換を重ねています。

そこで改めてデューイの言葉を見返していただきたいのですが、ここでいう habits は何を指しているのでしょうか。授業の中で、私たちは具体的に何を見るべきなのでしょう。これが単語テストであれば、habit を「習慣(癖でも?)」と訳せればそれで点数がもらえると思いますが、それでは英単語を日本語に置き換えたということに過ぎません。この「わかっているつもり」ほど、見る側の視力を奪うものもありません。

habit は have と同じ語源から生まれた語で、ここでは「身につけたもの」とでも訳すべきでしょう。英語教育を例にすれば、「すでに何語かを身につけているのか、初めての語か(母国語か外国語か)」「すでに何語かを身につけているのなら、それは英語に近い語なのか、それともかけ離れた語か」、さらに「学習そのものに劣等感を身につけていないか」などをよく見ろと言っているのだと思います。

教育という場面におけるアセスメントを「評価、査定」などと捉えたら、それはもう神がなすべき領域であって私たちのような凡人の及ぶところではなくなってしまいます。私たちにできることはせいぜい「かたわらに座ってよく見ること」かと思います。しかし私たちは、経験を積むほどに、「この子はあの子に似ている」などといった先入観に左右されがちになります。そう考えると、経験の浅いスタッフと経験豊富なスタッフとのどちらがより優れているのか、一概には言えなくなります。私たちが毎日のミーティングを大切にしているのは、一方で知識や経験の不足による誤解を防ぎ、他方で先入観による勘違い、偏見を排除し、意見を交換することで洞察を深めることに他なりません。

ライズ学園での授業は中高校生でも国語・数学・英語の授業は週に2時間、社会・理科は週に1時間しかありません。それでも学校の授業に追いつき、かえって成績を向上させる子も少なくありません。それを可能としているのは、1対1またはそれに近い人数で行われる授業です。

しかしそれも、アセスメントがあってこそです。いくら人数を少なくしたところで個に応じた指導がなされなければ、せっかくの少人数制も有名無実になり果てます。アセスメントについては、学校や医療機関その他の専門機関等との連携など多く課題が残されています。それでも一定の成果をあげてこられたのは、一人ひとりを見ることを大切にしてきた結果だと思います。

⑦ 主語を確認する

「不登校って何？」の中で取り上げた「机の上に足を投げ出して授業を受けている生徒の事例」を振り返ってみましょう。④では「教えることもおろそかにすべきでない」と書きましたが、ここはマナーを指導すべき場面でしょうか？

答えは No だと思います。外国の方が知らずに靴を履いたまま座敷にあがってしまったというならこれは「教える」べきですが、マナー違反を十分承知の上で行っているならそれこそ「わかってる。大きなお世話！」に違いありません。

足を投げ出されるのは誰だって気分のいいものではありませんから、「いやだ」と伝えることはあっていいと思います。しかしここで気をつけなければいけないのは、「誰を主語にして考えているか」ということです。この場面では、生徒を見ていたようで足だけを見ていたと思います。そして以下のように、自分を主語にしてしか考えていなかったと思います。

- ① 私は、机の上に投げ出された足を見ていた
- ② 私は、それを不快に感じ、困ったことだと思っていた
- ③ そこで私は、その足をおろさせようと思っていた

それでは「周りの子どもたちは…」という声もあると思いますが、「授業を中断して大声を出している先生の方が…」と言われたのもすでに書いたとおりです。そこで今度は主語を変え、次のように考えれば自ずと対応は違ってきます。

- ① 彼は、机の上に足を投げ出していた
- ② 彼は、それが良いことではないとわかっていた
- ③ それでも足を投げ出していたのは ...

アセスメントの大切さは、教科学習に限ったことでないことはいうまでもありません。そしていずれにおいても「わかったつもりにならない」ことが大切であり、同じように「相手(子ども)の立場に立っているつもりにならない」ことが肝要です。「よく見ること」は口で言うほど簡単なことではありません。一歩下がればわかることも、当事者同士では見えにくくなることもあります。

言葉数は少ないが何事もじっくり考え慎重に取り組む子に、「もう少し積極的に...」「人前でも自分の意見がきちんと言えるように...」などというのは「ないものねだり」ではないでしょうか。「教えることも大切にする」「背中への押し具合が難しい」と書いてきました。これらは「バランスを取ることが大切」と言いかえても良いと思います。そしてその「バランス」について考えるときには、「主語が誰になっているか」を常に意識することが大切だと思っています。

⑧ ‘体験的に学ぶ機会’を大切にする

ライズ学園では毎年、「NPO法人自然生クラブ」が主催する「田楽の集い 田植え・稲刈り」に参加しています。表紙の写真はそのときの様子です。特に田植えは、泥で汚れることを嫌う子もいますが、これを厭わなくなるとなぜか教科学習の成績まで向上するから不思議です。

あるときは一人の中学生が、小川できれいに洗った足を拭きながら、
「ふと思ったんですけど、ここっとうずっとお米を作っているんですね」と言い出しました。筑波山麓一帯は、関東でももっとも古くから米作りが行われていたと思われます。その田もおそらくは1,000年、もしかするとそれ以上の歴史をもつかもしれません。
「え、そんなにですか」と驚いた彼は、
「でも、どうしてずっと同じ作物を作っていても大丈夫なんですかね」と言い、同級生と二人であたりの山を見渡していました。

ライズ学園では朝の会などで、しばしば時事問題を取り上げます。小・中・高校生が一緒に話を聞くので、年少の子には少し難しいかなと思うときもありますが皆それなりに話を聞いています。わからなければ、「それってこういうこと？」と質問をしてくることもありますし、「でも、...じゃないんですか」などと年上の子に混じって発言する子もいます。

中学生にせよ高校生にせよ、最初は「いや、別に興味ありませんから...」というのがごく当たり前の反応です。だからといって「難しいだろう。まだ無理だろう」と話をしなければそれまでですが、少しずつ折りあるごとに話をします。今では「よそでは、こんなに活発でこんなに質の高い意見交換は行われないうだろう」とさえ思うほどであり、「この子たちはどこでこのような知識を身につけてくるのだろう」と、不思議に思うことも度々です。

先ほどの場面で、彼らの脳裡には「連作障害」や「サスティナビリティ(持続可能性)」という言葉は浮かんでいなかったかもしれません。それより以前、「認定NPO法人 矢塚の自然と歴史の会」の皆さんにガイドしていただいた里山の景色も、心のどこかに浮かんでいたのかどうかそれもわかりません。しかし、小学中学年からライズ学園に通う彼らが朝の会や社会科の授業の中で学んだ事々が、よく耕された田の土の触感とひとつになって何かを感じさせていたように思えます。

ライズ学園における教科学習の時間はいわゆる‘学校’の半分にも満たないものですが、「体験的な学びの機会」はそれに劣っていないと思います。少ない教科学習の時間でも、子どもたちの知識はより深いものとなっているとさえ思います。テストの点数を取るためのいわば「静的な知識」ではなく、盛んにブラウン運動を繰り返す微粒子のような「動的な知識」ということであればなおさらです。これも「体験を通じて得た、自ら学ぶ姿勢」に依るものと思います。さらにそれは、地域の人々の協力があってこそ可能になることも、改めて確認したいと思います。

⑨ 試行錯誤の権利を尊重する

教科学習と体験的な学習との別なく、私たちが重視しているのは「気づき」を大切にすることであり、気づきに至るための「試行錯誤の権利」を尊重することです。「その子なりの学びのペースを尊ぶ」と、言いかえても良いかと思います。

国語の授業で、「ごんぎつねを仕留めたときの兵十の気持ちは…」と質問されたときには「㊦ やっつけたぞ」が正解で、「㊧ しまった。殺すつもりはなかった」は間違いだそうです。なぜ、兵十の心の中に一抹の寂寥感もなかったと言い切れるのでしょうか。文学作品の解釈は人それぞれであっても良いはずですが。しかし学校のテストでは、「イ」は不正解で‘0点’になってしまいます。考えてみれば、とても奇妙な話です。

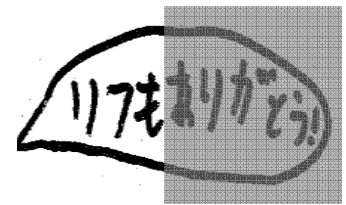
ライズ学園に舞台演出家をお招きしたときのこと、ある場面の中の「やだなあ、やめてよ」のようなセリフを「自分なりの解釈で読んでみる」という課題が出されました。ある女の子が、「(登場人物は)怒っているんじゃないかな」と言ったのに対して、スタッフは「うーん、でも、それはないんじゃないかな」と、返しました。するとその講師の方は「いや、そうでもないでしょう。怒っているとしたら、こんな感じですかねえ…」と、脚本を読み聞かせてくれました。とても新鮮であるとともに、日頃から「みんなちがって みんないい」などと言っているくせに、わかっているようでわかっていない自分たちに気がつかされた経験でもありました。

テストはできたほうがいいかもしれませんが。しかし安易に正解を求める「教育」こそが、子どもたちの考える力を奪っているとは言えないでしょうか。問題集の巻末には模範解答が添えられています。社会生活で直面する問題の多くに「正解」は用意されていません。「指示待ち人間」のような言葉も、学校教育の負の効果によって生み出されたとも考えられます。



写真はイメージです
試行錯誤を尊重することで、自ら気づき考える力を伸ばす

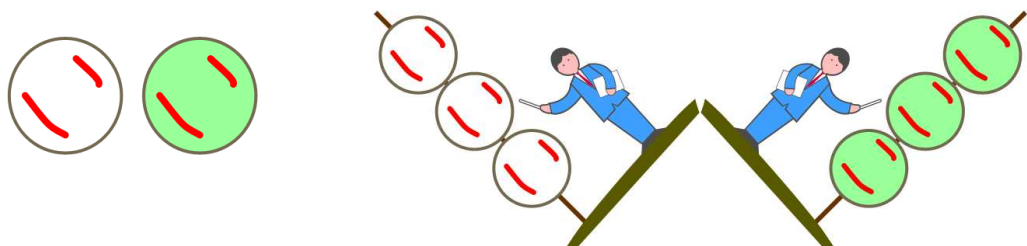
右の文字は、ある小学生が書いたものです。全体を見れば「いつも」と読むこともできますが、最初の部分だけを見ると「リフも」のように見えてしまいます。しかし多くの小学生が書く「い」は大体このようなものです。「い」はひらがなの中でも、もっともやさしい文字の1つかと思えます。しかし、ひらがなは草書体の漢字を簡略化したものであり、その丸みや微妙な傾きは、小学生にとってはなかなか難しいものです。



しかし文字を書く練習に際しては、「初めからお手本通りに、正確に」という考え方が根強くあります。もし、野球を始めたばかりの子がプロ選手の投球ホームやバッティングホームを真似していたら、誰もが「まずは基本から…」と、言うに違いないと思います。しかし文字の練習ではなぜ、子どもたちの成長段階を無視してまで「最初から正しく美しい文字を…」というのでしょうか。その根拠は、いったいどこにあるのでしょうか。

⑤でも書いたように、ポイントはその子に応じた到達目標を設定してスモール・ステップを踏むことです。もし、「い」を「縦棒2本」のように書いても、まずはほめることから始めます。そして時を見て「どこをどうしたら、もっと上手になるかな」などと問いかけながら、無理なく、一人ひとりのペースに合わせて練習できるようにします。「い」と「こ」を混同してしまうような — 程度の差はあっても、このような文字の識別に戸惑う子は各クラスに必ず数人います — 「い」は「縦棒2本」、「こ」は「横線2本」と、文字の基本形を確認したうえで、スモール・ステップを踏むようにします。

野球や習字では手をとって教えることも有効なのかもしれませんが、何にせよ手の出し過ぎは禁物です。大人が子どもの手を取って書かせるよりは、子ども自身に「違い」を発見させることです。私たちは、間違えることの大切さを理解し、子どもたちが試行錯誤を繰り返す権利を尊重しなければなりません。ここでゆっくりと時間をかけることが、ひいては「課題を自ら発見し、主体的に学ぶ力」を養うことにもつながります。



※ ひらがなも意外と難しいものです。左の文字では、「い」と「こ」は区別できません。「い」と「こ」を区別するには、重力に関する意識も関与しているのかもしれません。

⑩ 保護者・学校との連携

ライズ学園のような学びの場でも、説明責任を負うのは当然のことだと思います。私たちは各ご家庭に月ごとの登園日数や学習状況などを文書でお知らせするようにしています。保護者の皆さんとのコミュニケーションの場としては、送り迎えの際のわずかな時間も貴重です。毎月の保護者会、年に1回の親子バーベキュー、田植えや稲刈りにも参加いただく他、必要に応じて二者、三者面談も行っています。

子どもたちが在籍する学校にも、各ご家庭にお届けしたものと同じ文書をお送りしています。新たに入園者が出た場合、学校にはまず一度ご挨拶に伺います。そこで登園を出席扱いにさせていただけるようお願いすると同時に、このような文書をお届けすることをお話させていただきます。年に2回ほどに過ぎませんが、オープンスクールにも参加いただけるようにお声がけをしています。

保護者の中には、「学校とは一切接触をもちたくない」という方もいらっしゃいます。たしかに、学校の対応に首を傾げてしまうことがないとは言いません。しかし双方からお話を聞けば、すれ違いが誤解を生み、誤解がすれ違いを生んでいるケースが大半です。ライズ学園に通えば、地元地域とのつながりは薄くなりがちです。仮に学校に戻らなかったとしても、地域で暮らす以上はそのつながりを大切にする必要があると思います。それには学校との連携も重要だと私たちは考えます。

ライズ学園のモットーは「みんながって みんないい」、そしてリヴォルヴ学校教育研究所では、「対立から共育へ」をモットーとしています。大人と子ども、立場によって違いがあることも確かですが、保護者だから、先生だからといって誰でも完璧であり得るはずはありません。子どもたちのためにも、お互いの非を責めるより、助け合い、支え合う姿を見せられたなと思います。

子どもたちが市町村が設置する適応指導教室に通っていたり、病院に通院するなどしていれば、それらの機関との協働も重要です。これまでに何度か、保護者の皆さんや担任の先生、適応指導教室のカウンセラーさん、病院の先生等々ケースに応じて情報交換会をもちましたが、いずれも単発、または数回のみで終わっており、成果をあげているとはいえない状況です。何事、多くの課題を残すライズ学園ですが、この点は今後もっとも注力すべき課題だと思っています。

▶ 私にとってのライズ学園



卒園生 Nさん

ライズを卒園して八年、忘れえない出来事がある。ある子が私のことをひどくいじめるような言動をとり、我慢が限界を突破し、ついに私はその子を殴ってしまった。相手もこちらも泣いた。私のほうがこっぴどく叱られるものだと思っていた。しかし小野村先生は苦笑して、泣きじゃくっている私に、「Nなら、もうわかってるよな？」それだけだった。

小野村先生は私の善良さを信じてくれたし、私の立場を理解してくれたし、また私が相手を許すだろうということも希望してくれたのだと思う。結局私はその子と仲直りをした。ここまで人間を理解して許容してくれる場所が子どもたちのためにあるということは、なんて素晴らしい。ライズとは、そういう場所だ。

ライズを卒園したのは八年前、そこから通信制の大学に入学するまでさらに数年がかかった。中学時代に持病を得てしまい、ライズというサポートを一時持てたが、そこから先は完全に手探りである。学校のルールから落とされた人間に対して社会は道一筋もない荒野に等しい。そして大学入学後もまたさらに、道のない道が続く。あまりにもアウトサイダーに厳しい社会を、あの日ライズで得た自尊心という靴で、私は進んでいく。

▶ 私にとってのライズ学園



卒園生保護者 Mさん

我が家は2人の子どもが、ライズ学園にお世話になりました。上の子は小学校から高校までです。識字書字に苦手感があり不登校につながりましたが、スタッフの個別の熱心な指導により、識字は遜色ないレベルに達しました。何より、異年齢の小さな集団で、人としての思いやりや責任感、努力の大切さ、社会的スキルを身につけました。その後入学試験を突破し、充実した大学生生活を送りました。卒業時にはマイスターの称号をもらいメダルも授与されました。

今社会の厳しさの壁に突き当たり、若干減速状態ではありますが、自分の適性を生かした充実した道を歩むことができるはずです。それは、ライズで培った人としての底力の賜物であると思います。

下の子は、小学校時代の4年間でしたが、皆さんのご指導により、思いやりのある子に育ちました。卓越した指導により、英語が得意となり、それを生かして大学に進学し、充実したキャンパスライフを送っています。

子どもたちは、学校に行けなくなった当初はすっかり自信を無くしていましたが、個性や長所に着目し、伸長させる教育方針のライズで、笑顔を取り戻すことができました。この様に、のびのびと育てくれたのは、ひとえに皆さんの理解と愛情に満ちた指導のおかげです。

今、フリースクールの社会的理解が高まり、その役割や制度が大きく変化しつつあります。時代転換の瞬間に立っています。そのなかで、活動がさらに発展することを願っております。

▶ 私にとってのライズ学園



卒園生保護者 Yさん

現在大学2年生の息子がライズ学園でお世話になったのは、小学校4年生から中学校3年生までの、およそ6年間でした。ライズ学園では、先生やスタッフの方々全員が、子供たち一人一人を尊重し、丁寧に受け入れ向き合ってくれます。そこでの活動は小学生から高校生までの全員が一緒に行われ、その中で子供達同士も、受け入れたり、受け入れてもらったり、助けたり、助けられたりしながら、多くの経験や気づきに出合えます。

息子は、人とぶつかることもしばしばありましたが、ライズ学園で過ごす中、他人を思いやり受け入れる姿勢ができ、自分の思いも表現できるようになると、人とのコミュニケーションもスムーズになってきました。遠くから静観することを選んでいたフリークライミングでは、勇気を出して挑戦しただけではなく、一步一步上を向き、遂には一番上まで登れるようになりました。

元々好きだった物づくりは、自分の興味を更に追求する事ができ、模型やスタンプ等、豊富なアイデアを表現した立派な作品も作りました。将来を見据えて取り入れられている学習面のサポートにより、学園在籍中に英検3級を取得できたことも、本人にとって非常に大きな自信につながりました。

ライズ学園では、息子のみならず親の私も大変お世話になりました。それまで、こうでなくてはいけない、とか、こうするべきだ、と考えがちであった私も子供達同様に受け入れて頂き、貴重な気づきをたくさん頂きました。息子は今、美術大学でデザインの勉強をしています。ライズ学園に通う中想像力創造力が更に養われ、中学生の時から決めていた進む道を、一步一步前を向いて歩んでいます。私の友人たちに、息子が普通の学校ではなく、ライズ学園に行った事が良かったんじゃない、と言われることが良くあります。私も心からそう思っています。

Ⅱ 私たちが行ってきたこと

ライズ学園ってどんなところなの？どんな風に過ごしているの？

ここでは、ライズ学園の概要と日々行っている教科学習と体験活動の実践をご紹介します。

1. ライズ学園の活動概要

ライズ学園は、「みんなちがって みんないい」をモットーに、認定NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所が運営するいわゆるもう1つの‘学びの場’です。通園生の大半は不登校と呼ばれる状態にある子どもたちですが、不登校を経験せずにライズ学園を選択する生徒もいます。

まず特長としてあげられるのは、教科学習支援に力を注いでいることです。個に応じた学習サポートにより、毎年何人もの生徒が高校や大学への進学を果たしています。野菜作りや調理、スポーツなど体験的な学びも大切にしています。

もう1つのモットーは「対立から共育へ」。毎月、子どもたちの生活、学びの様子をA4版1枚にまとめ、各ご家庭、そして学校にもお届けし、共通理解を心がけています。カウンセラーによる月1回の保護者会の他、年に2回はオープンスクールも開催しています。

① 基本情報（2015年現在）

平成12年11月に開園。当初は週に半日だけ、平成13年度は週に3日、平成14年度からは週に4日開級しています。1週間に半日だけ登園する子、4日すべて登園する子、学校や適応指導教室と併用している子など通い方は様々です。

対象学年	原則小学3年生～中学3年生(高校3年生) ※ 中学3年次に在籍し、通信制高校または高卒認定試験受験を選択をした子については、高校卒業まで引き続きサポートを行っている。
定員	15名
開級日	月・火・水・金曜日 10:00～15:00
長期休業	春休み冬休み 公立小中学校の休業日に前後1日ずつ加えた日数 夏休み 8月1日～8月31日
月謝	週あたりの登園日数× 11,000円 / 月 ※ 1時間当たり550円を基準額として算出
教材費	週あたりの登園日数× 1,000円 / 月
年会費	12,000円
スタッフ	教科支援スタッフ8名、心理カウンセラー1名(保護者会担当)

② ライズ学園の特長

- ・「みんなちがって みんないい」をモットーに、興味や関心、得意や苦手、到達状況などに応じた教科学習支援に力を注いでいます。
- ・地域の皆さんの協力も得ながら、農作業や調理など体験的活動にも力を入れています。
- ・スタッフの研修にも力を注ぎ、より質の高いサポートを心がけています。
- ・スタッフの多くが教員免許を所持しているほか、学生などが子どもたちのサポートにあたっています。
- ・カウンセラーによる定期的な保護者会のほか、月毎の活動の様子を文書で家庭にお伝えしています。
- ・学校や教育委員会とも連携を密にし、登園を出席扱いにさせていただくなどしています。

③ 入会までの流れ

入会までにはゆっくりと時間をかけるようにしています。これまでのケースからも、ゆっくり過ぎるぐらいのほうが、後々良い方に向かうことが多いと感じています。

【予約見学】

事前に予約を入れていただきます。見学では、実際に授業を行っている様子をご覧いただきます。また、保護者の方からのお話をお伺いする時間を設けています。

↓

【体験・登園開始】

本人も、そして周囲の子どもたちもお互いに少しずつ慣れていけるよう、体験登園期間を設けています。日数もまずは半日(午前または午後)から、少しずつ増やしていくことをお勧めしています。

↓

【入会】

登園開始後、3ヶ月を目安に、入会の意志についてお伺いいたします。

入会后、保護者の了承を得て、在籍校へ挨拶に伺い、ライズ学園への登園を出席日数として認めていただけるよう依頼します。

④ ライズ学園の1日

10:00～10:30	登園	電車やバス、保護者の送迎など登園手段も様々です。登園時間に幅をもたせ、ゆっくりスタートできるようにしています。
10:30～10:40	朝の会	朝の会では、その日の予定や連絡事項とともに、新聞記事からの時事問題等について子どもたちと話をすることもあります。
10:40～11:30	1時間目	本人や保護者の方と相談しながら、学年にとらわれず、個に応じた学習計画を立て、個別または少人数グループで学習を進めていきます。
11:40～12:30	2時間目	
12:30～13:00	昼食	昼食はお弁当持参です。子どもたちとスタッフがテーブルを囲む時間も大切なコミュニケーションの場となっています。
13:10～14:55	午後の活動	午後の時間は、スポーツや農作業、ライズタイムなど体験活動、集団活動を行っています。(曜日によって異なります)
14:55～15:00	帰りの会	帰りの会が終了すると、バスの時間やお迎えの時間を待つ間にみんなで掃除をします。
15:00～15:30	掃除・帰宅	

学園を立ち上げた当時、時間割を定め、各教科担当が学習指導をしているフリースクールはほとんどありませんでした。時間割を定めるまでには数年を要していますが、設立当初から子どもたちがしっかりと学力を身につける機会を提供したいという思いはありました。

公立学校と比べると少ない授業時間ですが、各教科とも工夫をこらし、基礎学力だけでなく応用力も身につけられるような学習支援を行っています。学習については、「教科学習」で詳しく紹介しています。

【一週間の授業時数】

- 小学生 国語2時間 算数2時間 社会1時間 理科1時間 英語1時間 家庭科1時間
- 中高校生 国語2時間 数学2時間 社会1時間 理科1時間 英語2時間
- 小中高校生共通 スポーツ2時間(毎週火曜午後) 絵画造形2時間(毎週金曜午前)
- その他(ライズタイムフリータイム等) 4時間

【小学生Aさんの時間割例】

	月曜日	火曜日	水曜日	金曜日
1	英語	算数	算数	絵画造形
2	国語	家庭科	国語	
	昼 休 み			
3	フリータイム 農作業	スポーツ	フリータイム ライズタイム カルチャー教室	理科
4				社会



スタッフ一人に対して多くても子ども2～3人で学習支援を行います

⑤ ライズ学園の1年

毎日の教科学習のほかに、年間を通して様々な活動をおこなっています。ライズタイム、農業体験、カルチャー教室、被災地支援については、「体験活動からの学び」で詳しく紹介しています。

ライズ学園年間行事例(平成26年度)

4月	お花見、農作業、保護者会	10月	ハロウィンパーティ、カルチャー教室 ライズタイム、保護者会
5月	田植え、農園体験、ライズタイム、 保護者会	11月	農園体験、親子バーベキュー カルチャー教室、ライズタイム、保護者会
6月	児童生徒在籍校訪問(適宜) 農作業、ライズタイム、保護者会	12月	クリスマス会、保護者懇談、カルチャー教 室、ライズタイム、保護者会、冬期休業
7月	オープンスクール、農作業、カルチャー 教室、ライズタイム、保護者会	1月	冬期休業、カルチャー教室 ライズタイム、保護者会
8月	夏季休業	2月	オープンスクール、カルチャー教室 ライズタイム、保護者会、 被災地支援バザー準備
9月	稲刈り、カルチャー教室、ライズタイム 保護者会	3月	保護者懇談、筑波山登山 お楽しみ会、保護者会、春期休業

○ ライズ学園年間行事の一例



【 親子バーベキュー 】

毎年11月には保護者の皆さんにも加わっていただいてバーベキューを行います。普段体験できない活動を通して親子間・保護者間交流を深めています。



【 筑波山登山 】

毎年3月には筑波山登山を行います。登りにくい道では男子が女子の手を引いたり、声を掛けあったりと、登山を通して、子どもたち同士のつながりも深まります。



【 お楽しみ会 】

みんなで軽食を作り、保護者の方を招待。親子一緒に食事を楽しみます。小学6年生と中学3年生には学年の区切りとし、ライズ学園からの卒業証書も渡します。

▶ 私にとってのライズ学園



リヴォルヴ学校教育研究所 理事 荻野 紀子

「新しい学びの場を作りたいんだ!少し手伝ってくれないか?」と、入院中の私に談話室で熱く語った小野村先生。「先生は仕事も辞めてなにを言ってるの?まだ小さい子もいるのに…?」と全く理解できませんでした。何度か話を聞くうちに熱い思いに負け、「退院したら、少しなら手伝っても良いですよ。」と返事をしていました。そして、人手が足りず事務局長とライズ学園のスタッフを兼任する事になりました。

教育とは無縁の私は分からない事だらけ、重ねて煩雑な法人化の手続き。何度も書類を突き返され、県庁や法務局へ足を運びました。この頃はまだNPO法人も認知されておらず、コピー機ひとつ借りるのも大変で、公民館のおじさんに嫌味を言われ泣いて帰って来た事もありました。そんな中、初めて100万円の助成金が取れた時はとてもうれしかったのを覚えています。「必要な事業をしていれば、お金は後から付いてくる!」との話は本当だなと思いました。

第一期生の子ども達。最初は一言も会話が有りませんでした。それがだんだんとジェスチャー混じりで一言言葉が出るようになり、徐々に二言、三言と増えて行きました。

最初は子ども達に何がしてあげられるのだろう?と思っていましたが、逆に子ども達からたくさんの事を教えてもらいました。また保護者の方々やスタッフの方々にも助けて頂きました。ライズは素晴らしい人材が自然と集まる場所だなと感じました。

振り返ってみると、私の人生はライズ学園の設立に関わってからというもの、大きく変化しました。今は結婚を機に転居し中々お手伝いできませんが、いつも陰ながら応援しています。

⑥ スタッフミーティング

ライズ学園では、朝と夕方にスタッフミーティングを設けています。

ミーティングでは、子どもたちの生活全般の様子と学習の様子を報告、現状を共有し、より良いサポートができるよう具体的な手立てを話し合います。

勤務日数が異なるスタッフが多いため、朝のミーティングでは、前日の子どもの様子を伝え、その日心がけること、注意することなどを共有するようにしています。子どもたちが登園してくる前に行うので、時間は30～40分程度です。

帰りのミーティングは、1時間～1時間半程度の時間をかけてじっくりと行います。その日の教室全体の様子、子どもの様子で気になったこと、学習の様子や課題になっていることなどを話し合います。その際、単に様子を報告するだけでなく、スタッフの声掛けや関わり方についても話し合います。「なぜその声掛けをしたのか」、「なぜその対応をしたのか」など、自分の考えた接し方以外にどんなことができたのかを振り返ります。ライズ学園のスタッフは20代～60代と幅広い年齢層で、培ってきた経験も様々です。私たちが毎日のミーティングを大切にしているのは、一方で知識や経験の不足による誤解を防ぎ、他方で先入観による勘違い、偏見を排除し、意見を交換することで洞察を深めることに他なりません。

私たちは、立派なスタッフであるよりは、一生懸命なスタッフでありたいと思っています。スタッフ自身が失敗をしたり悩みながらも前向きに生きる姿を見せられたなと思っています。悩みや困ったことが起きた時にはスタッフミーティングで意見交換をし、スタッフが一人で悩みを抱え込まないようにしています。ライズ学園のモットーである「みんなちがって みんないい」はスタッフにも言えることですが、スタッフ同士でもよい関係を築くことでそれぞれの個性を発揮できればと考えています。

例えば、注意をしなければならない子がいたとします。その場合、スタッフみんなで注意をするとうるさくなってしまい、効果は期待できません。そこで、スタッフAが叱り役になったら、スタッフBが子どもの話を聞く役になり、スタッフAをフォローするようにします。その子の状況やスタッフとの関係を見ながら、役割分担をするようにしています。

スタッフミーティングを進めるにあたっては、自分の思いや自分の常識を押しつけてはいないか、例えば「困っている」というとき、「困っているのは誰なのか、主語をはっきりさせる」ことや、問題があるなら「なぜ、何が問題なのか」という問いを繰り返しながらアセスメントを行うなどしています。（これらについて詳しくは、ライズ学園の実践の中でふれさせていただきます。）

他に職業をもつスタッフもいて機会は限られてしまっていますが、毎日のスタッフミーティング以外にも、夏休みや春休みなど長期休園の際には全員が集まっての研修も行うようにしています。そこでは子ども一人ひとりの現状と課題、支援方法を検討するとともに、講師を招いての事例検討会や支援方法の研修、研究も行っています。

⑦ スタッフの採用について

ここで、スタッフの採用についても説明させていただきます。採用に際しては、次のような過程を経て選考させていただきます。特に③の面接を重視して、私たちの思いを伝えさせていただきます。その後、仮採用期間を経て、思いを共有できるかどうかを相互に確認し合います。

- ① 郵送等で履歴書提出 ② 書類審査 ③ 面接 ④ 仮採用期間(2～3ヶ月)
⑤ 面接(勤務条件等を再確認) ⑥ 本採用

スタッフとして参加いただくには、まず常勤スタッフまたはボランティアスタッフとしての参加の2つのパターン、ボランティアスタッフとしてはさらに次の3パターンがあります。

有償ボランティアスタッフ(ボラ・バイト) … わずかながら時間給と交通費(実費)を支給

無償ボランティアスタッフ ① … 交通費(実費)のみを支給

無償ボランティアスタッフ ② … 交通費も支給せず。ボランティア保険経費のみライズ学園で負担

ご本人のご意思で「交通費もいらない」という方にはそのような対応させていただいたこともありますが、多くは有償ボランティア(ボラ・バイト)としてご協力をいただいています。例えば理科指導で協力いただいているボランティア・スタッフさんなど、人件費としてお支払いしている額よりも自腹で購入いただいている実験材料代の方が高いのではないかと思います。「心ばかりでも有償で…。その代わりより質の高い学習支援を」と、お願いしています。

▶ 私にとってのライズ学園



ライズ学園スタッフ 大嶋 愛子

T君は数週間、眠気に襲われて学習に集中できない日が続いていました。その日もとても眠そうでしたが、気の緩みが原因とみてみた私は「勉強しよう!」と繰り返し声を掛けていました。しかし本人からの反応はなく、うつぶせたままで授業は終わってしまいました。

スタッフミーティングでは、あらためてT君の様子を思い出してみんなで検討をしました。T君は、目がうつろでかなり眠そうだったが、最後まで寝はしなかった。学習する気がないのだと思っていたがそうではない? 眠気と戦っていた? そこで他のスタッフから、「アトピーがひどくなっていた。身体が痒くて熟睡できていないのでは?」という意見をもらいました。

その後、同じような場面で「眠いなら少し休んでもいいよ。どうしたい?」と本人に投げかけてみました。するとT君から「いや、勉強する。」としっかり答えが返ってきました。勉強させようと一方的に声掛けしていた以前とは、全く違う反応でした。T君の立場にたった声掛けだったから本人にも届いたのではないかと思います。

このように、スタッフミーティングで他のスタッフと話す中で気づき、学ぶことが本当に沢山あります。「この子はやる気がない」などと思い込んでいた自分を反省するとともに、ライズ学園の複数の視点で子どもをみることが出来るすばらしさを実感しています。

⑧ 保護者会

毎月1回、心理カウンセラーを交えての「保護者会」を開催しています。定員に余裕があれば、ライズ学園に通園している子どもたちの保護者でなくとも参加いただくことができます。もちろん参加を強制するものではありませんので、その月によって参加人数は異なります。カウンセラーと1対1でじっくり話せる時もあれば、保護者同士の話を聞き合うこともあります。

「子どもが不登校になってからは、懇談会などの学校行事に参加しにくくなり、他の保護者の方とのつながりがなくなってしまった」と、おっしゃる方も少なくありません。「誰かに話を聞いてもらいたくても、そんな機会が少なくて」という方もおられます。

月に1回1時間半という短い時間ですが、胸に抱えている悩みや思いを誰かに話す場所があること、保護者同士が情報を交換し合う場所があることは、とても大切なことだと考えました。

保護者会をきっかけに、保護者同士が自らお茶会を企画し、先輩お母さんを招いて話を聞くなど、ライズ以外の場所でも交流が生まれています。

普段接しているスタッフではないカウンセラーだからこそ打ち明けられる家族の問題、自身の問題等が話題に上がることもあります。カウンセラーは、必要と判断した情報は、保護者の方に了解いただいた上でスタッフに伝え、スタッフは保護者の状況、保護者との関係性も大事にしながら、子どもたちの支援にあたります。保護者が元気になることで、子どもたちも元気になることが、カウンセラーとスタッフの共通の願いです。

▶ 私にとってのライズ学園



保護者会担当 心理カウンセラー 鈴木 桂子

ライズ学園立ち上げ時より保護者会を担当してまいりました。子ども達をとりまく環境は日々変化しています。しかし、親が我が子と思う気持ちはいつの時代も同じだと感じます。ただ私が最近感じるのは、大人たちのコミュニケーション力が低下しているのでは?ということです。親も教師も社会の大人たちも、子どもを愛し大切に思っているのであれば、それが子どもに伝わる伝え方、聴き方の出来るに私達になることが一番だと思うのです。

子育てとは面倒なことの連続です。思い通りにいかないことだらけです。その手間隙をかけ続けることこそ「愛」だと思います。気づいた時から始めれば良いのです。出来なかったことを悔やむのではなく、反省したら行動を変えることを始めれば良いのです。

一人では気づけないことも人との関わりの中で親自身が変わります。子ども達は学校へ「行けない」のではなく「行かない」ことを決める能力をもっています。身近にいる親、祖父母、兄弟姉妹の関係と社会の大人たちの総合力で支援したいと考えます。保護者たちが孤立せず、自分が自分を認められるよう、大切に関わっていくことを大事にしています。ライズスタッフの総合力は素晴らしいと自負しています。

▶ 在園生の保護者の声



子ども達は時にぶつかり合いながらも良く相手の話を聞き、考え、それが成長につながっていると感じる。



ライズに来て、先生が生徒と向き合うとはこういうことだと思った。

年に一度のバーベキューは、父親も率先して参加できるイベントとなっており、家族間での交流も深まる。



それぞれの子どもに合ったきめ細やかな学習指導がとても良いと思います。

生活力を養う体験重視教育が良い。

スタッフミーティングが充実している。子ども達の状態を皆が共有しているため、親として安心感、信頼感がある。

生徒一人ひとりに合った柔軟な指導（接し方、教え方、プログラム、英単語カレンダーなどユニークな独自教材）

ライズの先生方は大人の目で、また子どもの目線になって、本当によく子どもを見て、寄り添ってくださっている。

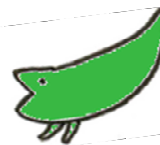
先生方の教育理念、情熱、献身的な姿勢が良い。

子ども同士の育ち、異年齢集団の良さがある。

自分のありのままでここにいていいのだと体感した時に子どもが変わる。

子ども達を一人の人間として尊重している。

スタッフの方々、子ども達、みなお互いの個性や存在を認め合い尊重していると感じられる。



安全安心な学びの環境。いじめがない。

子どもは「ライズは天国のようだ～」と言っています。

不登校で辛い思いをしている子どもさんや保護者の方々にこんな学びの場もあることを広く知ってほしいと思います。

学校に行っていないなくても公教育として支払わなければならないお金もあり、保護者の金銭的負担は大きい。ライズ学園のスタッフも骨身を削って経営に携わっているのに生徒のお月謝だけでは立ち行かない現実がある。

今、政治の場でもフリースクールがとりあげられています。どのように話がまとまるにせよ、ライズはいつまでもライズらしく、芯の通ったライズでいてほしいと思っています。



⑨ 学校との連携

ライズ学園に通うということは、それだけ地域から離れることにもなります。私たちは学校や地域との連携も大切にしながら、その子にとってより良い子育て環境が実現できればと考えています。子どもたちが市町村が設置する適応指導教室に通っていたり、病院に通院するなどしていれば、それらの機関との協働も大切にしたいと考えています。

これまでに何度か、保護者の皆さんや担任の先生、適応指導教室のカウンセラーさん、病院の先生等々ケースに応じて情報交換会をもちましたが、いずれも単発、または数回のみで終わっており、成果をあげているとはいえない状況です。何事、多くの課題を残すライズ学園ですが、この点は今後もっとも注力すべき課題だと思っています。

(1) 在籍校への訪問

入園が決まった段階で一度学校に伺い、登園を出席扱いにさせていただけるようお願いします。先生方とも、今後の連携の在り方を相談します。

(2) 毎月、出席日数や学習進度等を報告

出席状況、個別の学習内容、学園での様子を文書にまとめお送りします。(資料1) 保護者の方にも同じ文書をお渡しし、学校とライズ学園と保護者の三者が情報を共有するようにしています。お電話などでも、先生と直接話す機会を設けるようにしています。

(3) オープンスクールの実施

年に2回ほど、先生やスクールカウンセラーの方などを主な対象にオープンスクールを実施しています。オープンスクールをきっかけに、担任の先生と話をすることができ、少しずつ学校に足を向け始めたケースもありました。

▶ 私にとってのライズ学園



事務局 会計担当 椎名 千春

日頃は、活動に関するお金の管理、決算業務、スタッフの雇用に関する書類手続きなど団体の活動における庶務の仕事を受け持っています。

私は、リヴォルヴに入社して8年目になります。それまで、子育て一本で過ごしていましたが、下の子の小学校入学を機に、仕事を探し始めました。面接も終わり結果待ちの最中も仕事を探していたところ、中学時代の恩師が代表を務める団体、リヴォルヴの求人募集を発見し、面接を受けました。話を聞き、ライズの活動に共感、価値観が一致していました。

まだまだ未熟な親ですが、自分が子育てをしていく上で大切にしていることがあります。それは、年齢に関係なく、子どもを子ども扱いしない、個として接していることです。また私事ですが、保育ボランティア、自分たちで立ち上げた団体では、地域で活動している学級などでわらべうたや読み聞かせなどしています。同じように、ライズのスタッフも子ども達と接する際、個として接しており、また地域の関わりを大切にしていることに、自分との価値観の一致、また共鳴をしました。

これらの活動を通して、自分がりヴォルヴに対して何ができるのかを考え、活動していくことが、これからの課題だと思っています。

〇〇市立〇〇中学校 学校長 殿
担当教諭 殿

NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所
ライズ学園代表 小野村 哲

平成26年度 12月 出席状況

その月の出席状況を報告

通園の状況

1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日	13日	14日	15日	16日
	AM		*		*	*		AM		*		*	*		AM
17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	31日	
	*		*	*		*	*	*	*	*	*	*	*	*	



出席

- *日は、開園していない日
- 12/23～1/8は冬季休園日

登園日数 13 日／総開園日数 13 日

平成26年度 12月 ライズ学園活動の記録

全体の活動

学園全体の活動内容をお伝えしています。

造形教室 <松見公園「いやしの庭」看板制作、イモ版をつくろう> (毎月1回)
スポーツ教室 <ポートボール(パス練習、ドリブル練習、試合)> (毎月1回)
フリータイム <室内：ボードゲーム、カードゲーム 他>
ライズタイム <お世話になった人への年賀状作成(12/10)> カルチャー教室<太鼓教室(12/8)>
大掃除 <(12/15)> クリスマス会・保護者参観<(12/17)> 本屋へ行こう<(12/22)>

学習記録

各教科ごとにその月の学習内容をお伝えしています。

国語 教科書：脳のはたらきを見てみよう
数学 1次方程式の解き方
社会 第二次世界大戦～ヨーロッパ戦線、太平洋戦線～
理科 簡易分光器での太陽スペクトルの観察、光の三原色の合成、音の振動、音の三要素を学習、
英語 PCソフトを使ったフォニックスの基礎練習、英単語カレンダーの読み練習

学園での様子

国語では、要約文の書き方に取り組みました。じっくり考え、納得のいくまで何度も推敲を重ねながら書いていました。

英語では、ネイティブの子ども達用に開発されたPCソフトを使ったフォニックスの基礎練習に取り組みました。発音がきれいな上、吞み込みが早く、最初から設定された制限時間以内に課題をこなすことができていました。

調理では、慣れた手つきで手際よく調理をしていました。担当以外のメンバーにも「大丈夫？」と声をかけて、全体を見ながら調理を行っていました。周りの様子を見て、人出が足りないところにさりげなく入って手伝うなど、頼りになる存在です。

記録担当 ●●●●

学習内容と到達状況、生活の様子や他の子ども達との関わりをお伝えしています。

2. ライズ学園の実践記録

実践にあたって

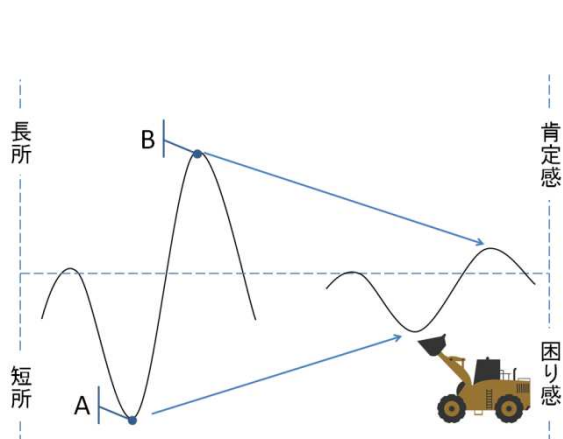
ここでは、ライズ学園での実践にあたって、特に大切にしていることをご紹介しますと思います。内容的には「Ⅰ 不登校って何？ ライズ学園が大切にしていること」と重複する部分もありますが、実践事例を織り交ぜながらより詳しくお話しさせていただきます。

1 得意を伸ばすということ

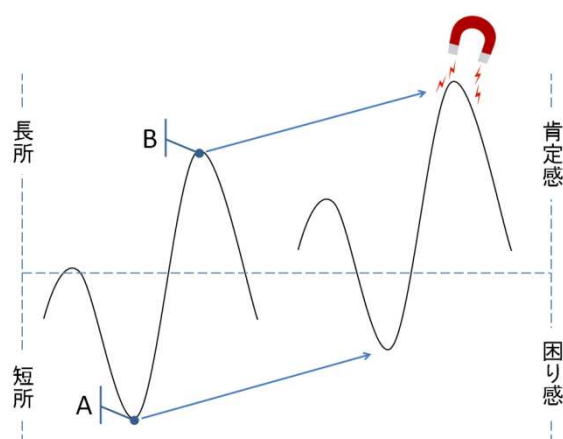
中学校くらいまでなら、通信簿でオール5を取れる人もいます。しかし、高度化、複雑化する社会ですべてにおいて完璧な人など存在し得るはずありません。不得意もあるけど得意もある人、特に得意も不得意もないけれど‘Help me?’を声にして仲間を集められる人など、これからの時代ますます多様な個性が求められるようになるでしょう。

「みんなちがって みんないい」をモットーとするライズ学園には、様々な個性が集います。そこで私たちが心がけてきたのは得意を伸ばすことです。不得意はないに越したことはない … かもしれませんが、長所は短所を、短所は長所を兼ねるとも言います。無理に不得意をなくそうとすれば、長所（個性）を損ねてしまうことにもなりかねません。「でこぼこ」はそのまま残ったとしても、長所を伸ばすことで本人自身や周囲の肯定感が高まれば、自ずと困り感は減じます。

あのアインシュタインは科学者として名を馳せるようになってからも、かけ算九九ができなかったといひます。直接お話を聞いた数学者の中にも「あんなもの覚える必要があるんですか？ 計算したほうが速いでしょう」という人が少なくありませんから、あり得ない話ではありません。そこで考えたいのは、今、目の前に小学生のアインシュタインが現れたらということです。自信を失って小さくなっている彼からは、まず誰もその天才性を見抜くことができず、サインをもらっておこうなどという人は一人もいないに違いありません。ところが、その後の彼が「九九はできない」と言うのを聞けば、「天才は脳の仕組みからして違う」などと感想を漏らし、かえってその特異性を誉めそやす人さえ現れます。



短所を無理に押し上げようとすれば、ストレスが高まり長所まで損ないかねない

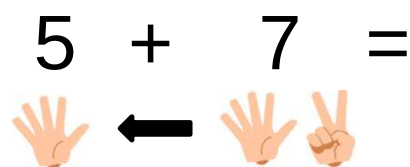


自他ともに肯定感が増すことで好循環が生まれれば、困り感も軽減する

得意を伸ばすなどと、当然すぎるほどに当然のことかもしれません。しかし、子どもたちのもとに送られてくるダイレクトメールの類には、毎度のように「不得意科目の克服！」などの見出しが躍っています。沈黙考型の子どもたちには積極性が求められ、活動的な子どもたちは「もう少し落ち着いて…」と、諭されるなどします。「不得意科目の克服！」は、周囲の目も、自身の目も短所にばかり注意を向かわせます。得意の伸長は掛け声ばかりで実を伴わず、アインシュタインに勝るとも劣らぬ可能性を秘めた子がいたとしても、「九九も覚えられない子」として可能性の芽を摘み取られてしまう。これが現状ではないでしょうか。

少し具体例を挙げてみましょう。次のような算数の問題を解くのに、数字と、数字が表す数の概念とを結びつけるのに苦労をしている子には、指で数を示したイラストを添えます。事実、このようなところでつまずきを見せる子どもたちにかぎって、後に人並み外れた数学的思考能力を発揮することもあります。「算数は嫌いだけど、数学は好きだ」という声もよく耳にします。

‘数字’を通して学ぶことに苦手がある子に、なぜ「指を使ってはいけない」と指導する必要があるのでしょうか。詳しくは後述しますが、「言語的手がかり」をもとに学習を進めたほうが身につやすい「継次優位」な子に対して、「同時優位」な子には「視覚的・運動的手がかり」を生かし、「パー」と「パー」を合わせれば 10 になることを実際に手ぶりで示すなどします。



「パー」と「パー」で10、残りは2。指を使うなどの具体的操作自体が大事なステップであり、成長段階や個性を無視してそれを禁ずべき理由は見当たりにません。これを「恥ずかしい」という子がいれば、まずは机の下、膝の上で、次は頭の中のイメージへと発展させます。

気をつけたいのは、固定概念にとらわれた指導で子どもたちを勉強嫌いにしてしまうことです。3 と 5 という数字の識別で混乱している子には、数字ではなく指などの実物を使って数操作をさせます。少し慣れてきたら、‘目では’見ずに膝の上で操作させるようにし、少しずつ頭の中でそれができるようにします。

子どもたちの中には、私たちが「かけ算九九」を覚えるのと同じように、 $5 + 7 = 12$ という計算を呪文のように唱えて暗記してしまう子もいます。このようなタイプの子は小学生の間は好成績を収めることもありますが、中学以降では大きくつまずくこともあります。呪文を唱えているというだけで、本当の意味では足し算ができていないことさえあります。それを防ぐためには、指を使うなどして計算をする機会を保障することも大切です。

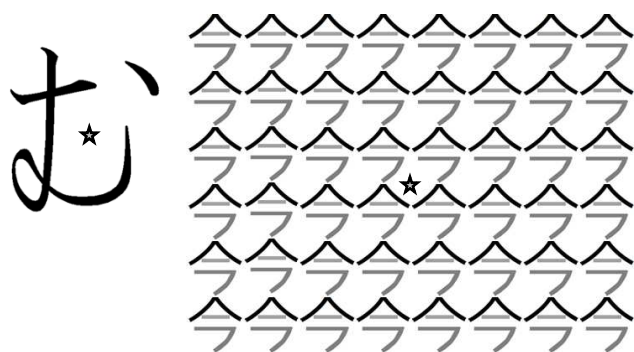
子どもたちの中には、ハイハイをせずにいきなり立って歩き始める子もいます。歩き始めるのも早ければ良いということではなく、ハイハイもまた筋力づくりの上でとても大切な過程だと聞いたことがあります。それと同じことが、ここでも言えます。

読み書きが苦手といっても、これも様々です。漢字が苦手という子もいれば、ひらがなやカタカナの方が難しいという子もいます。書くことのみを苦手にする子には、読んで理解することを中心にした授業を進めます。作文にはコンピュータを使用させます。

そうして学習を続けた生徒が、中学3年生になって急に立派な — 書く速度はとてもゆっくりでしたが — 漢字を書き始めたこともありました。「えっ！ 何？ どうしたの？」と驚く私たちに、彼は「まあ、中3ですからね」と、ひょうひょうと言い放ちました。

読みにも苦手がある子は、ボキャブラリーが不足しがちになるので注意が必要です。その場合は、読み聞かせをするようにしますが、小学中学年以上では本人のプライドを傷つけないような配慮も必要になってきます。スタッフが書かれた内容を読み上げ、その内容について話し合い、感じたことなどをコンピュータを使ってまとめさせるなどします。ビデオ教材を多用するのも方法です。

これまでの実践経験と数々の先行研究の結果から推測すると、一時的なものであったとしても 3 と 5 や b / d / p / q などの識別で混乱する児童生徒は、少なくとも全体の10～20%ほどに達すると思われます。さらに、大量生産される工業製品とは違って、人の場合は心理的要素も無視することはできません。大人でも、「人」と「入」などの漢字をじっと見ていると、混乱に陥り区別ができなくなります。筆者もその一人で、これを考え始めると頭痛がし始めてイライラします。そのような状態にあるときにもし誰かから、「どうしてこんな漢字も覚えられないの！」と叱られたら、10～20%という数字は倍加するかもしれません。数ヶ月すれば自然と身につくはずだったものが、何年間も引きずることになる可能性もあります。反対に、適切な支援がなされれば、10～20%という数字はその1/10ほどにまで減少するという研究報告もあります。



夏目漱石は「門」の中で、登場人物に次のように語らせています。

「字」と云うものは不思議だよ。やさしい字でも、こりや変だと思って疑ぐり出すと分らなくなる。この間も「今」の字で大変迷った。じっと眺めていると何だか違った様な気がする。仕舞には見れば見る程「今」らしくなくなって来る。(一部中略)

試しに「む」「今」の中央にある☆印をじっと見つめてみてください。文字を覚えるには「よく見て何度も書く」ととされますが、これも逆効果になる場合があります。部分を色分けなどすると、なおさらです。

いくら「みんなちがって みんないい」といっても、場合によることは言うまでもありません。ライズ学園でも「駄目なことは駄目」だと伝えますし、苦手な補強も行います。このあたりのバランスはスタッフ間でも常に議論となるところですが、子どもたちの「試行錯誤の権利」を尊重しながら、一人ひとりに異なる「学び・育ちの機会」を保障することにこそ、ライズ学園の存在価値があると私たちは考えています。

2 アセスメントの手順

ライズ学園で大切にしていることの1つに、子どもたちを「よく見る」ことがあります。「2.ライズ学園が大切にしていること」の中では、「わかったつもり」ほど見る目を損なうものもないと書きましたが、それを防ぐことがまたとても難しいことであることも再確認をしておきたいと思います。

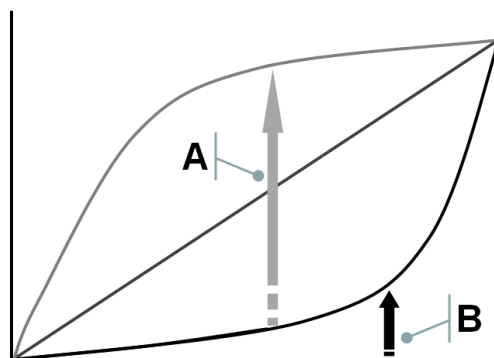
私たちの脳は、開けた草原と視界が利かない茂みがあれば、危険が潜む恐れがある茂みに無意識のうちにも注意が向くようプログラミングされていたと考えられます。その名残でしょうか、私たちの視線は長所よりも短所に向かいがちです。他人についても自分自身についても、それは同様です。自信を失い始めればなおさらのこと、「いくら努力しても、できるようにならない。遅れるばかり…」と、悪循環を加速させてしまいます。こうなると、「テスト」を含めた学校で行われるあらゆる教育活動がマイナスに作用し、その子なりの育ち

を阻害する要因ともなります。

誤解がないようにすべきかと思いますが、テストそのものが悪いということではありません。通常教室で行われるテストは、アセスメントの一手段(であるはずのもの)です。本当に良いテストは、これもまた本当に良い授業と相まって生徒の力を伸長させます。しかし誤用すれば害になるという点でも、アセスメントと教室で行われるテストとは共通します。本冊の趣旨から逸れますのでこれ以上は言及しませんが、テストについても私たちはその重要性を再認識すべきかと思います。

ここで確認したいのは、ゆっくり伸びるタイプの子は早々に劣等感を抱きやすいということです。語る言葉はただどしだったとしても、子どもたちはおそらく大人以上に敏感な触覚を備えています。情報にあふれた社会では、誰に何を言われなかったとしても自信を失いがちであることをまずは確認すべきです。支援をする側は、自信も意欲も喪失して肩をすぼめている姿や、その結果、実際以上に低く表れがちな心理テストの結果などに惑わされることなく、その子なりの学び・育ちを見極めるべく努める必要があります。

実際の場面では、ただ「困った」を繰り返すばかりで、「困った」という問題の本質をつかむことができず、堂々巡りの議論を繰り返していることも少なくありません。そこでライズ学園のスタッフミーティング等の中では、以下のように‘何:What?’‘なぜ:Why?’を繰り返していきます。



早くから力を発揮する子や平均的な伸びを見せる子と比較(A)するのではなく、その子なりの学び・成長(B)を尊重する。

- | | |
|--------------------|----------|
| ① 何が、問題なのか | (問題を確認) |
| ② なぜ、……なのか | (原因を考え) |
| ③ 何をすればよいか | (具体策を検討) |
| ④ なぜ、それを行うのか | (目的を確認) |
| ⑤ 具体的に何を目標とするのか | (目標を設定) |
| ⑥ 何が達成されたのか/ 否か | (評価) |
| ⑦ なぜ、成果が上がったのか/ 否か | (振り返り) |

巻頭「不登校って何?」の中で取り上げた「机の上に足を投げ出している子」の事例を振り返ってみましょう。まず、何が問題かといえば答えは「机の上に投げだされた足」、次になぜそんなことをしているのかと考えれば「授業がつまらない」、「わからない」からなどの理由が考えられます。そこで改めて何が問題なのかと考えれば、私たちが見るべきは「足」ではなくその子自身であり、考えるべきは — 何の得にもならないのに — その子がなぜ、机の上に足を投げ出しているのかということです。

こうしてみると当たり前過ぎるほど当たり前なことです、見るべきものを捉えられず、「とにかく(私が不愉快だから)その足をおろしなさい!」と、してしまっていないでしょうか。ここで極めて重要なのは「何もわかっていない」という前提からスタートすることです。専門的な知識や支援経験は、それが豊富であればあるほどに見る目を曇らせもします。もちろんそれらが貴重な財産であることは疑いありませんし、支援する側も自身を否定すべきではありません。しかし「わかったつもりにならない」ことはとても難しく、先入観や偏見を完全に排除することは不可能です。よってアセスメントに際しては、複数の目で、異なる角度から見る必要があります。そもそもが①の段階の「問題」さえ、私たちは見過ごしがちです。「机の上に投げだされた足」は気づかずに過ごした私たちへのメッセージです。

3 アセスメントの実際

アセスメントはライズ学園における実践すべてに関わることで、もう少しページを割きたいと思います。ともすると短所にばかり目が行きがちな私たちは、アセスメントに際してもマイナス面をあげつらう傾向があります。しかし本来のそれは、「何が達成されなかったのか」を確かめるためではなく、「何かを達成」し、自他ともに「伸長を認める」ために行われるものであることは言うまでもありません。

2回連続で漢字の書き取りテストが0点だったとしても、前回すべて空欄だったものが漢字の一部だけでも書けていたなら、そこは評価すべきです。例えば

完全に書けている ...4点

小さなミスがある ...3点

大きなミスがある ...2点

一部分は書けている ...1点

などとするのも方法です。(これでは100点満点を超えてしまう。どうしても100点満点にする必要があるというなら、得点をパーセンテージに換算すれば済むことです)

すぐに暴力をふるってしまう子が、今日も友だちを叩いてしまったとしましょう。いつもなら止まらなくなってしまうところが一度だけで収まったとしたなら、

「人を叩いてはいけない。でも、今日は一度だけだったね」と、話します。こんなときは子どもたちも自責の念にかられ、「一度で止められた」ことには思いが至らないものです。

それでもし、

「いけないと思ったから...」などという言葉が返ってくれば、またはそんな様子が見て取れれば

「いけないと思ったの? — そうか、それはえらかったね」と成長を認めます。

当人に焦点を当てて考えれば、この場面での問題は「①:暴力をふるったことで、その子が自尊感情(自己肯定感)を下げていること」とも捉えられます。それが「②:自身の成長に気づけていないため」であるなら、「③それに気づけるようにする」必要があります。

次のステップ、④は見当違いの支援を防ぐために欠くべからざるステップです。今度は「漢字を書くことが苦手な子」のケースを例にしてみましょう。「②:なぜ、できないのか」に対して「練習をしてこない」、「③:何をすればよいのか」に対して「10回ずつノートに書く」ようにさせるとなったなら、それで本当に苦手が軽減できるかを確認します。

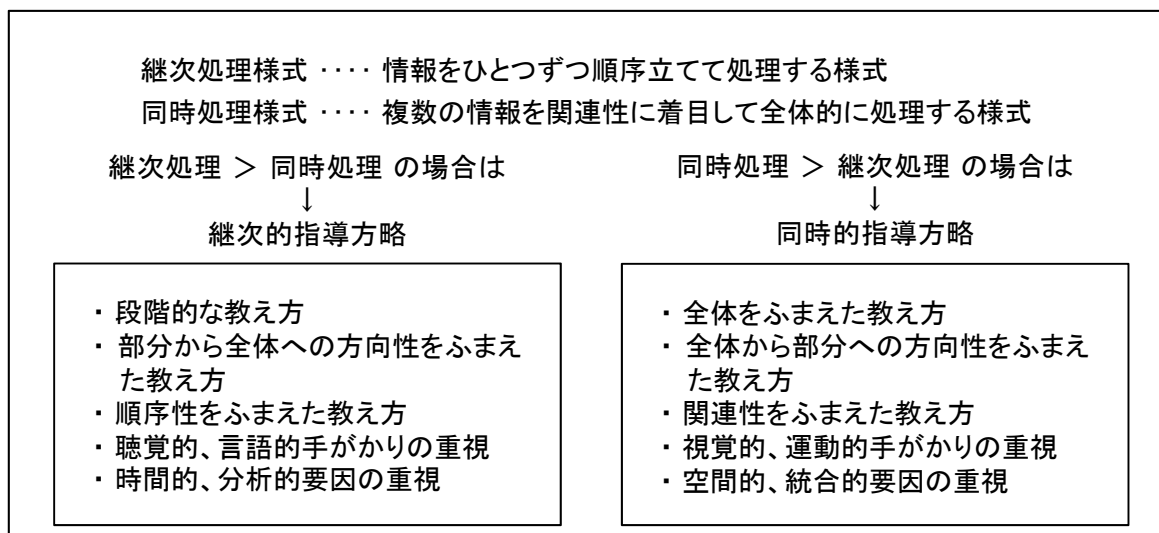
確認をすれば、練習をしてこない児童に「10回ずつ書いてきなさい」と言ったところで同じことの繰り返しになるであろうことが容易に予想されます。

そこで再び①に戻って「何が問題なのか」を考えます。ここでは仮に、読むことはそれなりにできているが書けない、それもまったく書けないわけではなく「潮」の「さんずい」が「てへん」になったり、真ん中の部分が「車」になったりすることが多いとしましょう。そこから考えられるのは「②：漢字をよく見ていない」ということです。だとすれば「漢字は苦手だ」と思い意欲を低下させている子に「10回ずつノートに書く」という課題はマイナスとなる可能性があります。面倒だと思った子は、なおさら文字をよく見ようとはしなくなるでしょう。ならば厳選した漢字を「③：1回だけ、ていねいに書く」を課題としてはどうでしょうか。「さんずい」を「てへん」にしてしまったり、「潮」と「湖」を混同するような間違いが多ければ、多くの漢字が意味記号と音記号から成ることに気づけるようにすることも重要でしょう。もちろん、それだけで簡単に苦手が克服できるということはまずなく、支援をする側も根気強く見守る必要がありますが。

本冊の限られたページ数の中で、アセスメントについて語ることに無理があります。それ以前に、筆力においても、支援能力においてもその深奥にふれることなど到底ありません。しかしだからこそ、具体的に「何：What?」「なぜ：Why?」を繰り返すことで、少しでも良く子どもたちを理解できるように努めています。

4 同時処理と継次処理

アセスメントを行うにせよ、具体的な支援策を考えるにせよ、心がけるべきは解決の糸口、いわば「取りつく島」を見出すことです。教科学習支援については、その子の学習スタイル(認知処理過程)が「継次処理優位」であるのか「同時処理優位」であるのかを見るのが具体的で重要な規準となり得ます。



「継次処理」は情報を1つずつ積み上げるように順序立てて処理する様式、これに対して「同時処理」は複数の情報を関連性に着目して同時的、全体的に処理する様式、前者は「ボトム・アップ型」、後者は「トップ・ダウン型」と言いかえることもできるでしょう。詳しくは上の表の引用元でもある『長所活用型指導で子どもが変わる』(図書文化社)、また、当法人がWeb上(http://rise.gr.jp/manaby/revolve_kyouzai/kensyu)で無償公開し

ている「読み書き困難疑似体験」等をご覧いただきたいと思いますが、ここでも少しでも子どもたちの困難を疑似体験していただきながら説明を加えてみます。

まず、次の文を声に出して読んでみてください。

① せんきよくのせんきよくにおうじて

せんきよくせんきよくしてください

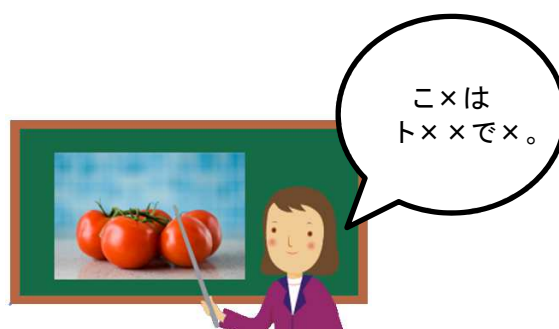
② とうじのとうじは

とうじにとうじでとうじした

誰でも簡単に読めるはずですが、①は途中でつかえてしまった方も多いかと思います。②はとりあえず読めたという方でも、意味は理解できたでしょうか？ この困難は文字を順に音にすること、すなわち継次的な読みはできていても、同時的な読み、すなわち場面や文脈から類推を働かせながら読むことができていないことに因るものです。

次は右下の図の中で、先生が黒板を指して何と言っているのか、吹き出しの中の文を完成させてみましょう。途中の文字が欠けていますが、これは簡単に読むことができます。ここでの私たちは、場面や文脈から類推を働かせることで不足した情報を補っています。これと同じことを、私たちは聞き取りに際しても行っています。

事実、私たちが日ごろの生活の中で行っている聞き取りや読み取りは、個人差こそあれ実によくバランスが取れたものです。しかしこれが英語の授業の中でのリスニングとなると途端にそのバランスを崩してしまう。その原因の多くは指導者側に、すなわち指導する側の配慮が欠けているため、児童生徒を一層混乱させてしまっているとも考えられます。



特に、LD(学習障害)またはそれに類する困難を示す子への支援は、その子なりに2つの処理方法の「バランスが取れるようにすること」と言いかえてもよいかと考えます。そこで具体的に何をするかとなれば、「長所活用型の練習」かそれとも「短所補強」ということになり、ここでもまた相反する2つのアプローチをいかにバランスよく行うかと課題が浮かび上がってきます。ライズ学園では、長所を伸ばすことに重きを置いていることはすでに書いたとおりです。しかしそれが 6:4 の割合となるのか、それとも 8:2 の割合になるのかは、その子のそのときの心理状態等にもよります。本当に自信をなくしてしまっている子に対しては長所活用型指導に全力を注ぐ時期もあっていいと思いますが、いずれにせよアセスメントが重要であることは間違いありません。

さらに、バランスを取るとはとっても、でこぼこをなくすことを目標に据えるべきでないことも確認しておきたいと思います。大切なのは、‘その子なりに’ バランスがとれるようにすることであり、没个性的なのっぺらぼうを生み出すことではありません。ただし、その到達目標をどこに置くかについては、支援者が勝手にこれ

を定めるのではなく、本人や保護者とも相談を重ねることが必要かと思いますが、このあたりはまだライズ学園でも課題を多く残すところです。

先ほどの日本文の読みも確認しておきましょう。漢字にすれば意味も簡単に理解でき、意味がわかれば読みもスムーズにできます。

① 選挙区の戦局に応じて千曲選曲してください

② 当時の杜氏(蕩児)は冬至に当寺(東寺)で湯治した

お気づきかと思いますが、「とうじ」や「せんきよく」の音高(ピッチ)はそれぞれ微妙に異なります。その違いが理解できなければ、正しく読むことも、聞いて理解することもできません。その点はコンピュータやロボットがもっとも苦手とするところの1つでもあります。

では、私たちはいつ誰からその違いを教わったのでしょうか。きちんと教わってはいないはずなのに、なぜそれを身につけることができたのでしょうか。これはプラトンの時代からの不思議です。再三、「わかったつもりにならない」と書いてきましたが、私たちは自分がなぜ言葉を身につけることができたのかさえわかっていないのです。ところが授業の中では、「こうすれば(たぶん)覚えられますよ」と「(たぶん)」の部分を読み込んで、さも知ったふりをしなければならない。このあたりに矛盾が、教えることの難しさの根源があるかと思いますが、次項からはライズ学園での拙い実践例を紹介させていただきます。

▶ 私にとってのライズ学園



元スタッフ 正会員 龍井 昇治

平成9年春、通算38年の私学中等教育を全うし専任職から離れた。その後、幸いに健康に自信があったので、2つの教育関係の仕事に従事した。

平成15年8月に、リヴォルヴ学校教育研究所の理事長である小野村 哲先生から電話があった。その頃、つくば市内の研究所などの退職者たちの名簿から私の名前を見つけたようだ。

早速、谷田部の教室に出向いて、ライズ学園の設立趣旨や、そこで学ぶ子供達そして指導するスタッフ達に関するお話を聞いて、高齢の私がお役に立てるならばと引き受けることにした。9月末日に教室を訪問、初めて小学生から高校生が学ぶ姿を拝見した。

私は週2日、中学生と高校生の数学を担当した。何らかの理由で不登校生となった子供達だが、しばらく接してみると、気持ちが素直で、こつこつと学ぶ姿勢に、普通の子供達と少しも変わらないことに気付いて、教えることに改めて喜びを感じた。私の教え方は、現職時代からの方針通り、子供達が自力で解法を見つけられるように仕向けた。学園の方針は、知育偏重としないで、芸術、体育の他、農作業などにも取り組み、今必要とされている教育を実践していたのである。また、東日本大震災の際には、様々な支援活動を行って来た。

ところが、ご家庭の負担が大きいのが問題である。義務教育では教育費は無償であるのが、ここでは私立学校並みの学費が必要なのだ。その上、スタッフ達の献身的な努力で支えられているのだ。ようやく、政府がこのようなフリースクールの存在価値を認めて何らかの支援をしようとしている。規制のない支援を強く望んでいる。

私は、平成21年3月をもってスタッフからは退いたが、正会員の一人として支援を続けている。この学園を巣立った子供達一人ひとりが、この学園で学んだ貴重な体験を支えに、勉学に、仕事に励んでいる様子を伺い、関係者の一人として喜びに堪えない。今後の益々の発展を期待して擱筆とする。



▶ 大事にしていること

「多面的に物事が見られるようになること」、「相手の気持ちを慮ることができるようになること」、「自分の言葉できちんとコミュニケーションがとれるようになること」を大切にしています。

人の気持ちを考えたとき、答えは1つとは限りません。実生活では様々な思いが入り混じっていることの方がはるかに多いと思います。しかしテスト問題では、登場人物の心情を記号の中から選び、「正解」を出さなければなりません。もちろん、「一般的な捉え方、考え方」ができるようになることは必要です。しかしその「一般的」という言葉すら、何が一般的なのかはあいまいです。「思い」は周りの環境や、そのときの心の状態、関わっている人たちとの関係など、様々な要因で変化するものです。本来、国語という教科は、正解不正解を追い求めるものではないと思っています。

だからといって一方的に自分の考えを押し付けるのも違います。まずは他の人の声に耳を傾け、受け止め、その上で自分で考え、思いを伝えることが大切なのではないでしょうか。授業の中では、安心して自由に自分の考えを伝えられるような雰囲気作りを心がけています。そして、「模範解答ではこう書いてあるけれど、君はどう思う?」と「自分の答え」を聞くこと、そこから子どもたちが考えを広げられるように努めています。

(ライズ学園スタッフ 国語担当 北村 直子)

Topic #01 | ひらがなの支援

(1) 書くことの支援

ライズ学園に通園する子どもたちの中には、文字の読み書きに特異な困難を示す子が少なくない。漢字を書くことはもちろん、小学高学年になっても「し」を「J」のように書いてしまったり、高校生になってもカタカナがほとんど書けないという子もいた。しかし、それは単に文字の認知に関する苦手であって、文脈から類推を働かせながら人の何倍もの速さで文章を読んで理解する子いるし、大人顔負けの作文能力を発揮する子もいる。

1つに、書字や読字に困難を示す彼らが置かれている状態は、例えばカレハバツタやハナカマキリが自然の中にとけ込み、私たちの感覚受容器に届いているはずだが認知できない状態に似たものではないかと推測する。この他にも認知学習理論では、手書きのくずし文字でも読めることの説明として「プロトタイプ（原型、基本形）」や「作動記憶」の存在をあげている。特に書字に困難を示す場合は、この「プロトタイプ（原型、基本形）」の形成につまずきの一因があるのではないかと仮説から、次のような支援方法を考えた。本項については、「もじのかたちをとらえるためのひらがなれんしゅうちょう」や、付属の「ひらがな指導の手引」とあわせて参照されたい。

※ こちらのページからダウンロードできます http://rise.gr.jp/manaby/free_download

实践

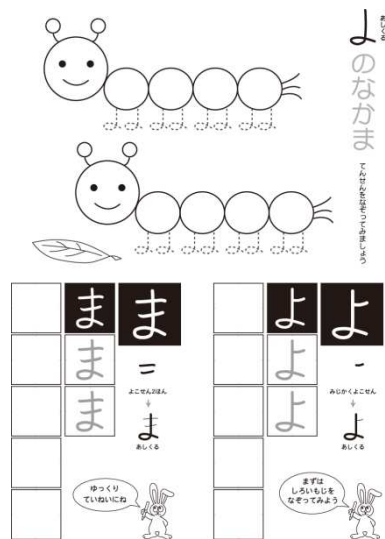
- ② 類似部分に名前をつけ、文字形を言葉で説明

③ 絵の中にパーツを入れ込み、方向性や形を印象づける

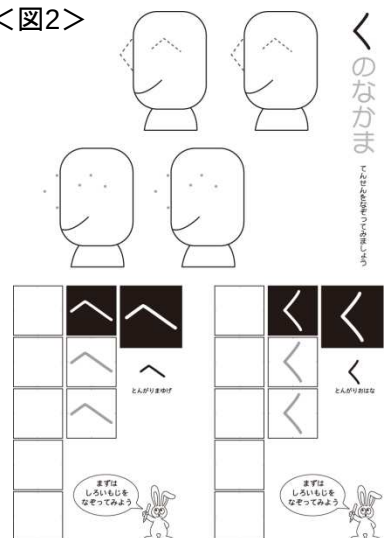
④ 文字の形をとらえた上で、より整った文字に近づける

⑤ その他の練習方法

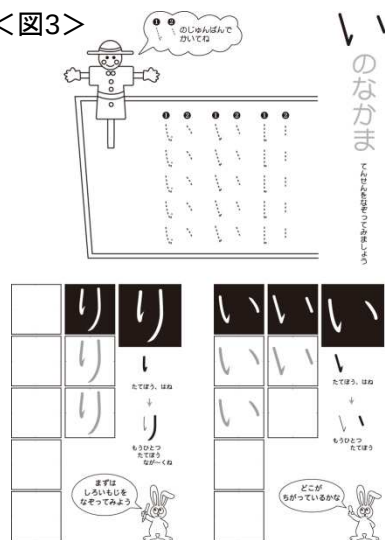
<図1>



<図2>



< 図 3 >

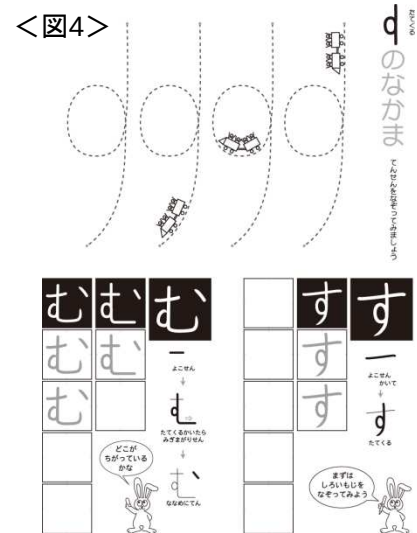


思うように字形が整えられない場合には、「よこせん、たてくる」と言いながら、指で宙に文字を書く方法も推奨している。いきなり鉛筆を持たせると、「す」は「丿」と「〇」を別々に書いて組み合わせるという不自然な書き方になることもある。そこで「たてくる」<図4>のようにローラーコースターの動きを意識させながら宙に書いて練習することで筆の運びがスムーズになるという効果が期待できる。

※ <図1> ~ <図4>

「もじのかたちをとらえるためのひらがなれんしゅうちょう」

発行 リヴォルヴ学校教育研究所 より抜粋



(2) 読むことの支援

語を読む際には、まず、文字を順番にしたがって音声化できなくてはならないが、中にはさっと全体を見て「やたい」を「たいや」と読み、意味を取り違える子もいる。一方で「犬」を「居ぬ」と発音して意味が取れない子は、文脈や場面との関連づけや「い」と「ぬ」をひとまとまりにすることができないでいると考えられる。

以上から、文字を読んで書かれた内容を理解するためには、「一文字一文字を、順序よく音になおせること」と「文字を意味のあるまとまりとして捉え、文脈や場面などとの関連性にも着目しながら読むこと」の2つがバランスよく行われることが重要であるとわかる。

○ 順番に気を付けて読む

さっと全体を見て文字を順序どおりに読まず、意味を取り間違える子には、一文字ずつ順番に読むことの大切さを意識させる。<図5>では、絵にふさわしいカードを選択させる。正解出来たら二つのカードを読み比べ、違いを確認させる。<図6>では、絵にふさわしい言葉になるよう順番にひらがなを並べさせる。

<図5>



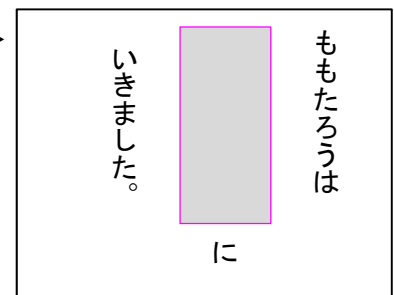
<図6>



○ 文字を隠して読む

流暢な読み手は、文脈その他の情報から類推を働かせながら読む。しかし読みに困難を示す子は、「お」と「あ」を混同して「あにが？おにが？」などと考えているうちに、前に書かれていた内容を忘れてしまうこともある。「兄が島に」と読み間違えるような子には、「おにがしま」をカードで隠して、「これは何のお話？」とまず場面を確認してから、「(隠された部分には)なんて書いてあると思う？」と、書かれている内容を推測して読む練習をする。<図7>推測してから文字を読むことで、文字を意味のあるまとまりとして捉えることができる。

<図7>



※ <図5>、<図6>、<図8> 学習ソフト「ひらがなの森 ver2.0」
発行 リヴォルヴ学校教育研究所 より抜粋

○ 意味ごとに区切って読む

書かれた内容を適切なところで区切って読む練習も取り入れたい。＜図8＞では、「いかさる(いか+さる)」の中から、隠されたもう一つのことば「かさ」を見つけ出す練習である。また、「かさ」になった時の「か」と「さ」の音のピッチの違いが変わることに気づかせる。ピッチの違いに気づけると、「犬」を「居ぬ」と発音して意味がとれないといったことが防げる。

＜図8＞



Topic #02 | 漢字の支援

全体を把握し捉えることが得意なA君は漢字の書き取りを極端に苦手としていた。

彼に「霞ヶ浦は日本で二番に大きい()です。」という例文を見せ()に入る言葉を尋ねると、すぐに「湖」が入ると答えた。そこで、「湖」と「潮」のどちらの漢字が「みずうみ」か尋ねると、そんな細部まで見ていないとの答えが返ってきた。彼は人一倍読みが速く、漢字の読みも文脈から判断しており、細部まで捉えていなかった。

そこで、漢字を細部まで見ていないA君に関しては、全体把握だけではなく、漢字の部分(つくり)を見ることを意識させ、漢字を想起する際の手掛かりになるよう“漢字のみかた”の支援を行った。

実践

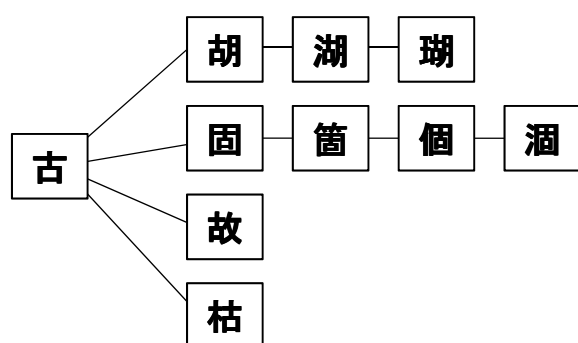
漢字は、その成り立ちや性質から6通りに分類することができ、その中で、意味を表す部分(部首)と音を表す部分(音記号)を組み合わせて作られた漢字を形声文字という。漢字の80～90%が形声文字であると言われているが、子どもたちは意外と気づいていない。

同じ音記号を持つ漢字は部首を替えるだけで色々な漢字になるため、想起する際の手掛かりにした。

(1) つくり気づかせる

「湖」は、部首(さんずい)と音記号(胡)で出来ていることに気づかせるため、部首を隠し「胡」と「朝」を見せ、どちらの漢字が音読みで「コ」と読むかと尋ねた。A君は「胡」には「古」が含まれていると気づき、「胡」を選んだ。さらに、「潮」には「朝」があるので、「チョウ」と読むと気づいた。

「古」から「固」、「固」に竹冠をつければ「箇」、「個」、「涸」と複数の漢字を一度に学習することができることに気づくよう関連漢字も取り上げた。＜図1＞



＜図1＞

「古」を含む漢字は、他にも、「姑」や「鈷」や「糊」などがある。難しい漢字を読めるようにすることで、まずは漢字に対する 自信を養うのも方法である。

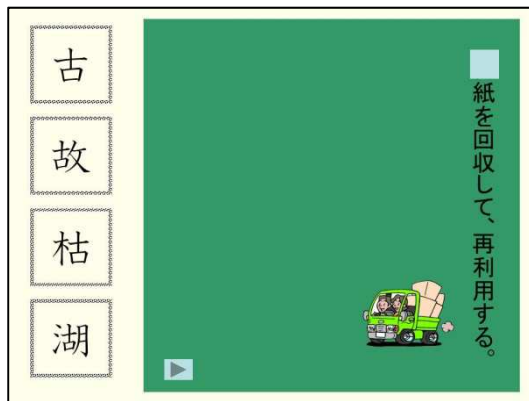
★ 参考書籍

「漢字が楽しくなる本」 太郎次郎社

「常用漢字ミラクルマスター辞典」 小学館

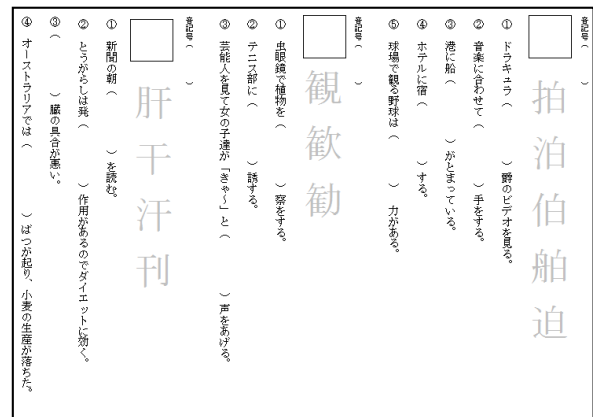
(2) 熟語を用いた文章で定着させる

単語は音読みになるよう熟語にする。訓読みもある漢字は合わせて読みを学習する。意味記号と音記号に気づかせた上で、適する漢字を選ばせる<図2>。同じ漢字練習でもプリント<図3>では、音記号ごとに練習できるようにしている。あとから自分で見つけた漢書を書き込むと、漢字単語帳のように使うこともできる。書くことが苦手な子にはまずはパワーポイントを使って漢字を選ばせる練習をするなど、段階を踏んで書くことへの抵抗感を軽減する。



<図2>

自分でも漢字を使って他の例文を作る
練習をするのもよい。



<図3>

音記号にあたる部分と読み方に意識できる
よう、書き込めるようにしている。

(3) その他の練習

漢字というだけで拒否反応を示す子には、その子が好きな事柄を使って例文を作り抵抗感を軽減する。例えば、鉄道が好きな子には、路線図を用いる。好きなものは記憶に残りやすいので、漢字を思い出す時にも有効である。「御徒町の“徒”は“生徒”の“徒”と同じだね」と言い、他の熟語にも応用させる。形声文字であれば、漢字のつくり気づかせることも合わせて行う。

振り返り

音記号に部首を付け替えるだけで他の漢字ができることに気づいたA君は「なるほど、それを早くいってくださいよ」と言い、「漢字のみかた」に気づけるようになった。彼は、「自分は記憶力が悪い」と言っていたが、抱えていた困難は、いわゆる記憶ではなく、1つに、文字の見どころを捉えられないというものだった。捉えどころのない情報は記憶にも残りにくいものである。

ライズ学園では、基本は得意を伸ばす方針で学習支援を行っているが、上記の支援方法は、漢字の部分を見る「継次的」な方法になり、彼にとっては弱点を補強することになる。漢字一文字ごとに音記号を見て、読みを予想する方法ばかりに頼っていると読みが遅くなってしまう。そこで、気を付けたのは、バランスをとることである。漢字の読みについては、彼の得意な文脈や全体から把握する「同時的」な読み方を、漢字の書き取りについては、音記号を手がかりに漢字を作る「継次的な」手法を取り入れた。

「漢字が書けない」とひと言でいっても、鏡文字になってしまう子、偏とつくりが逆になってしまう子、空間認知が弱い子、マスからはみ出してしまう子など、その困難の度合い、原因は様々である。よって支援も一人ひとりに応じた工夫が必要となる。

ライズ学園に来る子どもたちの中には、国語が嫌いという子が多い。しかし、話をよく聞いてみると本は好きでたくさん読んでいる。そこで、教科書の題材をそのまま扱うのではなく、子どもたちに関わりのあることから始め、まずは興味関心を持てるようにした。

題材を考える際には、日々の生活の中で必要になってくるであろう事柄を取り上げ、生活の中で使える国語力を養えるよう意識した。また、パンフレットやホームページで情報を調べるなかで、未習漢字や知らない言葉があった時は、文脈(全体)から予想して学ぶことを意識させた。

実践

(1)「茨城県の観光大使になって、観光名所をPRしよう」

プレゼンテーションには、国語科の領域である「話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと」の要素のすべてが含まれている。さらに、情報収集、パソコンの使い方、資料のまとめ方を学ぶこともできる。

プレゼンテーションは中学2年生の学習内容としても教科書で取り上げられているが、クラスの友達に何かを提案するという設定である。そこで、設定を観光名所PRとすることで、自分たちの住んでいる地域を見直す機会を設け、社会科との連携を図った。

① 情報を収集する

観光パンフレットや旅行雑誌、市町村や県のホームページから情報を集めたり、周りの人にヒアリングする。その際、自分の知りたいことを聞くためにはどのような聞き方をすればよいか考える。新たに観光名所になりそうな場所を自分で探し、提案するのもよい。

② 情報を整理し、話の組み立てを考える

良さを知ってもらい、行ってみようと思ってもらうためには、どのような話の組み立てにしたらよいか、どこにポイントを置いて話すかを考える。

③ パソコンを使ってプレゼンテーション資料をつくる

パワーポイントを使って、スライドを作る。子どもたちは原稿を読むことに慣れてしまっているので、すべてをスライドにしてただ読むだけにならないようにする。パソコンスキルは将来必ず求められる。使えるスキルを身に付けられるようにする。

④ プレゼンテーションを行う

プレゼンテーションの様子はビデオに録画し、声の大きさ、話す速さ、間の取り方、口調、話した内容はどうかなど、自分で振り返りができるようにする。また、聞き手には聞く観点を記したチェックシートを用意し、プレゼンテーションの評価をしてもらう。

単に発表して終わるのではなく、自分の良かった点・改善点を客観的に知ることができるようなフィードバックをすることが大切で、それを何度も繰り返すことでスキルアップにつながる。



★ その他の授業例

(2) 携帯電話のプランを比べる

中学生になると携帯電話を持つようになる子が多い。そこで、各社携帯電話会社のパンフレットを見比べ、自分に合ったプランを見つける課題を設定する。パンフレットには多くの情報が掲載されており得をするように見えても規制があったり、大事な情報が小さな文字で書かれていることもある。情報が溢れている時代だからこそ、適切な情報を取捨選択できる力をつけたい。また、携帯料金の計算やそれを支払うためにはどのくらい働かなければならないかなど、生活に密着した学びに広げることができる。

(3) 活動の様子を知らせるブログ記事を書く

ライズ学園ブログに載せる記事を書く課題。ポイントを押さえながら相手に分かりやすい文章を書く練習になる。また、情報モラル教育にも触れて、インターネットやSNSとの付き合い方も学ぶ機会とする。

(4) お世話になった方に礼状を書く

農園体験やカルチャー教室などでお世話になった講師のみなさんに礼状を送る課題。中学2年生の学習内容として手紙の書き方が扱われている。書式を覚えるだけでなく、自分の言葉で気持ちを伝えることの大切さを学ぶ機会とする。

振り返り

ある子は、国語にこだわらず「〇〇の時間」とし、その子の興味のあるもののマーケティングから始めた。学習を進めるうちに自らやってみたいことが見つかり、授業内容をスタッフに提案、協力を仰ぐためにプレゼンテーションを行った。その後、プロジェクト化し、横断的・総合的な学習として一年かかりの取り組みになった。

同じ課題に取り組んでも、人によって見方が違う、捉え方が違う、伝え方が異なることを、子どもたち同士で実感する機会になっていた。

Topic #04 | 気持ちを想像し、コミュニケーションを大切にする

コミュニケーションを辞書で引くと「気持・意見などを、言葉などを通じて相手に伝えること。通じ合い」とある。相手に自分の考えや思いを伝えることはしていても、一方通行では仕方がない。文字通り双方の気持ちが通い合っこそコミュニケーションである。言葉には様々な考えや思いが込められており、字面だけとらえては相手の気持ちを捉えたことにはならない。相手がどのような気持ちなのかを正確に理解することはできないが、想像することはできる。想像することは相手の立場に立つことでもある。

そこで、相手の気持ちを想像する、相手に分かりやすい伝え方をするワークを取り入れた。

実践

○ 目隠し道案内

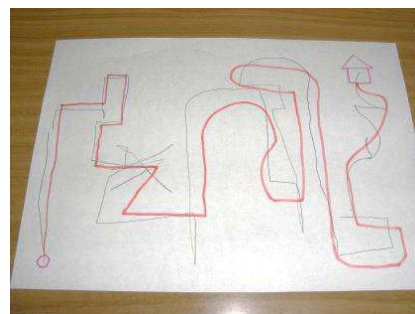
相手の立場になって考え、説明するワーク。普段関わりのない子ども同士もワークを通して、言葉を交わす機会になる。

① スタートとゴールの位置だけを設定し、そこにたどりつくまでの道を自由に書く

ポイントは、最初に道案内をしないこと。最初に言ってしまうと説明しやすい簡単な道にしてしまい、相手の立場になって考えるまで深まらない。

② 目隠しをした相手に、言葉だけゴールまでの道案内をする
ペアになり、一人は目隠しをする。地図は目隠しをするまで見せない。もう一人は自分が書いた地図上のスタートからゴールまで目隠しをした相手が言葉だけでたどりつけるようにガイドをする。できるだけ忠実にルートの上をたどる。

説明をする人は使えるのは言葉だけで、手を添えてはいけない。目隠しをした人は質問をしてもよい。



＜実際に子ども達が行ったもの＞
鉛筆で地図をペンで案内された道を書く。自分の言葉がどれだけ相手に伝わったのか、視覚化される。

振り返り

子どもたちは見えない相手に言葉だけで伝えることの難しさ、相手に伝わらないもどかしさを実感していた。自分が言った通りには動かない相手を見て、しばらく考え込み伝え方をかえるなどしていた。

相手と同じ方向にいるか向かい合っているかによって上下、左右の言い方が変わる。「上、上」「右、右」よりは「上に約〇cmぐらい」と見えない相手には具体的に言ったほうが伝わりやすいし、最初に全体をイメージさせてからだに相手も安心する。相手の立場、気持ちにたって、さらには相手の様子を見て言葉がけを考える状況判断も必要になる。

双方がどのように感じていたかを共有できるよう、ワークの後にはどう思ってその発言をしたのか、それをどう理解したのかを振り返る時間をとることが重要である。それを丁寧に行うことによって、他者理解、自己理解にもつながり、気持ちを想像し、コミュニケーションを大切にする力の素地となると考えている。

▶ 私にとってのライズ学園



ライズ学園スタッフ 国語担当 北村 直子

ライズ学園の子どもたちと話をしていると、「へ～、そうなんだ。」「それってどういうこと？教えて」と返すことがとても多いです。実際、どこでそんなことを知ったのか、なんと興味関心の幅が広いのだろう、といつも驚かされます。そんな子どもたちと話していることが本当に楽しいのです。いろいろな発見があります。時には「そんなことも知らないの？」と言われることもあります。

教育の仕事に携わるようになった当初は「知らないとは言えない」、「常に生徒の前に立って導かないと」と若くて何も分からないのに、気持ちだけは指導者気取りで肩に力が入っていたかもしれません。

今、ライズでは、良い意味で肩の力が抜け、子どもの隣りに寄り添いながら一緒に歩いているような気がします。時には子どもたちの言葉にはっとさせられ、自分自身を省みます。そして日々、教えること学ぶこと奥深さを感じています。

立場としては、スタッフ(大人)と生徒(子ども)ですが、関わり合いの中では垣根がないように思います。ほんの少し早く生まれ、子どもたちより先を歩く自分にできる手の差し伸べ方をしたいと思っています。



▶ 大事にしていること

「苦手を回避・軽減する」こと、そして「言語、コミュニケーション、異なる文化への関心を高める」こと、さらに「情報処理能力を高め、自ら学び取る力を伸長する」ことを心がけています。

不登校といってもその理由は様々であり、その背景にLD(学習障害・困難)やLDの中核とされる「読み書き困難・障害」が潜むことも少なくありません。英語はもっとも「読み書き障害・困難」が顕在化しやすい言語の1つであることが知られていますが、日本の学校教育現場では「英語読み書き困難・障害」に対する理解はいまだ不十分で、具体的な支援もほとんどなされていません。

LDであったり読み書きに困難を示す子どもたちは、他方で素晴らしい可能性を示すこともあります。支援次第では、英語学習でも大きく力を伸ばすこともあります。今後、地域においてもグローバル社会においても、「ちがい」を尊重し認め合うことがより重要になると考えられます。「ライズ学園が大切にしていること」の中でも取り上げたように、habitを「癖、習慣」などと暗記させるのではなく、英語を通じて「情報を取捨選択し論理的に考える力」「見る力、共感する力」を伸長したいと考えています。

(ライズ学園スタッフ 英語担当 小野村 哲)

Topic #01 | アルファベットの指導

アルファベットは漢字と比べてはるかに簡単であるように思えるが、習得に要する時間の個人差が大きく、b / d / p / q 等の識別に多少なりとも混乱を示す児童・生徒は少なくない。学年が進んでも混乱を引きずり、これが英語を苦手とする原因の1つとなる場合もあるが、私たちが2014年6月に中学1年生180名を対象に行った調査では、「クイズ」にふさわしい英単語を選べ」という課題に対して※puiz を選んだ生徒が21.7%に達するなどしている。この調査については地域間格差も目立ったことから追調査が必要と思われるが、小学中・高学年では他に f / t や h / n / u / r など意外と思えるような文字の混同も見られた。

第3問 クイズ

① puiz	② quiz	③ duiz	④ buiz	無答
21.7%	68.9%	3.3%	3.3%	2.8%

第5問 バンド

① band	② danb	③ banb	④ dand	無答
80.6%	7.2%	5.0%	5.0%	2.2%

第11問 パンダ

① qanba	② danpa	③ panba	④ panda	無答
7.8%	0.0%	35.0%	43.3%	13.9%

※ 「カタカナ語(クイズ・バンド・パンダ)に該当する英単語を選ぶ」という課題に關しての回答状況。第3問、第5問に比べて第11問で無答が多くなっているのは、回答に際して90秒 / 16問の時間制限を設けたことにもよる。(調査実施時期:2014年6月 / 対象:公立中学1年生180名「日本人小中学生の『英語読み困難』と苦手を防ぐための具体的な指導の手立て」から抜粋)

(1) アルファベットに親しむ

授業の中でアルファベットが取り上げられるのは小学3年生のローマ字が最初かと思われるが、時間は限られており、中学入学の段階でアルファベット文字がきちんと身につけている生徒はごく少ない。ライズ学園ではなおさらのこと、国語の時間で扱うことは難しい。

一方で、アルファベットに対する子どもたちの関心は概して高い。そこでまずは生活の中でよく目にするアルファベットを取り上げ、自ら学ぶ習慣を身につけさせたいと考えた。

実践

① まずはイラストを見せながら「Yシャツ」と「Tシャツ」などの語を読ませる。ある程度読めるようになったら「Eメール」の「メール」の部分を隠しても読めるように練習する。

ATMのMが読めない場合には、シャツのサイズを指し示すなどして同じ文字が使われていることに気づけるようにする。その他、例えばハンバーガーショップの看板など、街の中のどなところでMを見ることができるかを考えさせる。ATMを知らないという児童がいれば、それが何であるか街の中で探してくることを宿題にしても良い。

② ある程度読めるようになったら、イラストと語とのマッチングを行う。ここではシート上でイラストとアルファベットとを線で結ぶ例を示したが、カード合わせにしても良い。ただしその際は、アルファベットのカードの下部に線を引くなどしては上下が反対にならないように配慮する。

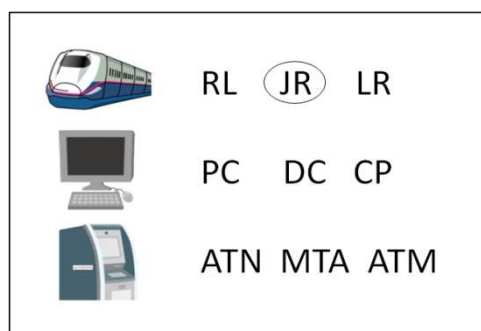
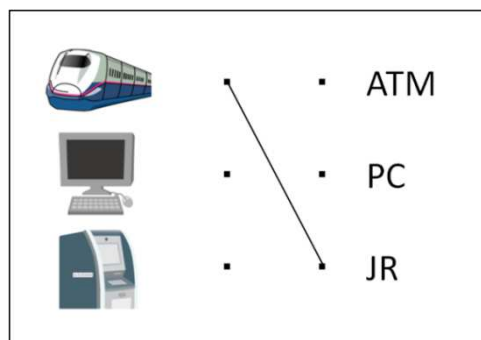
③ イラストにふさわしいアルファベットを選択させる。ここではATMに対して※ATN(形が似た文字)や※MTA(順番違い)なども取り上げる。さらに次のステップとしては、A/T/M/F/Nなどのアルファベットカードを用意して、ATMと組み合わせさせるなども行った。

振り返り

アルファベットの習得に要する時間は個人差が大きく、相当練習を繰り返しても身につかない児童・生徒もいる。そこで生活の中で学ぶ習慣を身につけさせるよう努めたところ、大きな成果があった。③ではJRの2文字を漢字の偏とつくりのように1文字と認識している児童、もしくは2文字を文字としてではなくまとめて画像のように捉えている児童の存在を意識した。



よめるかけるABC英語れんしゅうちょう
©リゾールズ学校教育研究所



(2) 小文字の練習

大文字に比べ b / d / p / q など小文字では困難が顕在化しやすい。そこでまず大文字を習得させた後に「(大文字と)そっくりな文字:c / o / p / s 等」「どこか似ている文字:a / b / e / f 等」「ちょっと違う文字:d / g / q」との3グループに分け、大文字との関連を意識させながら練習した。

実践

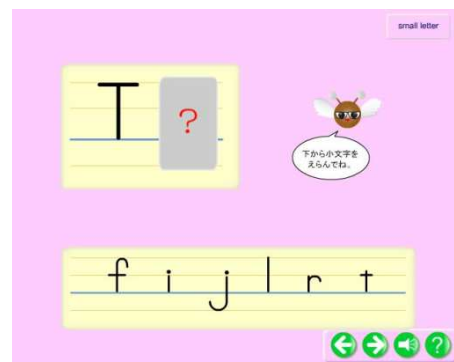
- ① まずはイラスト F と f の形が似ているといわれてピンとは来ず、F / f / T / t などを混同する子もいる。そこでまず大文字が小文字に形を変えていく様子を動画にして見せることとした。右図では、T が小さくなりながら t に形を変えていく。慣れてきたらヒントを見ずに、選択できるようにする。
- ② h は「2階からたてぼう、ひと山でエイチ」、n は「たてぼう、ひと山でエヌ」などと文字形を言葉にすることでその違いを明確にする。小文字は原則として文字音で始まるイラストの中に文字を書き込み、h を練習する際には、「馬は首が長いよ」と言い「2階からたてぼう…」と唱えながら書くようにした。
- ③ 児童生徒に背を向け、腕で大きく「2階からたてぼう…」と、文字を書いて見せる。児童には b / d / h などのカードの中からふさわしいものを選ばせるなども楽しみながら練習できる。

振り返り

上記のような練習は極めて有効だが、b / d / p / q などは高校生や大学生になっても混同する生徒がいる。それらの生徒にいわゆる短所補強の練習を重ねていると、今度はやる気をそいでしまったりイライラをつのらせることにもなる。よってアルファベットの練習は、そこそこに切り上げることも肝要だと考えている。

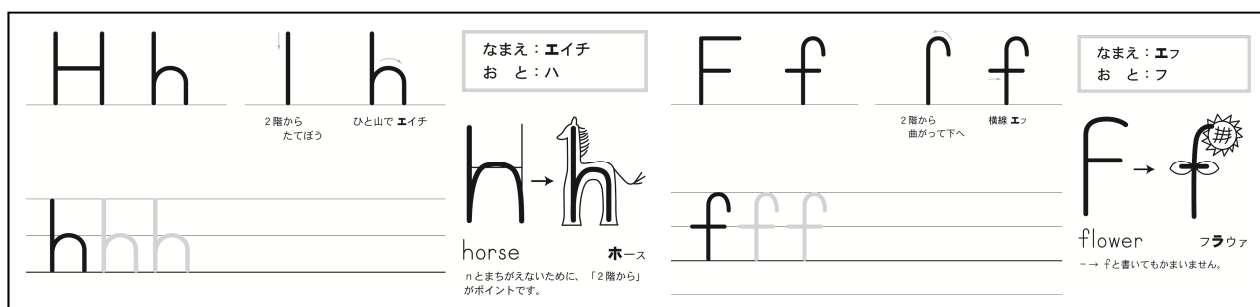
そのかわり、「a big dog」などは場面や文脈から推測を働かせて読むことで「*a dig bog」などとならないようにしている。どうしても書くことに困難を示す子には、鉛筆で書かせる子はずに、タイピングを指導している。

これらは「よめる かける ABC英語れんしゅうちょう」にも採用した方法である。より詳しくは「英語れんしゅうちょう指導の手引」http://rise.gr.jp/manaby/free_download を参照されたい。



選択肢の中から小文字を探す。「？」ボタンを押すと大文字が小文字に形を変えていく様子を見ることができる。

学習ソフトウェア「英語の森」より



よめるかけるABC英語れんしゅうちょう
©リヴォルヴ学校教育研究所

それぞれの文字音で始まる絵に文字を当て込み、「馬は首が長い」「花が重くて曲がっている」など文字識別のポイントに注目させる

英単語が音の足し算によって成るのに対して、「林」は「木」が2つで「はやし」であって、「木 + 木 = はや + し」でもなければ「は + やし」でもない。これに対して英単語は sea = s + ea / seam = s + ea + m のように「音の足し算」によって成り立っている。日本の子どもたちが外国語として英語を学ぶ場合、そのつまずきの主たる原因と目されるのがこの「音の足し算・引き算:音韻操作」に対する不慣れである。母語として英語を学ぶ子どもたちの場合も同様の指摘がされているが、日本の子どもたちの場合はそれが一層顕著であると考えられることから、次のような支援を行った。

(1) ローマ字の指導

ローマ字は英語学習にマイナスとなる面もあることは確かだが、総じてプラス面が多くなることは論をまたない。そもそも街にはローマ字が氾濫している。この原稿も私はローマ字入力で打ち込んでいる。フランス語やドイツ語についての知識が英語学習にマイナスになるとしてもこれを排除することはできないのと同様に、ローマ字を廃することは不可能である。

先に私たちが行った調査では、日本の子どもたちは学校でほとんど指導を受けていないにもかかわらず、ローマ字をあらかた読めるようになっていることがわかった一方で、その処理速度に格差があることもわかった。中には「ハ」は h + a で ha と示されることを「記憶」し、hat から h をとれば at になることは視覚的に理解していても、at を読むことができないという子がいる。反対に、it や sit の読みを練習し身につけながらも、hit は読めない。または時間を要したのち「ハイト」などと読み、意味理解につなげられないケースも多い。

hat / hut / hot / hill / hell などスムーズに読めるようにするにはローマ字指導が有効である。多くの日本人EFL学習者にとって a / u / o や i / e の単母音を識別するのは簡単なことではない。その困難も音による情報とともに視覚情報を与えるなどすることで大幅に軽減できるが、これも相当に個人差があり、入門期に mass / muss / moss / miss / mess などを識別させようとすれば、かなりの学習者を振り落とすことにもなりかねない。

実践

書くことに抵抗や困難を示す子も多いことから、タイピング練習を行った。練習に際しては、母音字 a / u / o / i / e にシールを貼り、「赤い字」としながら多くの音が「子音 + 母音」から成ることを意識づけるようにした。



母音字にシールを貼るなどして、音韻意識を高める

振り返り

フォニックスの前段階としてローマ字練習は明らかに有効である。単純に音韻意識そして音韻操作能力を高めようとするならば、小学校ではより多くの時間をローマ字指導に割くべきであると考えますが、その練習は単調に陥りやすい。タイピング練習にはほとんどの子が強い関心を示す。正確さを求め過ぎればかえってマイナスともなるが、最初にタイピングの基本を身につけさせることは、中学、高校生での英語学習にも非常に役に立っている。なお、練習には市販のタイピング練習ソフトを利用した。

(2) フォニックスの指導

近年、公立小中学校でもフォニックス指導を取り入れる学校が増えてきている。これが有効であることは疑いないが、極めて有効であるがゆえにローマ字以上にマイナス面もあることを確認する必要がある。『フォニックス指導の実際』(玉川大学出版; 古書でのみ購入可能)の著者ハイルマンも「フォニックス法や暗記法、文脈からの類推のどれに頼っても1つに頼りすぎることは、読み方指導上の深刻な問題を生じる可能性がある」と指摘している。これは「様々な方略を時々に応じてバランスよく用いることが重要である」と言い換えてもよいと思うが、そのバランス感覚こそが多くの日本人EFL(外国語としての英語)学習者の問題点であって、むやみにこれに飛びつけばかえって苦手を助長することにもなる。

ライズ学園では、比較的同時優位の子が多い。典型的な「継次処理」であるフォニックスによる読みは彼らにとってはまさに「弱点補強学習」であって、これに極端な拒否反応を示す子もいた。そのような場合にはなぜこれが大切であるかをきちんと説明し、さらに以下の3点を確認した上で練習を行っている。

- ・ (例えば ea は「イー」と発音するなど)無理に暗記する必要はないこと
- ・ 長い時間をかけて、多くの語に繰り返しふれる度に、少しずつ身につけていけばよいこと
- ・ (得意を生かした)他の練習方法とも組み合わせることが大切であること

既述したように、ローマ字で「ハ」は h + a で ha と示されることを「記憶」はしていても、h + at = hat / hat - h = at が感覚的に理解できない子がいる。このような子になまじフォニックスを指導すると、h + it = hit を「ハイト」などと読み、かえって難しくしてしまうことも多い。一方で、このような音韻操作を難なくこなしているように見える子でも cap ⇄ clap ⇄ clamp ⇄ camp ⇄ lamp ⇄ lap などと読ませると、必要以上に時間を費やしてしまうこともある。

いずれにせよ、このような音韻操作の習熟には相応の繰り返し練習が必要であるが、ライズ学園での英語の授業は週に2時間でしかない。そこで上記のように、「音韻的気づき」やその他の気づきを得られるように単語配列に工夫をした「英単語カレンダー」を作成した。

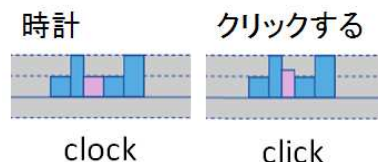
実践 ①

英単語カレンダーには、現在「入門・初級・中級」の3コースがある。入門では bug ⇄ bus ⇄ sub ⇄ tub ⇄ but ⇄ cut など子音字が一文字ずつ変化、または単母音字の前後の子音字が入れ替わる語を順に読む練習から始め、sea ⇄ seam ⇄ steam ⇄ stream ⇄ scream ⇄ cream / age ⇄ page ⇄ ace ⇄ pace ⇄ space ⇄ ice ⇄ slice ⇄ spice ⇄ price などと徐々にレベルを上げていく。

これを毎月最初の授業で、一通り読みの練習をする。カレンダーは各自家庭にも持ち帰らせ、トイレや自分の部屋に貼り、毎日一度ずつ読むように指示する。初めはゆっくり、慣れたら1月分30語を15～20秒程度で読めることを目標とする。

練習に際しては、まずは当月の練習目標 — 例えば「ea」を含む語の読み など — を確認した上で、読み方がわからないときは、日本語の意味や前後の単語も参考にするように指示している。具体的には boat ⇄ boast ⇄ roast ⇄ road の roast が読めないときはこれを飛ばして road から日をさかのぼって読むようにする。road: 道路 / roast(肉などを)焼く はカタカナ語としてもなじみがあるものであり、これを読むときには日本語の意味からも推測できるようにする。

一通り単語を読んだ後には、これも独自に開発したカレンダー準拠のアプリケーションソフトを使用し、タイピング練習も行っている。このアプリでは文字枠の形(登録新案3184649号)に工夫を凝らし、視覚によるヒントをもとに音声を聞き取ったり、つづり字を推測、さらに記憶しやすくしている。



文字枠をもとに、つづり字を推測する。ckなどのつづり字にも注目させることができる

振り返り

日本の子どもたちは小学校高学年ともなれば、少なくとも1,000語、多い子では2,000語からそれ以上のカタカナ語、しかもそのまま英単語としても生かせる語を身につけていると思われる。その知識を生かせば、中学卒業までに5,000～10,000語以上のボキャブラリーを得ることは決して不可能ではない。

seam: 縫い目 は大人でも知らないと答える人が多いが、seamless: 縫い目がない / two-seam: ツーシーム(変化球の名前)などで聞き覚えがあるはずの語である。scream: 金切り声をあげる はなじみがなくとも、スプリングとしては cream: クリーム に s を加えたに過ぎない。カレンダーでは入門編と初級編で「音象徴」もテーマとして取り上げる。そこで scream の scr- は scratch: ひっかく 等にも通じることに気づいた子どもたちは scrub: ごしごしこする / rub(手のひらなどで)こする などより効率的に語彙を増やすことができる。ちなみにここでの scr- には、日本語の「カリコリ、キーキー」に通じる意味合いがある。さらに「アルファベットに親しむ」でも紹介したのと同じ手法で「今度、薬局に行ったらrubが名前につく薬を探してみましょう(答え: V--oRub、ヴェラップなど)」などとするのも有効である。

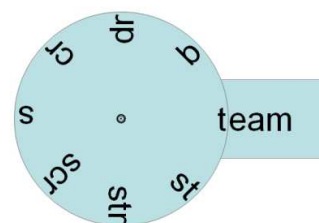
このカレンダーでは入門編でも ban: 禁止する ⇔ banish: 追放する ⇔ vanish: 消え去る など高校生レベルの語を取り上げている。(ban の音は「だめだ!」と何かを叩いているようなイメージ、banish の sh は「出」、vanish / vacuum: 真空 / vacant: 空いている の v は「無」の音にも通じる)子どもたちには中学3年までに入門編がすらすらと読めるようにしようと話しているが、part / party / apart が読めるようになった子どもたちにとって apartment / department などは容易な語であって、中学卒業までには初級編、中級編(大学入試レベル)の語まであらかじめ読めるようになる子が多い。

実践 ②

フォニックスの習得には少しずつでも繰り返しの練習が必要となる。日常語として英語を使用する児童に非常に有効とされるフォニックスが、日本人EFL学習者に関してはあまり成果を挙げられなかった理由の1つはここにあると考えられる。そこで考え出したのが、目につく場所に掲示し、勉強というほど身構えることもなく毎日練習できるカレンダーであるが、これと同じ趣旨で考えたのが右下の「回転英単語カード」である。毎月5種類を12ヶ月分(8単語×5枚×12ヶ月)を教室に掲示し、くるくる回して楽しみながら練習できるようにしている。

振り返り

子どもたちが休み時間に教室でこのカードを回している姿を見ることは少ない。しかしこれを目につく場所に掲示しておくだけでも音韻意識が高まるようであり、習得率は向上している。



回転英単語カード



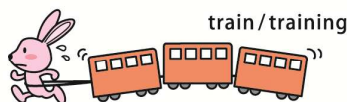
英単語カレンダー 2016



cat / cut

January

Sunday	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday
 bus をならべかえると、ちがう乗り物になるよ！  cat の t を p にかえたら何て読むだろう？					1 cat ネコ	2 cap 帽子、ふた
3 tap 蛇口/(トントン) 叩く	4 pat (ポンポン) 叩く	5 bat バット、打つ	6 bag かばん、袋	7 bug 虫、(機械) の欠陥	8 bus バス	9 sub (略式) 地下鉄、潜水艦
10 tub おけ、ふろおけ	11 but しかし、けれど	12 cut 切る	13 cup 茶わん、カップ	14 cop (口語) 警官	15 top 頂上、表面	16 pot つぼ、ポット
17 cot 簡易ベッド	18 not ～でない	19 net 網、ネット	20 ten 10、10の	21 yen 円、¥	22 yet まだ、もう	23 pet ペット
24 bet 賭(か) ける	25 beg 頼む、求める	26 big 大きい	27 bit 少し、小片	28 wit 機転、とんち、知力	29 kit 道具一式	30 pit (地面) の穴
31 tip 先端/チップ						



train/training

March

Sunday	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday
ee / ea は口を横にひらいて「イー」、ai / ay は「エイ」 		1 see 見える、分かる	2 fee 謝礼、料金	3 feel 感じる	4 free 自由な、無料の ひまな	5 tree 木
6 street 通り、…街	7 sea 海	8 seam 縫い目	9 steam 水蒸気、蒸気	10 stream 小川、流れ	11 scream 金切り声を出す	12 cream クリーム
13 day 日、日中	14 bay 湾、入り江	15 pay 支払う	16 play 遊ぶ、演奏する	17 say 言う、述べる	18 stay とどまる、…のままでいる	19 mail 郵便、郵送する
20 sail 帆、航海する	21 rain 雨、雨が降る	22 train 列車、訓練する	23 paint 絵の具、ペンキを塗る	24 boy 男の子	25 toy おもちゃ	26 joy 喜び、うれしさ
27 enjoy 楽しむ	28 oil 油、石油	29 boil 沸かす、煮える	30 join 参加する、つなぐ	31 point 先端、点	oi / oy は「オイ」。「イ」は軽くそえるようにしよう 	

©認定 NPO 法人リヴォルヴ学校教育研究所

気づきをうながすことを目的に単語配列に工夫を凝らした英単語カレンダー(入門編)。a の音は cat の a、u の音は cut の u として教える。ライズ学園では主に入門編に初・中級を併記した合冊版を用いている。

近年、英語の読みに困難を示す子どもたちへの指導にはフォニックス法が有効であることが、通説のようになっている。しかし問題の本質は、継次的な読みと同時的に読みとのアンバランスであって、フォニックス法や暗記法、文脈からの類推のいずれか1つに頼りすぎることは、問題を一層深刻化する可能性がある。そこで子どもたちには、「文字をきちんと順番通りに見ることはとても大切。だけど、それにこだわりすぎると英語は難しくなる。場面や文脈などから‘何となく’読むことも大切」と話し、入門期から以下のような練習を取り入れてきた。

実践

右上の図がフォニックスに基づいた読み課題、右下の図が絵から単語の読みを推測する課題である。上の課題では、ここでの ai が「エイ」と発音されることを確認したのちに「音の足し算」をしながら単語を読み、右の絵と線で結んでいく。下の課題では、絵を先に見せ、それが何を表しているのかを考えさせた上で、線で結ばれた先の単語を読ませるようにする。このような「継次的な読み課題」と「同時的な読み課題」を並行させている。

これはまとまった英文を読む際にも応用できる。例えば教科書でペンギンが紹介されている英文を読ませる際には、まず挿絵から「何について書かれているか」と問い、細部を読ませる前に「それではまずペンギンという単語を探してください」「どんなことを紹介していると思いますか」「それでは‘白、黒、飛べない’と書かれている部分を探してみてください」などとする。単語の意味調べなどの予習は‘禁止’し、1ページに「ざっと目を通す」時間はせいぜい30秒程度としている。

振り返り

フォニックスなど知らなければ「pen(ペン)・gu(グ)・in(イン)? ペンギン?」と、言ったであろう子が、そのすぐ横にペンギンの絵が示されているにもかかわらず、「pen(ペン)・gu(ガ)・in(イン)?」と首をひねってしまう。「gu のあとにさらに母音字が続く場合、u が発音されない……」などとルールを付け加えていくと、これはもう完全に負担過重となってしまう。フォニックス指導の短所を補う上で、継次的な読みと同時的な読みのバランスがとれるようにすることは極めて重要である。

私たちが日常生活の中で無意識に行っている言語活動は、個人差こそあれ実によくバランスがとれたものである。しかし外国語を教室で学ぶとなると、教える側も教わる側も進化の過程で身につけてきたこのバランス感覚を失いがちであるように思える。バランスをとろうと意識している間は自転車に乗ることはできないが、それを無意識に行えるようになれば、たいていの人が自転車に乗れるようになる。カタカナ語は簡単に覚える子どもたちがなぜ、英単語は覚えられないのか? 母語は簡単に習得できる私たちが、なぜ外国語が覚えられないのか? その理由はすべて、バランス感覚の喪失で説明することもできると考える。

+ ai (エイ)

m	+ ail	= mail	•	•	
n	+ ail	= nail	•	•	
r	+ ail	= rail	•	•	
r	+ ain	= rain	•	•	
tr	+ ain	= train	•	•	

P p

なまえ：ピー
おと：ブ

くちびるをとじて、そこにためた息を前に強くはきだすつもりで練習してみよう。

	p + anda	= panda
	p + unch	= punch
	p + ot	= pot
	p + ig	= pig
	p + en	= pen

よめるかけるABC英語れんしゅうちょう
©リヴォルヴ学校教育研究所



▶ 大事にしていること

数学における美しさの1つに、単純性(答えが1つになること)があります。しかしその答えに到達するまでには、いろいろな考え方があります。文章問題を解く際に、1次方程式を使う子もいれば、連立方程式を使う子もいる、さらに立式せずに答えを導く子もいます。数学は答えが大事なのではありません。その考え方、解き方こそが大事であり、どれも間違いではなく尊重されるべきものなのです。

空間図形の学習では、例えば円柱は真上から見ると円、真横から見ると長方形に見えます。1つの立体でも見方が変われば、形も変わります。

子どもたちと接する中で常に思うことは、豊かな人生を歩んでほしいということです。ライズ学園からの帰りの道、自宅に帰るためのルートも様々です。短時間で家に戻って、好きなことをするのも1つ。桜がきれいに咲いているから、別なルートで花を見ながらちょっとだけ遠回りするのも1つ。同じ自宅に帰るという目的ではありますが、いろいろなルートがあるのです。そしてそれはどれも間違いではないのです。桜を見て心が豊かになる、早く帰宅して好きなことをする時間が持てることで心が豊かになる、いろいろな選択ができるのです。数学を学習する中で、自分とは違う見方や考え方があることを知り、認め合い、様々な考え方があることを学んでほしいと思っています。

(ライズ学園スタッフ長 数学担当 本山 裕子)

Topic #01 | 新出事項への抵抗感を軽減する

新しい概念について学習するとき、そこで難しいと感じてしまうと、後々の抵抗感が増大し、子どもたちを数学嫌いにさせてしまうことがある。新出事項については、具体物を使ったり、体感させたりすることで、楽しいと感じられる数学学習への第一歩とすることを心がけている。

(1) 正負の数～「マイナスを引く!？」～【中学数学】

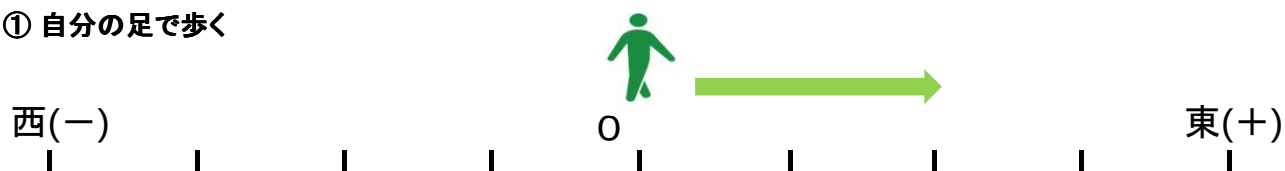
算数から数学にかわって最初に出てくるのがマイナスの数と文字を使った式である。中学1年生のAさんは、温度計や天気予報から、身近なところにもマイナスの数があることを思い起こさせても、「マイナスを引く」ことに抵抗があった。

$$\cdot (-1) - (-2) = ?$$

$$\cdot 5 - (-2) = ?$$

実践

① 自分の足で歩く

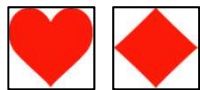


自分が数直線上にいることを想定し、動いてみる。マイナスの方向を見て2歩下がる。結果、東(+)へ2歩進んだことに。自分で歩かせて実感させる。

② トランプゲームで体感



黒のカードは +



赤のカードは - (赤字)

ババ抜きの変則で、手持ちのカードから赤を引いてもらうと、自分の持ち点がUPする。マイナスを引くとプラスになる実感を持たせる。

振り返り

「歩く」「ゲームをする」を繰り返す中で、マイナスを引くとプラスになることが実感でき、減法を加法に直すことがスムーズにできるようになった。この学習をしたことで、この後に出てくる乗法の「マイナス」×「マイナス」がプラスになる学習も難くこなせた。

(2) 文字式の導入【中学数学】

中学1年生のBさんは、文字を使う式になかなか慣れることができず、抵抗があった。

実践

文字の代わりに、Bさんが好きなキャラクターを取り入れて文字式に表す練習をした。

$$\begin{array}{ccc} \text{😊} & \text{😊} & \text{😊} \end{array} \longrightarrow 3 \text{😊}$$

$$\begin{array}{ccc} X & X & X \end{array} \qquad 3 \ X$$

$$\begin{array}{ccc} \text{😊} & \text{😊} & + \end{array} \begin{array}{ccc} \text{😊} & \text{😊} & \text{😊} \end{array} \longrightarrow 5 \text{😊}$$

$$\begin{array}{ccc} X & X & \end{array} \qquad \begin{array}{ccc} X & X & X \end{array} \qquad 5 \ X$$

キャラクターが同じだから足せるよ！

$$\begin{array}{ccc} \text{😊} & \text{😊} & + \end{array} \begin{array}{ccc} \text{★} & \text{★} & \text{★} & \text{★} \end{array} \longrightarrow 2 \text{😊} + 4 \text{★}$$

$$\begin{array}{ccc} X & X & \end{array} \qquad \begin{array}{ccc} y & y & y & y \end{array} \qquad 2 \ X + 4 \ y$$

キャラクターが違うから足せないよ！

振り返り

Bさんは、慣れるうちに文字への抵抗がなくなり、キャラクターを文字に直してもスムーズに計算できるようになった。

中学生・高校生からライズ学園に来る子どもたちは、小学生から不登校だったという子や、かけ算九九からという子も少なくない。また、「算数は苦手だが数学は得意」というようなタイプの子もいる。理解の仕方や早さも個々にペースが違うため、個の希望や状態、特性に応じて学習を進める必要がある。

(1) 方程式の応用～道のり・速さ・時間～【中学数学】

アセスメント

方程式の応用として頻出する道のり・速さ・時間の問題は、子どもたちにとって、意味理解・操作手順の把握が難しい問題の1つである。

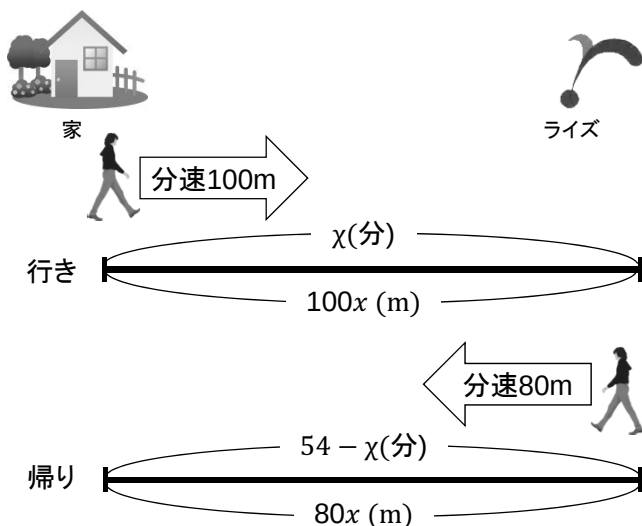
中学1年生Cさんは、道のり・速さ・時間が明確になっていれば計算式を立て解答を出すことができるが、少し複雑な文章問題になると意味理解に困難を示す傾向があった。

同じく中学1年生Dさんは、意味はすぐに理解することができるが、実際の計算をさせるとその操作手順に困難を示し、正解が導けないでいた。

実践

Pさんは、家からライズ学園まで登園するのに、行きは分速100m、帰りは分速80mで往復したら、54分かかりました。家からライズまでの道のりを求めなさい。

Cさんに対しては、文章題から、具体的なイメージ図を作ることができるようになるための練習を繰り返した。最初は一緒に、徐々に一人でできるよう支援した。



Dさんに対しては、文章題から、下記のような表を書かせた。また、テクニックとして、行の上から順に「道のり」、「速さ」、「時間」となるよう書くと、計算が分数になる際に表の罫線が※括線となることに気付かせるようにした。

※ 括線 … 分母と分子の間にある線

	行き	帰り
⑤ み(道のり)	x	x
④ は(速さ)	100	80
③ じ(時間)	$\frac{x}{100}$	$\frac{x}{80}$

※ 表にすると …

テクニックとして、道のり 速さ 時間のどれかが、1つずつあてはまることを伝える。

⑤ → 求めるもの、文字におくもの

④ → わかっているもの

③ → 式にするもの

さらに 時間と式にする問題が多いので、「み」「は」「じ」の順に書くと、そのまま下に分数の式が入る。

振り返り

子どもたちの特性に応じて、丁寧に時間をかけて解法への道筋を支援することにより、つまずきがちな当分野を得意につなげることができた。

また、Cさん、Dさんのように、図や表を書かなくても立式できたり、立式せずに答えを導ける子もいる。歩く速さを求めるのに、分速10kmなどと答えが出て、おかしいと感じるなど、だいたいこれくらいになるという予想や勘も数学ではとても大事なことでありと考えている。

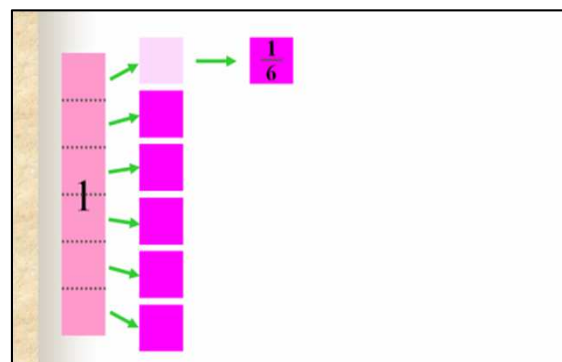
(2) 分数の意味と表記をつなげる【小学算数】

Eさんには同時処理優位の傾向が見られ、教科書や口頭での説明では分数の概念がよく理解できずにいた。そこで下図のようなパワーポイントを作成し、言葉ではなくイメージで理解できるように試みた。

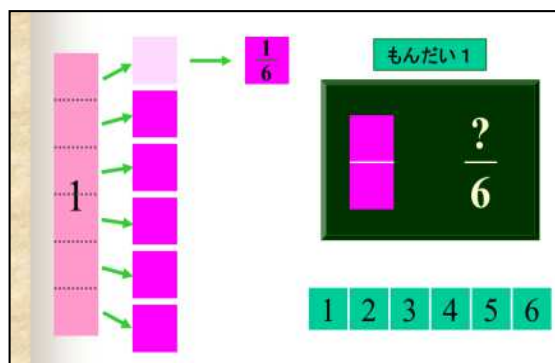
実践



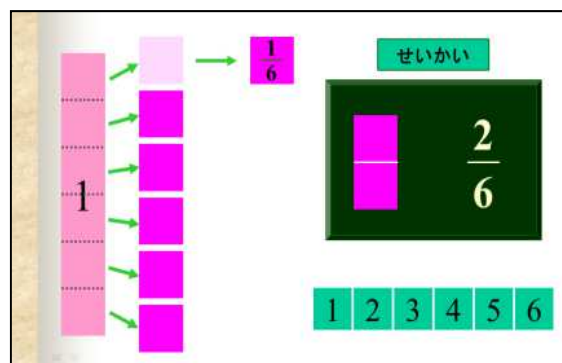
ハサミが左に移動し、テープを6つに切る



6片が移動、内1つに 1/6 と表示される



2片が1つになる様子を見せ、
「ここに入る数字はどれ?」と尋ねる。



正解を下から選んでクリックさせる

振り返り

パワーポイントでは、アニメーション追加機能を使って、オブジェクトや数詞などをもっと細かく順番に表示するようにしている。また、ここではできる限り言葉を用いず、「こうなって、こうなったら、こんなふう(1/6)に書くんだけれど、このときは?のところどんな数字が入るかな」のようにした。ここで、「自分で考えてね。(教えないんだから)間違えたってあたり前だからね」とするのは、試行錯誤を尊ぶライズ学園でのすべての教科指導に通じる手法である。これを見せた後で足し算や引き算に入ると、通分などの概念も理解しやすいようであった。

算数の授業で1つわからなかったことが、雪だるま方式にわからないことが増えてしまっている子がいる。逆に言えば、1つわかれば、そこから発展させることも可能である。既習事項できちんと理解できていることを利用しながら、自分で解決方法を見つけ、力を伸ばす支援をしていく。また、子どもたちの思考を遮らないようにヒントを出すタイミングにも注意をしている。一番良いタイミングで出せるのも個別指導の強みである。

また、単に教科書の内容を学習するのではなく、自分で課題を見つけそれを追求する姿勢を伸ばすことも大事であるとする。以下に「算数は嫌いだけど数学は好き」「教科書のやり方ではなく自分のやり方で問題解決したい」という二人について紹介する。

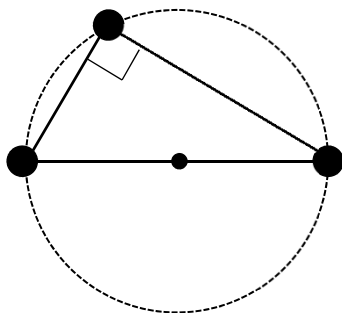
(1) 円の性質を見つける

もともと「考える」ことが好きな中学2年生のFさん。証明の学習の流れで、いろいろな図形(三角形、四角形)が出てきたときに、教科書には載っていない「円」に、三角形、四角形を組み合わせるとどうなるんだろう、とつぶやいたことから、円の性質の学習をすることにした(ちなみに円の学習は中学3年生)。

実践

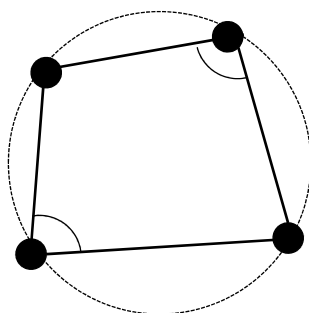
円周上に3点または4点をとって、いろいろな性質を見つけてみよう。

二点を結ぶ線が中心を通る場合、円周角は 90°



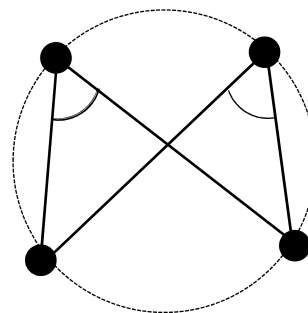
三角定規をあてて発見

対角の和は、 180°



角度を測って推測 $\Rightarrow$ 証明

同一弧に対する円周角は等しい



角度を測って推測 $\Rightarrow$ 証明

振り返り

Fさんはその後、スポーツでチームメンバーの配置を考える際や、図形を用いたポスター作りなどの場面でこの円の性質を活用し、授業だけではなく日常生活でも繰り返し使うことで、自分のものにしていった。

教科書に載っている定理を教えるのではなく、「自分で見つけた」という実感をもたせることで考えることの楽しさを味わわせることができた。さらに、忘れることを防ぐ効果も期待できる。

(2) プログラミングで数学課題を考え、論理的思考力を育てる

小学時代は九九などでつまずき算数には苦手意識があるGさんだが、中学の数学に対しては、虚数や関数に興味を示すなど前向きな姿勢をみせていた。一方で、「人から教えられることが嫌だ」といい、スタッフは教科書にこだわらず読み物やゲームを通した学習を提案したが「なんか違う」と違和感を示していた。

実践

学習内容を決めあぐねていた時に、Gさんが「ハスケル(プログラミング言語)を使って数学の時間に何かできたらなあ…」とつぶやいた。この言葉をきっかけにして、プログラミングで数学課題を考え、論理的思考力を育てるというGさんの学習スタイルが確立した。

※ハスケル・・・非正格な評価を特徴とする純粋関数型プログラミング言語である。名称は数学者であり論理学者でもあるハスケル・カリーに由来する。

(「Haskell」『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』(<http://ja.wikipedia.org/>))

2015年12月17日15時(日本時間)現在での最新版より一部抜粋)



道路網の問題。ゴールにたどり着くまでの最短ルートを導き出すプログラム。プログラム完成まで一か月を要した。わからないことは自分でインターネットや書籍をつかって調べた。弱音を吐く場面は多々あったが、自分で決めたことであるため決して投げ出さずに粘り強く取り組んでいた。進めた作業をスタッフに報告することを課題とし、相手に分かりやすく順序立てて説明できる力も養えるようにした。

振り返り

プログラムが完成して、答えが出せた瞬間は、大声をあげて教室の中を走り回った。感想をもとめると「つらかった。でも楽しかった。達成感を感じる。」ともらしていた。その表情は、眠そうでまわりのことには興味がないといったいつもの表情とは明らかに違っていた。

現在もGさんは「ハスケルを極めたい。もっと美しいプログラムを書きたい」とモチベーションを保ち、新たな課題にむけて意欲的に学習を続けている。

▶ 私にとってのライズ学園



ライズ学園スタッフ長 数学担当 本山 裕子

教員時代は1年間で教科書を終わらせるために、つねにあせりを感じながら授業を進めていました。書くことが困難な子がいることを考えずに、ノートを取らせ、途中式を書かせていました。途中式を書かせていたのも、子どもたちのことを考えているようで、実は私自身が見たときに間違いを発見しやすくするためだったのかもしれませんが。実際、あまりにも忙しすぎて時間に余裕もなく、教師になったのに教材研究以外の事務に追われる毎日でした。

しかし、ライズ学園では子ども一人ひとりに寄り添って、それぞれの考え方を大事にしながら授業が進められるのです。こんな解き方があったのかと子どもに教えられることもあります。私も日々勉強です。



▶ 大事にしていること

「実験を通したコミュニケーション」

子どもたちは実験を通して、いろいろな発言や行動をしてくれる。それらは私が予想もしないことで、一人一人の新たな発想や気づきが含まれている。私はこれを大事にして、なるべく一人一人へ、その素晴らしさを自覚させるように返している。このようなやり取りを通して、子どもたち一人一人が自己肯定感を持ち、自信を取り戻し元気になることを願っている。

実験を一人でなく多数の子どもたちと行うと、自ずと子ども同士のコミュニケーションが生まれる。お互いが張り合い過ぎて上手く行かない場合もあるが、多くの場合は互いに刺激し合って、新しい気づきに発展する。これは、相手の気持ちを理解することにもつながる重要なことだと考えている。

- 1) 実験(野外観察を含む)を通して、実践力や自己肯定感の獲得を目指す。体を使うアナログ実験を重点的に行う。
- 2) 少人数での学習のメリットを活かし、子どもとのやり取りを重視する。対話を通して、個人の特性を把握するとともに、子ども自身が自分の能力に自信を持つように働きかける。
- 3) 安全に十分配慮して、なるべくマイクロスケール(少量の試薬)で実験する。予備実験を行って、安全に配慮する。
- 4) 教師自らが理科実験を楽しんで、失敗を恐れず試みる。失敗したときは、何が原因なのかを説明する。原因が判らないときは判らないと説明する。
- 5) 教科書ではすべてがわかったように解説されているが、わかっていないことが沢山あることを伝え、未知なることへの興味関心を促す。

(ライズ学園スタッフ 理科担当 玉生 志郎)

Topic #01 | 安全への配慮および工夫をこらした実験、実験器具

学園には実験器具や薬品が不足していて、また、理科室の設備がないため、安全性を考慮すると実行できない実験が多い。それでも、いろいろ工夫すれば、安全に実験できるものも多い。

子どもの喜ぶ顔を思い浮かべて、時間と資金を投入して、実験の準備に励んでいる。特に安全性に配慮して、予備実験をなるべく行うようにしている。

(1) 化学薬品を使用する実験(全般)

ライズ学園には薬品保管庫もドラフトもないので、薬品は最低限のものを少量入手するようにしている。また、安全性を考慮してマイクロスケール実験(使用する薬品の量を少なくする方法)を心がけている。

化学薬品を個人的に購入するのは、法律的にも安全上からも難しい。そこで、基本的には薬局やスーパー等で入手できるものに限って使用している。また、化学薬品の代替品となるものが、食料品や日用品として販売されているものもある。

【一例】

希塩酸→サンポール / 水酸化ナトリウム→ハイター / 塩化銅→サンボルドー(農薬)
炭酸水素ナトリウム→重曹やセスキ炭酸ソーダ等 / ヨウ素液→イソジン
ベネジクト液→ウルエース(尿糖検査紙) / 塩化コバルト→乾燥剤

その他、インターネット等で入手方法を探す。これらの代替品はやはり化学薬品に変わりはないので、ドラフトのない普通の部屋で使用する場合は安全に十分配慮する必要がある。窓を空けて換気に注意する。場合によっては室外で実験する。また、保護メガネは必須で、マスク、手袋も準備する。薬品は危険性の観点からも、後処理の観点からも、なるべく少量で実験することが重要である。危険性が高い実験は、潔く諦めることも肝要である。

(2) 実験器具の代替品を準備する(全般)

理科の実験にはいろいろな器具が必要である。それらを専門店や教材屋から購入しようとすると、一般に高価で手を出せない。そこで、百元ショップやホームセンターで代替品を探したり、それらを素材にして手作りするようになる。これらの器具や材料を探すには、日数がかかるので、なるべく早めに準備しておく必要がある。また、安全上から予備実験をしておくことが重要である。

これらの実験の準備には、理科支援員のような人がいると助かる。

【手作りできる実験器具の一例】

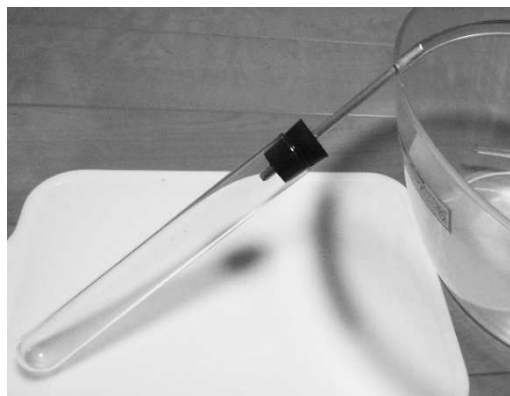
鉄製スタンド(写真上)

1リットルペットボトルの上部に穴を空けて、そこに細い金属棒を通す。使用するときにはペットボトルに水を入れて倒れないようにする。



試験管の穴あきゴム栓とパイプ(写真下)

穴の開いていないゴム栓に千枚通しで穴をあけ、アルミ管を挿す。その先にビニール管をつなぐ。耐熱性の高いガラス管の方が、より安全である。

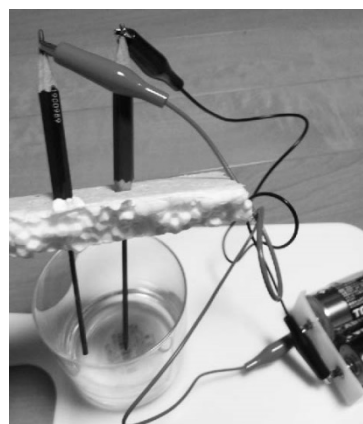


電極(写真右)

炭素電極(炭素を電極材料にする電極)の場合は鉛筆の両端を削って使用する。写真は炭素電極。

金属電極は金属板を切り取って、発泡スチロール板に射し込む。釘でも良い。

ワニ口クリップコードや電池ボックスは、ホームセンターや百元ショップなどで入手できる。



Topic #02 | 子どもと実験・観察を楽しむ

各学年とも、理科の授業は週1時間である。しかしながら、少人数の学習なので、集中して取り組みば1年間で教科書の範囲をほぼ終了させることができる。時間の許す限り教科書に載っている実験およびそれに関連した実験を、なるべく多く実行するように心がけている。

子どもたちに通常の学校と同様の内容を学べることを実感させ、安心して学園に通えるようにさせる。また、実験を通して、学ぶことは楽しいことであることを実感させる。子どもたちが能動的に行動し考えることを促す。さらに対話を通して、各自の能力に自信を持つように働きかける。

これまで沢山の実験を行ってきたが、その中から5例紹介したい。

実践

～いろいろな化学変化～

水の電気分解の実験 (中学2年「化学変化と原子・分子」)

【用意するもの】

- ・ 簡易電解装置(写真右)
- ・ 電解液:セスキ炭酸ソーダ(炭酸ナトリウムと重曹の複塩)
- ・ 電源として1.5V電池6本
- ・ ワニ口クリップ(ケーブル付き)2本
- ・ マッチ、ロウソク、線香(発生ガスの種類を確認するため)



※ ヤガミ社の簡易電解装置(3000円)を見つけ購入した。これを使うと発生する水素ガスと酸素ガスの容積比が2:1になることが簡単に知ることができる。

※ 教科書には使用する電解液として水酸化ナトリウム液が記載されていたが、劇薬で入手できないので、代用品としてセスキ炭酸ソーダ(掃除用として市販されている)を使用。より安全に実験できる。

はじめに、福島第一原発で発生した水素爆発を思い出させた。次いで水素爆発と水素爆弾の違いを解説した。実験では発生した酸素は線香がよく燃えることで、また水素は着火したときの爆発音で確認した。安全に実験できるので、子どもたちは怖がりつつも楽しむことができた。

【実験手順】

- ① 保護メガネと薄手のゴム手袋を着ける。
- ② セスキ炭酸ソーダ溶液(濃度が高い程、反応が早い)を作る。
- ③ 簡易電解装置の容器に、上記のセスキ炭酸ソーダ溶液を入れる。
- ④ 電源として1.5V電池6本を直列につないで9V電源とする。電圧が低いと反応が進まない。
高い程、反応は早くなるが危険性も増すので、9～12V程度が適当と思われる。
- ⑤ 簡易電気分解装置の陽極陰極に装着した試験管を、セスキ炭酸ソーダ液で満たす。
- ⑥ 電源を簡易電解装置の陽極陰極に、ワニ口クリップで接続させる。
- ⑦ 5分程で陽極側に酸素ガス、陰極側に水素ガスが1:2の割合で溜まり、最終的に試験管が一杯となる。

～運動と位置エネルギー～

位置エネルギーが運動エネルギーに変わる実験(中学3年「仕事とエネルギー」)

【用意するもの】

・ 電線カバー

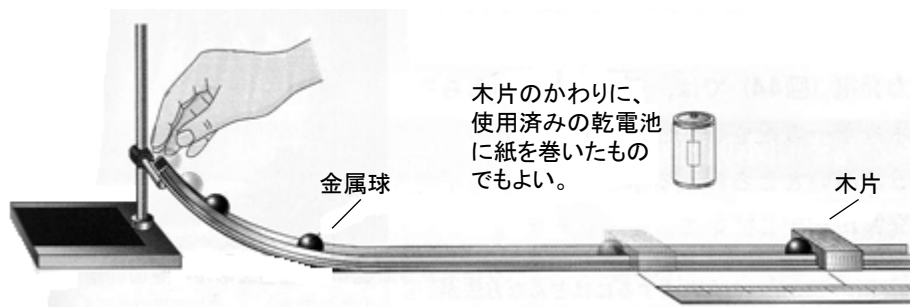
(ビー玉がスムーズに移動できれば、ビニールチューブでも可。勾配を急にすると電線カバーから金属球が飛び出してしまうので、その場合はビニールチューブの方が良い)

・ 金属球(できれば鋼球が望ましいが、ビー玉でも可)

・ 物差し(一方の端の高さの測定、及びもう一方の端からビー玉が飛んだ距離の測定用)

・ 木片(ホームセンターで切れ端を入手。接地抵抗が少なくなるように、研磨面が良い)

・ グラフ用紙(高さや木片の移動距離の相関をプロットする)



高さや移動距離を大体で測定したが、得られた両者の相関は大変良かった。高さや木片の大きさ、重さを変えて実験すると面白い。ビー玉がホースの中をスムーズに移動するように、子ども自身が上手に工夫した。

【実験手順】

- ① 一人がホースの一端を20～30cm程度に持ち上げて、高さを測定し、ホースへビー玉を落とす。
- ② もう一人はホースのもう一方端をテーブルに固定して、ビー玉の飛び出しを確認する。
- ③ ビー玉が飛び出し、前面に置いておいた木片がどれだけ飛ばされたか、距離を測定する。
- ④ 高さを変えて繰り返し実験し、その時の高さや木片の移動距離のデータを記録する。
- ⑤ 以上の結果をグラフ用紙にプロットして、直線性を確認するとともに、その傾きを測定する。
- ⑥ ビー玉の重さを変えて実験すると、また異なったデータが得られる。

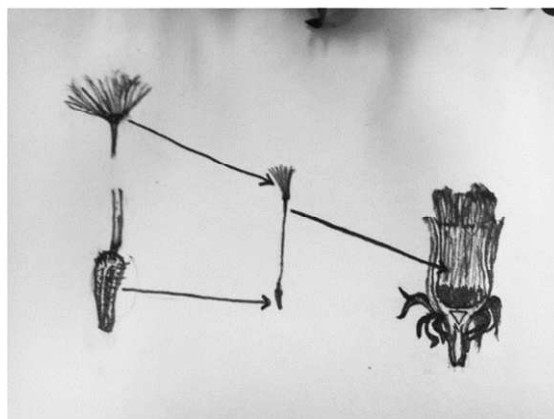
～身近な植物～

春の植物採取と観察（中学1年「植物の生活と種類」）

【用意するもの】

- ・ 採集した植物
- ・ ルーペ
- ・ デジタルカメラ
- ・ スケッチ用紙

中学1年生の新学期は、身近な植物観察からスタートする。子どもたちを近所の空地に連れ出して、10種類以上の植物を見つけ採集する。野外観察のミニチュア版である。汚い場所や虫の嫌いな子は抵抗を示すが、多くの子は長閑な春の戸外を楽しみ、野原にいろいろな植物を見つけだす。それらを採集し、教室に持ち帰る。



【実験手順】

- ① 採集した植物を教室のテーブルに並べて、教科書の写真と見比べながら花のつくりを調べる。
- ② 絵の得意な子はルーペを使いながら観察し、花のつくりを図にまとめる。

絵が不得意な子は、なかなか絵を書けない。しかし、少しでもいいから書いてみるように励ます。

人によって得手不得手があることを知ることも重要な学びである。

★ 発展 ★

授業後自ら植物園に足を運び、オリジナル図鑑を作った生徒の作品（写真右）。植物の写真とともに、生息地や開花期など簡単な解説文をつけてまとめた。

色々な植物を観察することで、植物の種類の多さやつくりの違いについても知る事ができた。

プロイフィス・アムボイネンシス
(ヒガンバナ科)



原産地は東南アジアからオーストラリア東北部にかけて、
熱帯雨林の中や林の縁に生える。

草丈は20センチから40センチで、
根際から生える葉は円形である。

葉には艶があり、長さ20センチから30センチと大きい。

開花時期は7月から8月である。

花茎の先に数輪の白い花をつける。

花被片は6枚。

花の後にできる実はさく果である。

～体のつくり～

唾液の働き（小学6年生および中学校2年生「消化と吸収」）

【用意するもの】

- ・ ジャガイモ、飯粒、コーンスターチ ※でんぷんを含むものを用意
- ・ シャーレ
- ・ すりおろし器
- ・ ストロー
- ・ アルコールランプ
- ・ うがい薬（イソジン）
- ・ 糖尿の検出紙（ウリエース）

でんぷんに対する唾液の働きを調べる実験である。薬品を使う実験は、同じものが手に入らないとあきらめなくてはなくなる。今回はでんぷんを確認するにはヨウ素液が必要であるがうがい薬で代用した。また、唾液ででんぷんが糖に変化したことは、ベネジクト液で確認するように教科書に載っているが、ベネジクト液は高価で後処理が難しいので、代替品として糖尿の検出紙（薬局で販売している）を使用した。

【実験手順】

- ① すりおろし器ですりおろしたジャガイモ、飯粒、コーンスターチをシャーレ入れ、イソジンの希釈液をたらす。
原液が濃すぎると、紫色が判らないので、十分に希釈する。
- ② それぞれにストローで唾液を加えて、反応が進むようにアルコールランプで40～60℃程度に温める。
- ③ それに糖尿検査紙を入れて、緑色に変化することを確認する。

手順 ①



手順 ②



手順 ③



～体のつくり～

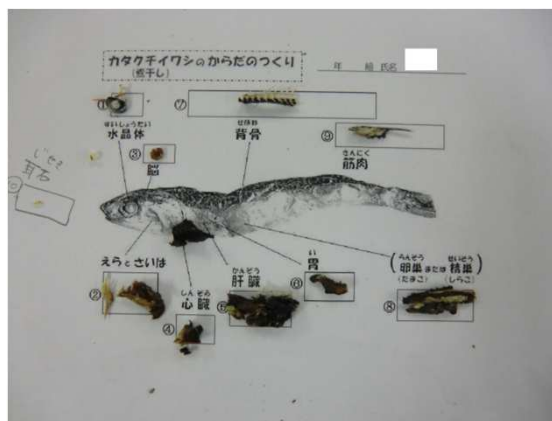
煮干しの解剖 (小学生高学年～中学生)

【用意するもの】

- ・ カタクチイワシ ※ なるべく大きなもの
- ・ ピンセット
- ・ カッター
- ・ 台紙
- ・ セロテープ
- ・ 煮干しの解剖マニュアル

「煮干しの解剖資料室 <http://www.geocities.jp/niboshi2005/index.html>」で紹介されており、参考にした。

解剖は抵抗のある子もいるし、素材の準備も大変である。カタクチイワシは生ものでないので準備も簡単、子どもたちにとっても抵抗感なく実験観察することができる。



【実験手順】

- ① 「煮干しの解剖マニュアル」に従って、解剖。背開きにして、頭の方から目、脳、耳石、えら、骨、心臓、肝臓、胃、腸、卵巣などを見つけて、台紙に貼る。
- ② 胃の中に食べた物が残っているかどうか、顕微鏡で観察する。
それぞれの部位がどんな働きをしているか、人間にもあるものはどれかなど、子どもたちに質問しながら進めていくとよい。

★顕微鏡★

理科ではどうしても購入しなければならない備品がある。その1つが顕微鏡である。

YASHICA製のデジタル液晶顕微鏡(写真右)は、比較的手に入れやすい値段で性能が良い。液晶画面で2～3人が一緒に観察できる。また、顕微鏡画像も簡単に撮れるので、後日写真を見ながら振り返りもできる。生物実験のみならずいろいろな実験で利用でき、大変重宝している。



振り返り

実際に子どもたちと実験してみると、上手く行く場合と失敗してしまう場合とがある。失敗の原因はいろいろあるが、あまり失敗を恐れないようにしている。とにかく実験してみて、その過程や結果を楽しむことが重要である。

教科書には上手く行った結果のみが記述されているが、実際に行ってみると、そうならない場合も多い。研究をしてきた者としては、実験に失敗はつきものであることを子どもたちに知って欲しいという思いがある。しかしながら、あまりに失敗が多いと、子どもたちの意欲を低下させてしまうので、ほどほどの失敗が良い。

実験に取り組まない、または実験を途中でやめてしまう、などの子もいる。これらに対しては、ある程度距離を置いて、しばらく静観するようにしている。こじれて、登園しなくなるとは、元も子もなくなるからである。時には、他のスタッフがサポートしてくれて、うまくいく場合もある。

実験後には、ワークシートを使つての振り返りを行い、学習事項の定着を図るようにしている。また、中学三年生や高校生には受験を意識した取り組みが必要となる。受験生には過去問を解かせて、できなかったところを解説している。生徒は少しでもできるようになると自信をもつので、十分解説して理解を深めるように心がけている。

Topic # 03 | 理科実験で参考になるサイトや研究会

まず、教科書をじっくり読んで、そこに記載されている実験を試みることから始める。その実験が装置や材料の都合で難しい場合は、代替の方法を探す。この時、参考になるのが、インターネットの検索サイトである。

例えば「中学理科、電気実験」などと検索すれば、参考になるサイトが多数ヒットする。そのうち、実行可能な方法を見つけて、その方法を試みる。その他、例えば科学教育研究協議会から出版されている「理科教室」を参考にしたり、その研究会で実施されている「お楽しみ広場」等に参加して、実験のネタや実験教材を入手している。

▶ 私にとってのライズ学園



ライズ学園スタッフ 理科担当 玉生 志郎

私は退職後、何か社会に役立ちたいという思いがあった。また、長年、地学の研究に携わり、実験や観察の重要性を強く感じていたので、子どもたちといっしょに理科実験ができれば楽しいだろうとも考えていた。そんな時に、ライズ学園の理科スタッフとなり、今まで2年半務めてきた。

授業では、子どもたちが安心できる居場所の提供を最優先に考えている。その上で、理科実験と一緒に楽しむことにしている。元気になれば、子どもたちは素晴らしい能力を発揮して、創意工夫を凝らした実験をしてくれる。多くの子どもたちがぐんぐん成長し、自信をつけていく。その姿を見ることは、スタッフとして本当にうれしい。私の生き甲斐となっている。

理科実験の準備や後片付けは大変であるが、大方の子どもたちは協力してくれる。また、実験をしていると、子どもたちの思わぬ創意工夫や発言に驚かされる。これこそが生きる力の証である。これを大事にして、子どもたちに自信を持たせ、各自の得意な分野を大いに伸ばして欲しいと願っている。



▶ 大事にしていること

社会科が嫌いという理由の多くは、覚えることがたくさんありすぎるというものです。ライズ学園では社会科を暗記科目としてではなく、多様な視点で社会を見つめる目、多様な声を拾う耳、自分の言葉で他者に伝えることができる口と、それに伴う手足（行動力）を育てるためのものと考えています。教科書に書かれていることを覚えさせようとするには、週に1時間では無理があります。しかし子どもたち自身が歴史に問いかけ、自身の目で現代社会を見つめようとする意欲を高めるサポートができればと考えています。

実践にあたって大事にしていることとして、下記3点があります。

- ① 一人ひとりの興味関心や得意分野、体験の有無を観察し授業に反映することで、学ぶ意欲を引き出す
- ② スタッフ－子ども間 の双方向性を重視し、自ら考える力を伸ばす
- ③ 子ども間 の双方向性を重視し、多面的なものの見方を学びあえる場をつくる

（ライズ学園スタッフ 社会担当 松井 由佳）

Topic #01 | 学ぶ意欲を引き出す

ライズ学園に通い始めの子どもたちは、自己肯定感の低下から、学ぶ意欲もなかなか上がらない場合が多い。だからこそ、子どもたちの「好き」や「得意」を尊重し、その子なりの社会科への入口を一緒に見つけるプロセスを大事にしてきた。一人ひとりに合わせた授業づくりで、子どもたちを知り、ゆっくりと関係を深めながら、学ぶ意欲を引き出せるようにしている。学ぶことが楽しいと体験した子どもたちは、次の学びを追求するようになり、その循環が人生を豊かにしていくのだと思う。

実践



小学4年生のAさんは、自分が好きな絵画造形と社会科を入口に、ライズ学園に登園するようになった。

社会科に関しては、特に地図を「読む」のが大好きだというAさん。国語や算数はやりたがらない一方、保護者からは、「暇さえあれば地図を眺めている」と伝え聞いていた。

学習の進め方を相談していると、「世界地図を自分の手で書いてみたい」と言い出した。



振り返り

模造紙を用意し、Aさんが世界地図ポスターを見ながらフリーハンドでそれを写していく作業を見守った。Aさんは、週1回50分の社会科の時間を使って、半年以上の月日をかけ地図を仕上げた。

海岸線の1つ1つを丁寧にしながら、その地形の成り立ちや人の生活にまで思いを馳せていたAさんが何か発見をするとそれに応えたり、その部分にあたる国々や地域について話題を広げた。できあがるにつれて、様々な半島、島、大陸を相対化することで得られる、面積の大小や形への気づきも、Aさんの知的好奇心を常に満たしていた。

その後Aさんは登園日数を増やし、国語や算数の学習にも取り組むようになっていった。完成した際の達成感、作成中と完成後におけるスタッフや子どもたちからの称賛の言葉がけも、Aさんのその後の自信につながり、学ぶ意欲を引き出す結果となった。Aさんは、ライズ学園のすべての活動において自分なりの学びを得るようになり、それを言葉にすることで他の子どもたち・スタッフにも学びを与えていく存在となっていった。

Topic #02 | 自ら考える力を伸ばす

現代社会の問題は複雑で、誰にとっても正解の解決法はあり得ない。過去の歴史においても、様々な事象をどう捉え評価するかは人によって分かれるものである。ライズ学園の社会科では、そんな前提に立ったうえで、考えるきっかけや取りつく島のようなものを提供し、双方向の会話を重視しながら、自ら考える力を伸ばすようにしている。

資料としては、自作のパワーポイントやプリント等を用意するようにしている。教科書は、子どもにとってあまり身近ではない言葉が多く並んでいるし、資料集も含め情報量が多すぎて、どこを見ればいいのかかわからないという子も多い。イメージを中心に情報をしぼって提示し、子どもたちが発言しやすい問いを持って授業を進めていく。

実践

中学2年生のBさんとともに、明治時代、日本が文明国であることを欧米人に示そうとして進められた欧化政策の是非について、考えた。



パワーポイント画面の例

- ① 鹿鳴館の中で毎夜行われた舞踏会の様子を見せ、気づくことを発言させた。「カーテンがある」「オルガンがある」「カタカナのものばかり」などの発言のあと、「でも外の木は桜だ」と指摘していた。
- ② 十数年前まで江戸時代だった日本に、なぜこのような建物とイベントが出現したかを考えさせた。「新しいもの好きの日本人が、外国の真似したかったんだと思う」などの発言とともに、「あんぱんもこの時代」と2つの文化の融合にも着目していた。



③ 鹿鳴館に行くために着飾った男女の鏡に映った姿が猿になっている風刺画、ノルマントン号事件の風刺画を見せる。Bさんは、日本の政治家にとって、欧米への憧れよりも、不平等条約の改正が大きな目標になっていたようだを知り、「早く認められなきゃと焦ってたのかも」と当時の政治家の気持ちに思いを馳せた。

④ その後日本が不平等条約の改正に成功したこと、鹿鳴館の存在がジャーナリズム、野党、民衆に批判を受け続けたことを伝えると、Bさんは「今でもよくある話」と、現代とつなげて考え始めた。

⑤ 「欧化政策」全般について、資料集や図書館の本などで提示すると、Bさんは関心を持って資料を読み込んでいた。ここで「文明開化」というキーワードにも触れ、都市住民を中心とした「衣・食・住」の変化に着目させた。「当時の人たちはよくこんな変化を受け入れたよね。自分ならすぐには受け入れられない」と感想を述べていた。

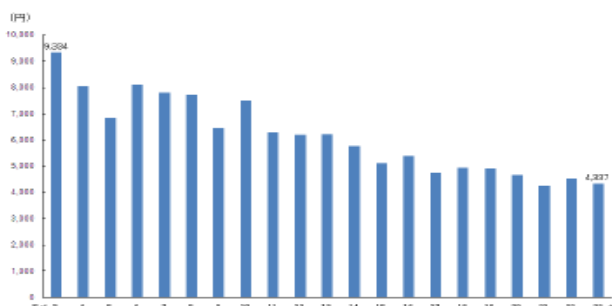
⑥ 最後に再び鹿鳴館舞踏会の写真を見せ、「不平等条約の改正のために、日本の欧化政策は必要だったと思う？」と尋ねると、Bさんは「結果としては必要だった」「批判を浴びながらも徹底したことで、その勢いがみんなに伝わったのかも」と、必要かそうでなかったかの二択にこだわらず、その方針に注目していた。また、その後の欧米の情勢を見て、欧米にとっての日本という視点にもこだわって話をしていた。

振り返り

最初は他人ごと・過去のことだった事象が、だんだんと自分ごと・現代につながるようになってくる過程で、Bさんの考えが深まり、発言が頼もしくなってきた。使う資料やその提示の仕方は、子どもの興味関心や学習スタイルに応じて変えたり、その場の反応を見て変えたりしている。

Topic #03 | 意見を交換しながら、多面的なものの見方を身につける

情報が飛び交う時代にあって、次代を生きる子どもたちには情報を多面的に捉え、分析する能力が求められる。さらにライズ学園では、異なる意見に耳を傾け、意見を交わし、ともに学びあえる場づくりを大事にしている。



【図1】みかんへの年間支出金額の推移(平成3年～23年)総務省統計局「家計ミニトピックス」より

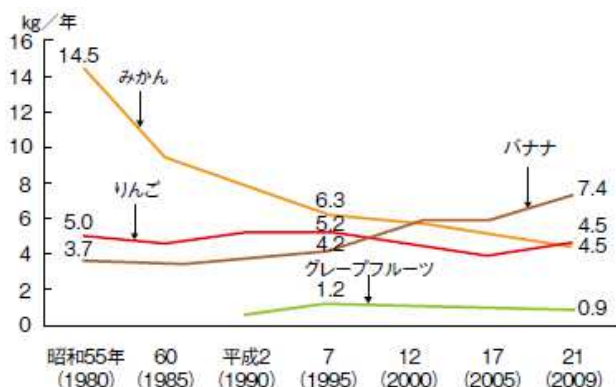
実践

中学1年生に対して、「なぜ日本人はみかんを食べなくなったか？」という問いから授業を始めた。

① 【図1】を見せ、一家庭がみかんに出すお金が20年間で半分以下になったことを提示して問うと、子どもたちからは次項のような意見が出た。

◎ なぜ日本人はみかんを食べなくなったか？

- 手が汚れるのが嫌だという人が増えたから
- みかんよりもおいしい物を食べるようになったから
- 食べる時間がなくなったから
- こたつがなくなったから
- みかんが安くなっただけでは？（データは支出金額）



【図2】主な果実の1人当たりの購入数量の推移
農林水産省「平成22年度 食料・農業・農村白書」より

振り返り

子どもたちは、お互いの意見に刺激を受け、インターネットを使って自主的に調べ学習を進めるなどしていた。その表情は自信に満ちて生き生きとしており、学びあうことに喜びを感じているのを実感できた。

ライズ学園ではよく、「税金を納められるように…」と子どもたちに伝える。ライズ学園の経営も、市からの補助金＝税金によって大きく支えられていることに感謝し、社会の一員として行動できるようになってほしいとの思いからだ。子どもたちが社会からの孤立感を感じることなく、社会の中で認められているという感覚を持てるような実践がより重要になってくると考えている。

▶ 私にとってのライズ学園



ライズ学園スタッフ 社会担当 松井由佳

子ども達とともに歩ける大人になりたいと思っていた。そのための職業選択は「学校の先生」しか思い浮かばなかったものの、今の採用システムの中で筆記試験を通過して教員になることに違和感を感じていた。地元の教員採用試験に落ちたとき、なぜか嬉しかった。自分の道を進むことを許された気がした。今思えば、自分自身の特性によるものも大きかったのだとわかるが当時は、生活力がない、現実感覚が乏しい、何も知らない自分が嫌で仕方なく、そんな自分を変えたかった。

学生時代に仲間とともに立ち上げたスクールボランティア活動の中で多くの魅力的な方々、団体に出会い、その中でも教育について広い視点で考え質の高い実践をしていたライズに惚れ込み、飛び込んだ。今の私があるのは、そんな私の突然の行動を受け入れてくれた（今も受け入れ続けてくれている）小野村代表とスタッフ・理事の皆さん、ライズの子も達のおかげだ。

ライズに入って11年。その間に、結婚して母にもなった。いまだに何かおかしいことをしてしまう自信は人一倍あるが、失敗を成功のもとにしながらいま精進する意欲をそがれないでいられるのは、本当に幸せなことだと思っている。

体験活動からの学び スポーツ



▶ 大事にしていること

スポーツをライズの「遊び」にすること。それが、スポーツスタッフとしての仕事だと思っています。

ここでいう「遊び」とは、人と関わりあう時間を純粋に楽しみ、夢中になって時を忘れるような活動のことです。「遊び」の中では、その場にいるメンバーに合わせてルールが柔軟に変わっていったり、年齢を超えてお互いに教えたり教わったりする場面が生まれてきます。仲間の新しい一面を発見し、人間関係がより深まることもあります。私自身も仲間の一員として、子どもたちやスタッフとともにプログラムを作り、進行していけるよう、心がけています。

(ライズ学園スポーツコーチ・コーディネーター カイ・エンタープライズ株式会社 井上 真理子)

カイ・エンタープライズ株式会社 <http://www.kai-enterprise.net/>

Topic #01 | NEWスポーツを中心に、多種多様な競技体験を提供

NEWスポーツとして、例えば、フライングディスク、雪合戦、ラート、ユニホックなどが挙げられます。野球、サッカー、バレー、バスケットボールなどのメジャースポーツと比べて、競技人口が少なく、学校ではあまり体験できないスポーツです。ライズ学園では特に、NEWスポーツを多く取り入れています。

ほとんどの子がやったことのないスポーツなので、全員ゼロからのスタートができること、身体能力に左右されにくいこともポイントです。

昨年度は、「アダプテッド・スポーツ(身体障害者とともにできるスポーツ)」として、ブラインドサッカーも取り入れました。世界中のどんな人とでも体を動かして楽しむことができるということを、スポーツの授業を通して体感してほしいと思います。



Topic #02 | 「チームプレイ」を重視

ライズ学園では、特にチーム対抗の時間を多めにとるようにしています。人間関係の基本であるあいさつから始まり、「勝つ」という目標のもとに、どんな人とも組める力の育成を目指しています。

「全員にパスを回してからでないとゴールできない」というルールは、ライズの中では定番。試合の合間に作戦タイムの時間を設け、チームごとに小さなホワイトボードを使って話し合いをすることもあります。



Topic #03 | その道のプロに教えてもらう

新しい競技に挑戦するときには、なるべくその道のプロを呼んでくるようにしています。プロの人にしかない技、その人しか感じてこなかったことを伝えてもらうことで、「この人に教えてもらった、ほめられた」という特別感を、ぜひ味わってほしいと思っています。これまでに、ボクシング、バレーボール、なわとび、バドミントン、体操、サッカー、ラグビー、ラートのトップアスリートをライズ学園にコーディネートしました。



ラートの世界選手権2015における金メダルを見せてくれた高橋選手

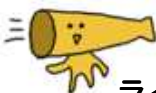


プロバレーボールチーム「サンガイア」の選手たちと



なわとびチャンピオン「くろちゃん」によるプログラム

▶ 私にとってのライズ学園



ライズ学園スポーツコーチ・コーディネーター
カイ・エンタープライズ株式会社 井上真理子

ライズの子どもたちに初めて会ったときは、それぞれの個性が豊かすぎてびっくりしました！ライズの魅力はとにかく、一目会ったら忘れられない子どもたち一人ひとりです。それぞれの個性がしっかりしてるから、あとは自信をもつことと、チームプレイができるようになったら完璧！と思っています。もとに関西人なので、子どもたちからどんどん出てくる「ボケ」発言をどこまで拾おうかといつも悩みながら、とても楽しくやらせていただいています。子どもたちから感謝カードをサプライズでもらったときは、嬉しかったです。

自分なりの目標や振り返りができるようになること、スポーツの時間が日常の生活にもっとつながれるようにすることなど、課題ややりたいことがまだまだあります。

体験活動からの学び 絵画造形



▶ 大事にしていること

絵画造形の時間だからといって何かをつくらなくても良い、というスタンスを大事にしています。無理やりやられるのではなく、自らやりたくなるようにするにはどうしたら良いか―。そのしかけを常に考えています。

素材、道具、作り方、評価の基準等を、毎回異なる切り口からもってくることで、常識の枠を外していきます。多面的なものの見方は、生きていくうえでとても大切なことだと思っています。それが道を切り開く力になり、人生をおもしろがれる力になる。絵画造形での考え方が、生きていく時の自信に少しでもつながれば、と願っています。

(ライズ学園スタッフ 絵画造形担当 平石 哲)

Topic #01 | 身近なものを、見直す

毎回素材と切り口を変えたテーマを提案し、身近なものをいつもと違った視点で見直しながら制作をしています。スタッフは、たわいもないおしゃべりをしながら個々の作業を見守り、試行錯誤の時間や偶発性を大事にしています。もの本来の意味から離れ、そのものを使って別な意味をもたせる。また、材料をさわりながら感触を確かめ、そのものでしか作れないもの、その時にしか作れないものなど、そのときどきのイメージをふくらませ、思いついたことを大切に、なるべく自ら作りたいものを制作していきます。



身近な素材に「目」をつける
ことのできるライズ動物園



段ボールでロボットづくり



マスキングテープ+クレヨン
テープをはがしたら完成



はがしたマスキングテープ
で造形



釘とワッシャーで絵を描く



桜の花びらで絵を描く



パズルピースで絵を描く



針金で絵を描く

Topic #02 | 人に合わせてつくる

その場にいる「人」に合わせて何かを作っていくワーク。人との相互作用によって自分ひとりでは見えてこなかった世界が生まれてくる体験も提供しています。

① 共同絵画

一定時間ごとに模造紙を回しながら、自分の目の前にきたスペースに絵を書いていきます。他の子どもたちの書いた絵を見て、線や色、吹き出しを付け加えたり、関連した絵を書いたり、斬新な場面転換を図ってみたり。子どもたち同士が絵画を通してコミュニケーションし、距離を縮めます。



② サイコロミュージック

ドレミファソラシドの8音階が記された手作りの八角サイコロを振って、出た目の音階を5線譜に記していきます。音符が読める子を中心に、2～3人で1チームに。最終的に、できあがった音楽を演奏するとともに、CDジャケットまで手作りました。



Topic #03 | 空間に合わせてつくる

場や空間を演出することも、1つのアートです。立体・身体を意識することで、創作の幅が広がります。

ライズ学園の教室全体を町に見立て、新聞紙を使ってそれぞれが好きな場所に好きな大きさと家をつくるワークでは、個々人が町の住人になりきり、生き生きと制作に取り組んでいました。身体も心も解放され、作りかけの家の中で靴を脱いで寝てみたり、できた家を訪ねあってみたり、家の境界線の問題でけんかをしたり和解したり。絵画造形の時間が終わっても、しばらくはその世界から抜け出せないほどに、はまってしまった子もいました。



Topic #04 | 松見公園「いやしの庭」看板制作プロジェクト

2013年10月、NPO法人つくばアーバンガーデニングさんから依頼を受け、同団体が施工・管理している松見公園「いやしの庭」を活性化するための看板をライズ学園の子どもたちが制作することとなりました。当初は数カ月で終わる予定だった看板制作は、子どもたちによる1つひとつの決定へのこだわり、試行錯誤の末に、丸2年をかけて完成し、2015年12月、無事に納品されました。

病院近くの、ユニバーサルデザインを意識した空間と、そこを訪れる人々を常に意識しながら作り上げた集大成。子どもたちはこの制作を通じ、多くの体験と学びを得ることができました。



「看板の文字は、手彫りしよう」と子どもたちから声があがりました。看板を設置する松見公園の近くには病院があるため、多くの患者さんが訪れます。目が見えない方への配慮として考えました。とはいっても一文字ずつ彫るのは大変で、半年かけて彫り上げました。彫るペースは子どもたちによって違い、また、時間をかけて丁寧に仕上げたい子、効率よく進めたい子といったように考え方も様々です。しかし、「大切なことは想いをこめて彫ること」と繰り返しみんなで話した結果、彫るペースが速い子は、遅い子を責めるのではなく、手伝うという形で作業を進めることが出来ました。

看板制作を依頼してくださったつくばアーバンガーデニングさんに、制作の流れをプレゼンテーションしました。外部の方へ自分たちの考えを伝えるのはとても難しいことでしたが、「どうしたら伝わるか？」と相手を意識してプレゼンテーションボードを作りました。当日、発表の役割分担をしている時に、Eさんが「私の声は聴きとりにくいから、補足してね。」と他の子に声を掛ける場面がありました。普段は弱みを見せず自分一人で背負いこんでしまいがちなEさんですが、素直に他の子に頼ることが出来ていました。



文字の色を何色にするか？という話し合い。AさんとBさんの意見が激しく対立し、Cさんは意見せず悶々としている様子でした。AさんとCさんが離席して話し合いは中断。しかしその後、Cさんは他のスタッフに話を聞いてもらい少し落ち着いた表情で席にもどり、臆せず自分の意見を言えました。Aさんも最後にもどってきて一言。「さっきはヒートアップしたけど、こんな風に意見が分かれることは決して悪いことじゃない」と。自分と異なる意見をどうとらえたらよいのか？子どもたちは、相手と少し距離をとったり、落ち着いて一人で頭を整理したり...と自分なりに考えていました。

作品は本のようにページがめくれるようにしましたが、木製ページのめくりにくさが解消できず、試行錯誤する日々が続いていました。この日も、Dさんはいつものように率先して改善点を提案しましたが、他のメンバーはいまいち内容を理解できず無反応でした。Dさんは、脱力した様子でテーブルから離れ、「他のメンバーは意識が低い。自分とのギャップを感じる・・・」とスタッフに自分の想いを吐き出しました。その後、Dさんは気分を入れ替えて、みんなが理解しやすいように言い方を変えて提案し直しました。すると、みんなも理解し、意見を一致させることが出来ました。「僕の言い方も悪かったんだよね。」と最後につぶやいたDさん。大きな成長を感じました。



ついに看板が完成し、公園に持っていく日がきました。「どんなデザインの看板にするか？」と一から考えるところからスタートしたプロジェクト。途中、作業が大変すぎたり、話し合いの中でみんなの意見がまとまらなかったりといくつかの壁がありました。それらを乗り越え、2年の月日をかけてやっと完成にたどりついたため、看板への愛着もひとしおです。「納品するのが寂しい。」という声があがるほどでした。つくばアーバンガーデニングさんから依頼されたことを、どんなに苦しくても投げ出さずに、最後まで向き合い続けた子どもたちのことを、スタッフは誇りに思います。

▶ 私にとってのライズ学園



ライズ学園スタッフ
絵画造形担当 デザイナー 平石 哲

近所のおもしろいおじさんであれは。

最初のころはお兄さんでしたが、今ではそこそこのおじさんになりました。

近所のおじさんがふらっと来て何かおもしろいことと言って帰って行っちゃうみたいなのが理想です。しょうもないことと言って帰っちゃうし、分け分かんないけど、なんかおもしろかったなって感じが心にくすくすと残れればいいかなと思います。

悪い影響を与えると申し訳ありませんから、ほんとうは何も残らなくてもいいと思っています。大人になってから昔、ライズ学園に通っていた時に毎週金曜日に変なことを言っているおじさんがいたなと何となく思い出されれば幸せです。

毎回いろいろなことを考えて臨んではいるのですが、いつもそれより、もっと楽しいことが待っているそんな空間です。

私のちっぽけな考えなど、台風のようにいつも吹き飛ばされ、また新たな台風がやって来ては去って行く、吹き飛ばされた後には本当に大切なもののだけが残っているそんな感じです。何も残っていないのではという時も何かのカケラはあります。

いつも楽しませてくれて本当にありがとうございます。

体験活動からの学び ライズタイム



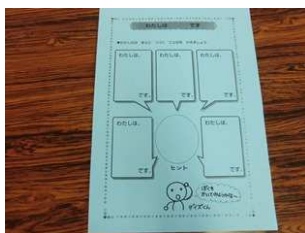
▶ 大事にしていること

ライズ学園には、様々な個性があふれています。そんな個性的なメンバーみんなで協働して行うのがライズタイムの活動です。年間目標は、その年の出来事や子どもたちの顔ぶれによって変えていきます。例えば、「エンカウンターでソーシャルスキルを養おう」「災害への対応力を身につけよう」「食への関心を養おう」など、教科学習とはまた違う切り口での活動を通して、子どもたちは自分や他者の色々な側面を見つけていきます。良い部分だけではなく弱みや苦手が見えることもあります。しかし、自分を受け入れることを第一歩として、徐々に他者にも目を向け、受け入れられるようにサポートしていきます。そうした活動を積み重ねて、集団の中で自分らしさを発揮できるようになってほしいと願っています。

(ライズ学園スタッフ ライズタイム担当 大嶋 愛子)

Topic #01 | 自分や仲間について知り、受け入れよう

トークエクササイズやロールプレイ、自己紹介カードの作成などを通して、自分や他者への理解を深めていくワークをしています。「自分ってそういえば〇〇が好きだなあ」「あの子はあんな面白いことを考えていたんだなあ」など自分や他者の知られざる一面を発見することもあります。“相手の話は遮ったり評価したりせずに最後まで聞こう”などの簡単なルールを設定して行っていますが、ゲーム形式だからか子どもたちは大人の予想以上に柔軟な姿勢で楽しんで参加しています。いつもよりほぐれた笑顔が見られたり、ふだん関わり合いが少ない子ども同士がつながったりなど、大切な時間になっています。



Topic #02 | グループでの協働体験を通して、社会の中で自分らしさを活かそう

グループで行う活動の1つに、調理があります。みんなで力を合わせて1つの料理を作るといっても関わり方は様々です。切る作業が得意な子、味付けに興味がある子など、子どもたちは自分の得意分野や興味に応じて、作業を選んで参加します。スタッフは、誰がどこを担当するかを指示しませんが、一人ひとりが「あそこの作業は、人が足りていなくて大変そう」などと周りの様子をみて動き、自然にフォローし合っています。東日本大震災以降は、災害への対応力を身につけるワークも取り入れています。ライフラインがストップした時の対処法、災害伝言ダイヤルの使い方、防災グッズのリストアップなどに取り組んできました。



▶ 私にとってのライズ学園



元ライズ学園スタッフ 臨床心理士 盛弓子

ライズ学園の立ち上げ当初から8年間スタッフとして勤めました。個性あふれるたくさんの子供たち、学生ボランティア、スタッフの方々と出会いました。

今、ライズで過ごした日々を思い出すと…楽しかったことはもとより「あの頃なんであんなこと言っちゃったのかな…」「もっと上手に教えられる方法あったらいいな…」「もっと早く気づいてあげられればよかったな…」と、自分の教え方、接し方についての後悔ばかり浮かびます。年長者として子どもたちやスタッフをまとめなきゃ…という気負いもあり、若気の至りもあり…。「こうあるべき」「こうしなければ」と、めざす“かたち”のようなものを自分で思い描いていたことで、押し付けの教育・思いやりになってしまっていたのかな…と今になって思います。ライズを離れたからこそ気づけた事かもしれません。

「ひとりひとり異なる世界を持つ人との誠実な関わりによって、“かたち”は自由自在に変化する」と、ライズで学んだ事を礎として、現在は公的機関で臨床心理士として勤めています。あの頃子どもだった通園生達に「あの頃の私、子どもだった…ごめんね…」と伝えたら…と想像します。すると、子どものままの姿で、かつての通園生達が「そうだね! 私たちのほうがオトナだったよ!」「もう仕方ないなぁ! モーリー!」「許してあげるよ!」と、けらけら笑いながら言ってくれるような気がします。子どもたちに育てられた8年間だったなぁ…と懐かしく思います。

体験活動からの学び カルチャー教室



▶ 大事にしていること

不登校の子どもたちに対する支援の課題として、一団体では多様な体験・実践的な学びを行うことの難しさ、人的交流が小さな枠の中に限定されがちであるといったことがあげられます。ライズ学園では、この課題をふまえ、豊かな学びの機会とより多くの人々とのふれあいを不登校の子どもたちに提供することで、子どもたちの学びの意欲の喚起と、コミュニケーション能力や人間関係を築く力の伸長とを図ることを目的として、2005年度より「学校に行っていないみんなのためのカルチャー教室」事業をスタート、現在に至ります。

スタッフが、各機関のコーディネーターからの紹介や各種情報収集で講師を見つけては直接会いに行き、協力を要請。事前の打合わせは丁寧に行い、知識や経験はあっても子どもを相手にしたことは少なく不慣れという方には、指導案から一緒に考え、教材作成のサポートをするなどしています。

ライズ学園に通園している子どもたち以外の不登校生にも間口を広げ、彼らが一歩を踏み出すきっかけとしての機能も大事にしています。

(ライズ学園スタッフ カルチャー教室担当 松井 由佳)

Topic #01 | 多様な体験を力に

これまでの合計講座数はのべ135講座、講師数はのべ86名、参加人数はのべ1,000名を超えています。芸術分野では、太鼓、お箏、演劇等、スポーツ分野では、ダンス、スポーツチャンバラ、ロッククライミング等、その他、調理、理科実験、工作等、様々な体験プログラムを行ってきました。教員を退職されたベテランの方から若い大学生まで様々な方に講師としてご協力いただいています。



調理教室



スポーツチャンバラ



太鼓教室



小麦粉でヒマラヤをつくろう



理科実験:3Dを科学しよう



ブルガリア出身講師の茶道教室



パーソナルカラーを知ろう



宇宙の話を聞こう、話そう

ダンス教室で講師にセンスの良さを褒められた子が、大学ではダンスサークルに入って活動を楽しんだと話を聞きました。ロッククライミング教室で自信と達成感を得た子が、高校入試の際に自己申告書にその感動を書き、希望の高校に進学しました。

スタッフ以外の大人との出会いは、子どもたちに少なからぬ影響を与えています。プロならではの技術と視点を持った講師との触れ合いにより、子どもたちが新たな自分を発見する場でもあります。

ダンス教室

計3回の教室を通して、子どもたちは1曲の振付を完全に覚え躍ることができるようになりました。

鏡で自分の容姿を見るのが嫌だと泣いた子も、講師とのコミュニケーションを深めながら徐々に自分と向き合い表現をしようとする姿が見られました。後ろのほうで恥ずかしそうに踊っていた男の子たちも、次第に体が動くように。「鏡の前でジャンプ！」のレッスンが特に楽しかったようです。



ロッククライミング教室



低い壁の石を横に伝って進む練習をしたあとは、15メートルもの高さの壁に挑戦。「こわい！ 降ろしてください」と涙ながらに体を震わせて叫ぶ子どもたちに、「自分が限界だと感じたところからあと一歩だけ頑張ってみよう」と話す講師。一体となって応援し励ましあう空気も、皆の向上心に火をつけ、頂上まで登りきる子が続出しました。普段大きな声を出したことのなかった子も、命綱の先にいる講師に「(頂上に)着きました。降ろしてください！」と大声で伝えていました。子どもたちは盲目のロッククライマーとのコミュニケーションの中で、信じることも学んでいました。

▶ 私にとってのライズ学園



食育アドバイザー・保育士 石川 真由美

ライズ学園との出会いは今から4年前の「料理好きな子たちとの調理教室」。流れをイメージしつつ、スタッフさんとも話して最終的には個性を大事にしつつ臨機応変に進めましょう、ということ当日を迎えたのです。

最初に、材料で使う小麦粉の種類や世界の小麦粉料理の話をさらりと進めようとしたら…「なんで薄力粉っていうんだらう？強力粉、中力粉だから弱力粉じゃないの？」「イタリアの隣ってなんて国だっけ？」…と導入部分だけで沢山の疑問がありなかなか先に進まなかったのを覚えています。(そのとき正確なことを教えてあげられなかった自分にもがっかり、でしたか…)

また違う年には生地を型抜きして焼く作業。型抜きなんてしたくない、自分のオリジナルの形を作る！と必死で形を整えて何度も何度もやり直してようやく時間ぎりぎりまで完成。自分なりに良くてきたと満足したのか食べようとせず「持ち帰る！」といった子も。

あるときは揚げ物をしていると出来上がったものひとつひとつに名前を付けて大事に大事にお皿の上にのせてみたり…毎回時間内に終わるのか、とヒヤヒヤ。でも終わった後の皆の満足げな笑顔が忘れられません。こんな感じで毎年、どんな新しい発見があるんだろう？と楽しみにしています。

結局、ライズ学園の皆さんに私が成長させてもらっていて…毎回臨機応変すぎてスタッフさんにはご迷惑をおかけしていますが…。「一人ひとりの個性を受けとめ、認める」という部分だけは毎年変わらず、ブレずに行きたいと思っています。

体験活動からの学び 農業体験



▶ 大事にしていること

農業体験は、ライズ学園のキャリア教育として位置づけられると考えています。職業紹介や職場体験の前に、働くことによって得られる喜びや達成感の積み重ねが、社会に参加するための自信と意欲につながっていくのではないのでしょうか。

農業体験の中で、子どもたちは確実に力をつけ、たくましくなっていきます。また、自分で育てたものを収穫し、食べることの楽しさを感じているように思います。自然とともに生き、田畑を守ってきた先人にも思いを馳せながら、生きていることを実感し、働く。そんな農業体験を、ライズ学園ではとても大切にしています。

田畑の管理は、ライズ学園だけではとても完遂できない作業です。地域の方の理解と協力を得て、実施できています。食物を育てることは手間も苦労もあります。その一部を体験させてもらっているという意識を持ち、感謝の気持ちを忘れないようにしています。

(ライズ学園スタッフ 農業体験担当 松井 由佳)

Topic #01 | ライズ畑でのじゃがいも・さつまいもづくり

ライズ学園開設当初からお借りしているライズ畑は、車で約15分の場所にあります。子どもたちは、毎年、このライズ畑で主にじゃがいもとさつまいもの植え付け・収穫を行ってきました。

畑を耕し、畝をつくるところから始まるじゃがいも植え付け作業。真夏に汗を流しながら収穫し、調理して食べるまで行います。中学生が体力のない小学生を気遣ったり、力仕事は男の子が担当したりと、子どもたち同士で自然と役割分担をしています。体力や興味関心に応じて参加度合いは変わってきますが、子どもたち本来のたくましが引き出される体験となっています。畑の貸主さんのご好意で、畑を耕したり雑草をとったりする作業を代わっていただくこともあり、土と貸主さんに感謝の気持ちを持って取り組んでいます。



Topic #02 | 筑波山麓での 田植え・稲刈り体験

NPO法人自然生クラブさんが主催する田植え・稲刈り体験にも参加しています。子どもたちは、一般の参加者に交じって田植え・稲刈りを行います。小さな子どもや大学生、障がいを持つ人など色々な立場の人が参加しています。子どもたちは、初めて会う人に挨拶をしたり、一緒に太鼓演奏をしたりと、人と触れ合う良い機会にもなっています。主催者からは頼りにされ、1枚の田んぼを任されるほどに。泥の中に入れるようになれば、それはエネルギーがたまってきた証拠です。泥の中で転んでも笑いながら楽しんで田植え作業をしています。筑波山麓の田んぼや川は、子どもたちにとってのパワースポットです。



Topic #03 | 小さなラブ&リー農園での 様々な農業体験

平成24年度より、子どもたちにとって新たな農業体験プログラムがスタートしました。教育と社会に関心の高い農園主が計画性を持って立ち上げ、細やかに維持管理がされている「小さなラブ&リー農園」における農業体験です。毎年、2～3回の体験をさせていただいています。

プログラムの作成にあたっては、毎回打ち合わせをして、スタッフと目的を1つにしなが、農園主が率先して準備を進めてくださいます。これまでに、いちご・玉ねぎ・落花生・さつまいも等の植え付けと収穫、じゃがいも・とうもろこし・すいか・里芋・ブルーベリー等の収穫をさせていただきました。My農園プロジェクトとして、10種類の野菜の中から自分の区画にまきたい種を選んでまき、収穫をする体験もしました。毎回子どもたちは採れたての野菜をその場で調理して食べることを楽しみにしています。野菜嫌いの子が「僕が野菜を食べる日が来るなんて！」と自分でも驚きながら沢山の野菜を食べていたのが印象的でした。



とれたてのとうもろこしの美味しさを生で味わう



農園主が、東日本大震災被災地に毎年運んでいる



いちご苗植え後の水やり：「良く育て」と願いをこめて



ここの野菜は味が違う！恒例の野菜しゃぶしゃぶ



キャベツ収穫：それぞれの野菜の育ち方を知る



青虫の観察：生き物すべてがこの農園の立役者



マルチ張り：年長者のみ特別にやらせてもらえる体験



My農園づくり計画書：種の種類と配置を各自が決定

▶ 私にとってのライズ学園



小さなラブ&リー農園 糸永 かずひで

それは、一通の手紙から始まりました。

手紙は、龍井昇治様(元・茗溪学園校長)から届きました。その内容は「特定非営利活動法人リヴォルヴ学校教育研究所へのサポートのお願い」でした。さっそく賛助会員個人の手続きをさせて頂きました。この時、リヴォルヴ学校教育研究所が運営しています、ライズ学園が目にとまりました、その瞬間・目の奥の小さなスクリーンに、私の小さなラブ&リー農園で子供達が楽しんでいる姿が浮かびました。「そうだ、子供達に農園で農作業の体験をして頂ければ、自然を満喫でき、楽しいのでは?」と思いさっそくアポイントを取り、平成23年10月、挨拶と農園体験の相談に伺いました。

○ 新年度、農園体験の打ち合わせをしました。担当のM先生が、「こどもたちにとっての体験の目的」として、①五感で自然を感じながら、心身ともにリフレッシュする。②自分の頭で考え動ける社会人になるための意欲と自信を身に付ける。③食や農業に関心を持つ。と真剣に、私に話してくれました。その表情と話し方は、心から子供達のことを真剣に考えていることが伝わって来ました。ここで私が期待したいのは、自然の中で自然を満喫してもらいながら子供達に、自然の強さ・やさしさ・怖さ・そして動植物と共存する生命力のすばらしさを少しでも感じてもらいたい事です。

○ 今年農園体験は4年目となり、この夏8回目を迎えました。M先生の「体験の目的」は十分達成されていると感じ取れます。先生方の子供達に対する対応は、S先生は体験中、一人一人の子供達に目を配り、何かあるとすばやく近寄ってスキンシップで対応・指導を行っていました。G先生は、自然体で子供達と同じように・いやそれ以上に感情を出して、驚いたり・喜んだりどちらか、生徒か?先生か?わかりません!!先生は、与えられた仕事を皆さんの、手本となるように、始めから忠実に、最後の片付けまで行います。このように思いやりのある行動で子供達を見守っていました。この安心感が子供達にとってどれほど心強いのか、本人達も気付いていることと思います。

○ この夏、K先生から手紙が届きました。その中には中学2年生3名からの手紙が同封されていました。予期せぬ手紙なので、驚きとうれしさで、思わずスゴイ(今風ではーヤバイ)と声を出しました。三人三様皆さん、真剣に、思いを込めて書いた手紙、わくわくしながら読みました。皆さんの共通しているところは、私への、気遣いと感謝の気持ちでした。同時に、子供達の成長と、人として一番大切な誠実さを感じました。このことは、やはり子供達に適した環境と気配りの出来るやさしい先生方の影響があるのではないかと思います。この感激・感動を頂いた大切な手紙、私の心の思い出箱に大切にしまっておきます。

○ 一般的に教育は、「教えて知能をつける、心身両面にわたって、またある技術について、その才能を伸ばすために教えること」とあります。ここでは、場所も時間も教える人も教えられる人も、決められてません。ライズ学園の子供達は、この小さな農園体験ひとつとっても、一般社会の中で、自然と地域の方々と直接ふれあい(交流) 同時に心ゆたかなライズの先生方のアドバイスを受けながら、たくましく各自のペースで、知恵やなんらかの行動する力を習得しながら、本来の才能を伸ばしているのではないかと、私は感じ取る事が出来ました。

○ 「私にとってのライズ学園」は、感謝です。子供達からの手紙にあった、私への気遣いと感謝の気持ちから、誠実さ、思いやり、感謝を再認識できました。ここで1つ、小さな勇気(自信)を持たせる(育てる)ことの大切さを痛感しました。

体験活動からの学び 被災地支援



Topic #01 | 子どもたちの声から始まった最初の一步

2011年3月11日、午後2時46分、ライズ学園は授業の最中でした。

激しい揺れに大型のコピー機が飛び跳ね、机の下に身を隠した子どもたちに本棚が倒れ掛かりました。しかし、誰一人取り乱すこともなく冷静に行動し、全員が無事に帰宅しました。

教室が再開できたのは、それから一週間後のこと。

「何かできることはないのかな？」

「机の中に眠っている文房具を集めて送ろう」



震災当日の教室

子どもたちからの提案を受けて、インターネット上で協力を呼びかけました。

すると、連日たくさんのお問い合わせをいただき、全国から鉛筆やノート、消しゴムといった学用品が送られて、狭い教室はあっという間にダンボール箱で埋め尽くされました。春休みに入っていましたが、子どもたちと学園スタッフ、そして保護者の方にも力を借りて仕分けを行いました。鉛筆は濃さ別に、ノートは教科学年別にまとめるなど、送り先の皆さんの負担を軽減できるよう丁寧に仕分けをしました。数日夜遅くまでの作業が続きましたが、誰ひとり休むことなく根気強く作業に取り組みました。その時の皆の団結力は上手く言葉にできませんが、心から感動しました。その様子に取材にいらした新聞記者さんも感心していました。

3月の末には福島県いわき市を訪れ、4月には福島県いわき市、会津若松市、宮城県仙台市、東松島市、女川町へ支援物資を届けに向かいました。校舎の掃除に使いたいとの要望を受け、子どもたちと雑巾を縫ったりもしました。全国のみなさんのご協力のおかげで、これまでにのべ約40,000点の文房具等を届けました。



子どもたち、保護者、スタッフみんなで、何日もかけて全国から送られてきた文房具を仕分けました。



現地の声を聞きながら、文房具以外にも、傘や長靴、マスクや鍵盤ハーモニカなどたくさんの物資を届けました。



東松島市の学校には、花苗の支援も行いました。花苗は野蒜にある尾形園芸さんから届けていただきました。

徐々に文房具も充足してきたとの声を受けて、送ることのできなかつた文房具をバザーで販売し、支援金に充てることにしました。“集団が苦手”、“知り合いには会いたくない”といった子たちが、大勢の人が来る場所で売り子ができるのか心配でした。しかし、バザーでは、大きな声を出しお客さんと呼び込む子、きちんとお客さんの顔を見て接客する子、「ありがとうございました」と頭を下げる子…。いつも以上に頼もしい姿を見せていました。



被災地支援を通して、子どもたちはたくさんの学びをしました。値段を決める際、「安くして沢山売った方がいい」との意見と、「安く売ってしまったら支援金が少なくなってしまう」との意見が対立しました。どちらの意見ももっともです。どう折り合いをつけるのか、どうやったら周りの協力を得られるのか…。机上の学びではなく、生きた学びです。



バザーは今も続いています

社会の問題を、他人事ではなく、自分たちの問題としてしっかりと考える機会がもてたことは、子どもたちにとってこれからの人生の中で貴重な機会になったのではないかと思います。

▶ 被災地支援をはじめたわけ



ライズ学園卒業生 山本 雄一

文房具を送ろうと思ったきっかけは単純なものでした。

身近にあって当たり前の方が、いきなり無くなってしまったらどうなるのか、家ごとなくなってしまうえはお道具箱もなく、幼い頃から慣れ親しんでいる鉛筆や消しゴムすらもない。津波により消え去ったものを、一から創造していくのに欠かせないツールこそが文房具ではないかと考えました。

鮮明に覚えていたことが1つあります。

それは、当時のライズ学園の皆で少しでも被災地の力になれることはないだろうか、時間を設けて考えている時のことでした。

「黄土色の鉛筆を送る」という提案をスタッフの方に代弁して提案していただいたのです。文房具を送ろう！なんていうのは少し気恥ずかしくて（笑）

支援が始まっても、一人の力では何もできませんでした。

皆様に送って頂いた文房具を1つずつ数え、種類分けをしていきました。当時の子供達、保護者、リヴォルヴを運営されている方々及び、関係者全員が一丸となって懸命に努力をし、力を合わせ、作業しました。少しでも被災地の方々の力になれて、一人でも多くの人を笑顔にできたなら、その時の全員の努力はこれ以上ない有意義な時間でした。

ライズ学園の活動を通じ、真剣にプロジェクトに取り組むという姿勢を教えていただいたことが全てだと、実感しております。

また、スタッフの方々大人と一緒に考えて頂けたということが各々の子供たちの成長と発展に繋がったのではないかと思います。学校に行けていなかった、僕を含めた子供が一般社会と隔たりにくく生活できているのは本当に凄いことで、この巡り合いには感謝が尽きません。

被災支援を通じ、全ての関係者が更に成長させて頂いたのではないかと思います。

Ⅲ みんなでいっしょに 考えたいこと

ライズ学園15年間の実践の中で見えてきた課題に焦点を当てながら、フリースクール
やいわゆる‘学校’のあり方についても、みなさんと一緒に考えたいと思います。

Ⅲ みんなでいっしょに考えたいこと

このような形で活動を振り返るとなると良いところばかりにスポットライトが当たりがちですが、ライズ学園には多くの課題が残されています。それらの多くはライズ学園単独では改善が難しく、課題は「保護者や地域の人々、そして外部機関との連携」とまとめることもできるかと思います。

そして今また、フリースクールを取り囲む環境も大きく変わりつつあります。2014年11月、文部科学省が主催したフォーラムの席上、下村文部科学大臣(当時)は公費負担も含めたフリースクールへの支援を約束しました。これはとても嬉しいことですが、そこには危うさも感じます。

ここではライズ学園15年間の実践の中で見えてきた課題に焦点を当てながら、フリースクールやいわゆる‘学校’のあり方についても、みなさんと一緒に考えたいと思います。

1. 実践から見えてきた課題

① 最初の一步を踏み出すために:教育コーディネーターの配置

設立以来、私たちがもっとも頭を悩ましていることの1つに「背中を押し具合」、特に「最初の一步の支援」に関しては、どこまで介入すべきなのかということがあります。ライズ学園には毎年、入園に関するお問い合わせがたくさんありますが、保護者が通園を希望しても本人がその気になれない、その気があったとしても最初の一步が踏み出せないというケースは少なくありません。

そのような場合には、こちらから出向いて行くべきだという意見もあります。しかし私たちは「来たいと思ったときに、いつでもどうぞ」を基本姿勢とし、家にまで出向くことはしないという選択をしました。その理由として、人手不足があることも正直なところですが、しかし家庭にまで入り込み「登園刺激」をするとすると、もはやそれはフリースクールとしては域外の活動になるのではないかという疑問もわいてきます。よほど慎重に行わなければ、訪問は「善意の押しつけ」とも「強制的な勧誘」ともなりかねません。実際に見てもいない事例をとにかく言うことは控えますが、入会を強制された、寮を抜け出し自宅に戻ったが無理やり連れ戻されたというトラブルも生じています。

最近では、いわゆる‘学校’に行かない子のための居場所、学びの場のすべてを一括りにして‘フリースクール’とする傾向もあるようです。しかしその中には、本来フリースクールと呼ぶにふさわしくない機関も多く含まれていると思います。そもそもフリースクールとは何か、定義さえされていませんが、これを仮に「従来の学校のような管理や統制をできる限り排除し、児童や生徒の主体性や特性を尊重する教育機関」としてみましましょう。その場合、適応指導教室は学校への適応、すなわち登校再開を直接的な目的としているという点で、これには当てはまりません。半強制的に入会、登園を促したり、精神鍛錬を主目的として課するような機関も当然除外されます。

ここでは良し悪しではなく、単純にその性質を話題としています。教育にはその字義からしても、大なり小なりの強制力をもって「教えること」と主体性を尊重して「育てること」との二面性、必ずしも矛盾するものでは

ないとしても少なからず対立する双面性があります。‘学校’ともう1つの選択肢として‘フリースクール’があるのなら、そこにも多様性が認められて然るべきです。絶対条件として、子どもたちの自由意思が尊重されるのであれば、厳しいトレーニングを課するような選択肢も認められてよいかと思います。一方、「居場所」は「児童や生徒の主体性を尊重する」という意味においてはもっともフリーですが、「教育機関」とするにふさわしいかという疑問が残ります。しかしそれはそれで、大切な役割を果たすものだと思います。



コーディネーターの存在は、‘フリースクール’における支援活動の質的向上にもつながる。

いずれにせよ、子どもたちには‘学校’か‘フリースクール’か、‘フリースクール’ならどのようなタイプのものを選ぶのか、選択の権利が保障されるべきです。それには第三者的な立場からのコーディネートが必要と考えますがいかがでしょうか。現在では、スクールカウンセラーなどと呼ばれる人々がその役割を果たしているケースもあると思いますが、十分に機能しているとは言い難いように思えます。第三者的な立場、これをどのような立場に置くのかも検討を要するところですが、子どもや保護者の心に寄り添うことができ、かつ必要な情報を提供できる専門家 — 資格をもっているというだけでなく — を置くべきかと思います。④でふれる評価の問題とも関連し、このような第三者の存在は‘フリースクール’の透明性を高め、そこでの支援の質的向上にもつながるものと考えます。

② スタッフの確保に関して:小中学校・大学等との人的交流を

いわゆる‘学校’を大型観光バスに例えるなら、ライズ学園が目指すのは小回りの利くタクシーです。多くの子どもたちに効率的 — 経費などを考慮すれば当然ながら効率性も大切です — に質の高い教育を考えると、ある程度の規模が求められます。しかしバスに酔ってしまう子には、別の選択肢が用意されて然るべきです。

現在、ライズ学園の定員は15名、週に1日ないし2日だけ登園するという子もいるため1日当たりの平均登園者数は8～9名程度になります。私たちは今後も少人数で家庭的な雰囲気を持続していきたいと考えていますが、この規模で全教科のスタッフを揃えるのは容易なことではありません。

スタッフの不足を解決するにはフリースクール同士、または学校や大学等との連携が必要になると思います。例えば大学ではフリースクールでの活動を単位として認めるなどしてはどうでしょう。教育職、心理職ともに、医療職や看護職などと比較すると実習時間はまったく不足しています。現職教育の一環としても、相互理解を深める意味でも、学校の先生を一定期間、例えば週に1日だけでもフリースクールに派遣するなど方法だと思います。

文部科学省が公費負担も含めた支援を打ち出す以前から、一部の企業が不登校支援に乗り出し始めています。営利を目的とした「株式会社」等の法人形態が教育の現場に適するのか、疑問はあります。しかし不登校の背景に、学習面でのつまずきが潜むケースが多いのは確かであり、学習面でつまずいた子の多くが最初に頼るのが塾です。競争の激化は塾講師の資質を著しく低下させていますが、私たちは講座や学会等を通して、塾にも素晴らしい先生がたくさんいることを知っています。

一部の英会話学校では、教育委員会と契約を結び公立学校に講師を送り込むなどしています。同様に、フリースクールにも講師を派遣できるようにする。英会話学校講師にせよ塾講師にせよ、活躍の場が広がることで雇用が安定すれば、全体的な資質向上も期待できます。

これまでライズ学園には、元公立学校教諭や児童館職員、塾講師等々の教育職経験者、臨床心理士やそれらを目指す大学生のボラバイト(ボランティアバイト)等が参加しています。年齢も20代前半からシルバー世代まで様々、多くは教員免許を所持していますが、畑違いのスタッフもいます。年齢や背景、教育に対する考え方も様々なスタッフが集うことで独特の雰囲気生まれ、それが子どもたちを多面的に捉えることを可能にしていると思います。

ライズ学園で経験を重ね、その後、教職や心理職についた元スタッフもいます。一人の人物が、学校、塾、フリースクール等の異なる場で子どもたちと接する経験をもったり、異なるバックグラウンドをもつスタッフが交流できるようにすることはそれ自体が良い研修機会になると考えます。ここでは深入りを避けますが、これを契機に公立学校教職員の養成・採用制度、現職研修なども含めた働き方まで含めて再検討してはどうでしょうか。

③ スタッフの資質向上:人材バンク、研修バウチャー制の導入を

スタッフとして参加いただく際にいつもお話しするのは、子どもたちにとっては常勤であろうと非常勤であろうと、有償であろうと無償ボランティアであろうと一人のスタッフであることに違いはないということです。子どもたちに対する責任という点では学校もフリースクールも違いはありませんし、より質の高いサポートが望まれるのも同様です。そこで重要となるのが、いかにしてスタッフの専門性を高めるかということです。

と、申し上げると、「そんなものは必要ない」という方もいらっしゃる。専門性がなければ、大学に教育学部や教員養成課程が必要でなくなるはずですが、これを全廃しろとまでいう人にはまだ会ったことがありません。ですがフリースクールのスタッフには「専門性など必要ない」と、言われる。わからないのは、なぜ専門性が不必要なのかということです。「先生嫌いの子供達だから ...」という方もいらっしゃいますが、それと専門性はまた別の問題です。

そこで1つの事例を取り上げたいと思います。インターネット上でもう3年近く公開されている「ひらがな指導」に関する動画の中で、誰でもついやってしまいそうな、しかし重大なミスをしているものがあります。指導者は、子どもたちに教えるということについては専門外の書家です。制作者には申し訳ないですが、研修教材としては価値があると思いますので紹介させていただきます。

まず「つ」を練習するのに「指で書いてみよう」とするのは良いのですが、彼女は子どもたちと向かい合ったままで「つ」と書いています。当然、子どもたちから見た「つ」は反対向き、鏡文字になっています。そこで注目したいのは、中央の男の子です。先生の手動きを見たこの子は一瞬戸惑いを見せますが、席を立ててボードに示されたお手本を指さし先生に何かを伝えようとします。しかし先生は気づきません。画面左側にいる女の子も指先に戸惑いを見せますが、素直な女の子は「これが‘つ’です」という先生が書いたように、左右が逆になった文字を書いています。

「つ」は「く」などとともに鏡文字になりやすい文字で、指導には注意が必要です。その後、再び「ちがうよ、こっちだよ」と訴えても聞き入れられない男の子は、両手で頭をかき始めます。単純に頭がかゆかったのかもかもしれませんが、ストレスの現れとも見て取れます。

ここで申し上げたいのは、教えることは決して簡単ではないということです。その女性は感じのいい方ですし、書に関しては専門的な知識や技能を身につけておられます。しかし教えることに関しては専門性があるとは言いかねます。名選手が必ずしも名コーチでないのと同じように、書家であっても上手に教えられるとは限りません。本冊では、アセスメントの大切さを繰り返し強調してきました。「よく見ること、話を聞くこと」などと言えば、それこそ当たり前で、そんなことは誰でもやっていることかもしれませんが、簡単そうでこれほど難しいこともあります。事実、ライズ学園で毎日繰り返し行われているスタッフ・ミーティングでは、「頭をかいていたのはなぜか？」などと、子どもたちの様子を振り返ることに時間のほとんどを費やします。

書家の女性は、「ちがうよ」という声に耳を傾けてはいません。男の子の言葉に軽くうなずいたようにも見えますが、聞き流しています。さらに、戸惑いながらも‘お手本通りに’鏡文字を書いた女の子を、彼女は「そう、そう！」と、優しい笑顔で褒めてしまっています。少なくとも一度目は、顔をそちらに向けていたのに、女の子の混乱を見落としています。これは個人がどうのという問題ではなく、誰もが犯しがちなミス、いわば盲点です。

教育現場では研修機会の質、量ともにまったく不足しています。公立学校でもとても十分とは言えませんが、それに比べて私立学校ではどうでしょう？ 塾は？ 授業研究など行っているフリースクールはどれほどあるのでしょうか？ ライズ学園でも教科指導についてはまったく研修が不足しています。

そこで提案ですが、研修に関しても、学校や塾、フリースクール等の垣根を取り払ってみてはどうでしょう。不登校についても、学校の教師だけでなくフリースクールのスタッフや保護者までがともに研修を受けられるようにします。教育委員会が主催する命令研修は大幅に減らし、大学やNPO等の外部機関が主催する研修への参加をそれに替えます。やはり詳述は避けますが、学校や塾、フリースクールでの勤務を希望する者はあらかじめ「教育人材バンク」に登録し、バンクは登録者に研修のためのバウチャー（クーポン券）を発行します。参加者は主体的に研修機会を選択、参加後は研修内容を評価します。人材バンクもまた、研修実績を考慮の上、学校等に人材を紹介します。人材バンク運営機関は研修機会についての情報を提供しますが、自身は研修会を開くことができないようにします。

出会いがその後の人生を変えることはままあります。ライズ学園を訪れる子どもたちの中には「大人が信じられない」という子もあり、ほんの一言がひととき大きな波紋を描くことがあります。本当に不登校支援を充実させようというのであれば、スタッフの資質向上はもっとも真剣に検討されるべき課題であり、いわゆる‘学校’の教職員の研修制度も含め抜本的な改革が必要だと考えます。



教職員には研修バウチャーを発行。垣根を超えた研修で異なる立場への理解を深める。

研修会主催者と参加者の相互評価で、研修の質も高める。

④ 説明責任と透明性:外部評価制度の導入を

多くの人が「学校は閉鎖的だ」と、言います。しかしフリースクールはそれ以上に閉鎖的なものとなる可能性もあります。ライズ学園では15年来代表者が変わらず、スタッフの顔ぶれも固定化してきています。このような状態は、良くもあり不健全であるとも考えます。

フリースクールが本質的な意味でのフリースクールであるためには、権力による教育内容への介入は極力排除されるべきだと思います。しかし、閉ざされた教室で、国家やその他の権威に代わってフリースクールのスタッフという権力者 ― 子どもたちには同じに見えることがあっても当然です ― の独りよがりによって、教育内容が偏向されることもあってはなりません。このようなことを防ぐためにも、子どもたちを見ることと同様に、スタッフやフリースクールに対する適正な「評価:アセスメント」を欠くことはできません。

「人から評価されることは嫌いだ」という声も聞くことがあります。しかしこれを避けては通ることはできませんし、避けるべきでもありません。「評価:アセスメント」が適切になされなければ、自らの課題を明確にし、改善のための手立てを講じることもできません。書家としては一流である講師も文字を教えることに関しては気づかない点がありました。これを誰かが別の角度、例えば教えるという観点からアセスメントをしていたら、彼女がもつ専門的な知識や技能が触発されもっと素晴らしいワークショップが実現できたに違いありません。本当に良い「評価:アセスメント」は、長所を引き出し活動の質を向上させるものです。

組織としてセルフ・アセスメントに取り組み、また外部からのアセスメントも受け入れるということは、説明責任を果たし、組織としての透明性を高めることにもつながります。透明性を高めることは、すなわち独善に陥ることを未然に防ぎ、非営利団体としては支援者を増やすことにもなります。

ライズ学園では、もう10年以上の長きにわたってつくば市より補助金をいただいています。必要経費全体からすれば金額はわずかですが、これがなければ今のライズ学園が存在しなかったことは間違いありません。そして金額以上に重要なのは、補助金の交付を受けることでスタッフの意識が変化したことです。それまでのライズ学園には少なからず「同好の士の集まり」といった雰囲気がありましたが、教育委員会等からの視察を受けるなどするようになり自ずと良い意味での緊張感が生まれました。

私たちは毎年、市教育委員会に対して活動報告を行い、ライズ学園に通う子どもたちの在籍校の先生方には、毎月、つくば市内外を問わず文書で活動状況を報告しています。年に二度ほどオープンスクールを実施するなどしてきました。当初は参加者が一人も集まらないこともありましたが、現在、このオープンスクールには在籍校の先生方や保護者の方など様々な立場からの参加があります。子どもたちや保護者に紹介する前に、自らの目で確かめたいというスクールカウンセラーさんなどもらっしやいます。

説明責任ということからは少しそれるかもしれませんが、幼小中学校での家庭教育学級や乳幼児学級、学校や児童館の職員研修等様々な場で、ライズ学園での実践をフィードバックさせていただくなどしています。少しずつでもオープンスクールへの参加者が増えたのは、その成果かと感じます。それでもまだ、「名前は聞いていたが、どんなところなのかわからなくて」と、言われることがあります。率直に言えば「あやしいところなのでは？」ということだと思いますが、当事者にすれば当然のことだと思います。フリースクールのみならずNPO団体としても、より多くの人々に活動を理解してもらえるような機会を設ける必要があるのではないのでしょうか。それには市民活動フェスティバルなどだけでなく、市民が行政の仕事をアセスメントするオンブズマン制度同様に、市民が市民活動団体をアセスメントする制度を創設するなどしてはどうでしょうか。

⑤ 子育て環境の充実のために：地域の企業等との協働を

ライズ学園の経営にあたり、保護者の皆さんには月謝を負担いただいています。スタッフの人件費は、労働対価としてはまったく不釣り合いなものでしかありません。それでも経費は不足し、これまでは理事らがその不足を負担してきましたが、これでは教室を継続させることはできません。スタッフ1名に対する生徒数を20名などとすれば、ライズ学園の存在価値が失われてしまいます。一家庭当たりの負担額をこれ以上増やすこともできません。NPO法人としては、会員や寄付を増やすなどの努力も重要ですが、それだけでは限界があるようにも思えます。子どもたちも安心して学べる、スタッフも落ち着いて子どもたちと向かい合えるようにするためには、寄付や助成金に頼るばかりでなく支援を集める仕組みに工夫が必要なのではないでしょうか。

私たちが目指すところはライズ学園のみの成功ではなく、日本中どこで暮らす子も自分に合った場を選択し、充実した支援を受けられるようになることです。不登校は都市部に限った問題ではありませんが、民間のフリースクール等は都市部に集中しがちです。このような傾向は不登校の場合に限りません。私たちはこのような地域間格差を解消するための仕組み、ビジネスモデルを模索しています。

そこで私たちが取り組んでいるのが、オリジナル教材の開発、販売です。2004年に「もじのかたちをとらえるための ひらがなれんしゅうちょう」を出版したのを皮切りに、その後は学習ソフトウェア「ひらがなの森」、「英語の森」などを発表しています。これらはいずれもライズ学園での実践から生まれたものであり、子どもたちのつまずきを見つめてきたからこそその工夫が凝らされています。

市販教材の中には、イメージやコストばかりを重視し中身が薄い — 中身がないから、イメージやキャッチコピーで売るしかないのだとも思いますが — ものが少なくありません。より良い教材を普及させることで、子どもたちのつまずきを事前に回避、軽減できるようにする。その販売収益を地域に還元することで、より良い子育て・子育て環境を実現したいと私たちは考えます。今はまだライズ学園の経営さえまかならないという状態ですが、2014年からは「生活協同組合パルシステム茨城」を通して「RISE English Course 英単語カレンダー」そして「よめる かける ABC 英語れんしゅうちょう」を寄附付き商品として販売、売上の30%は「いばらき未来基金」を通じて地域で活用いただいています。今後はこのモデルを他地域にも普及したいと考えています。

今、食の安全が揺らいでいます。目先の利益に目をくらませ、食の安全をおろそかにするなど許されて良いはずがありません。同じように、有害物質まみれの玩具の普及は、早急に食い止めなければなりません。子どもたちの安全を確保することは、先に生まれた世代の当然の責任です。

食料の「地産地消」を推し進めることは、子どもたちの健やかな成長を支えることにもつながります。目に見えるところで、安心して食べられる野菜を育てている農家さんなど誠実な仕事をされている方々を応援することは、私たちの責務でもあると思います。

私たちは教材でも「地産地消」を目指し、今後は、地域の企業や諸団体、書店さん等の協働を推し進めたいと考えています。



より良い教材を子どもたちの手に！ 収益は地域に還元し、より良い子育て・子育て環境の実現を図る

2. 私たちが目指すべきところ

下村文部科学大臣(当時)がフリースクールへの支援を約束したフォーラムの席上、「(不登校の子どもたちには)居てくれるだけでいいと思っている」という趣旨の発言がありました。精細には記憶していませんが、要は「まず、必要なのは落ち着ける居場所だ。子どもたちを急かさないでほしい」ということだったかと思います。しかし「居てくれるだけでいい」という表現に、疑問を感じたのは私たちだけだったでしょうか。それは、不登校の子どもたちは何もできない子たちだ、という意味にも理解できます。

「学習指導要領に従えのどうのと条件をつけないでほしい」という声もありました。「まず、居場所」というのはその通りだと思いますし、「公的補助をする以上、学習指導要領に従って」とか「学校への復帰を前提に」などとすると、そこに残るのはフリースクールではなくなってしまうと思います。

しかしだからといって、「居てくれるだけでいい」と言い切ってしまうのはどうか。「まず、居場所」が「いつまでも居場所」となってはどうか。それが本当に、子どもたちや保護者のニーズに応えたものであるのかと考え始めるとよくわからなくなってきます。

学校に求められるものも変わってきています。「世界で活躍できる人材の育成」のようなことが言われますが、それが本当に学校教育が目指すべきところなののでしょうか。「グローバル化が進む社会にあって…」とも言われますが、「グローバル化」とは一体何を指して言う言葉なのでしょう？「現在の学校教育は社会のニーズに応えられていない」という人もいます。私もその通りだと思います。しかし、テレビの画面でそういつている人と、私が思うニーズは同じものなのか？例えば「サステナビリティ:持続可能性」といった言葉でも、人によっては解釈が180度近く異なるように、彼は経済至上主義者で原発推進派、私は次の世代に対する責任をより重視する反原発で、それぞれが思う「社会のニーズ」に対する理解に隔たりがあれば、学校に求めるものも異なってきて当然です。

フリースクールは、今後、日本の教育が進むべき道を指し示すものとなるのではないかと考えます。そこで行われる教育は、金子みすずさんの詩のように「みんなちがって みんないい」をモットーとする、真にインクルーシブなものであるべきではないかと考えます。しかしそこでまた、インクルーシブとは何かという問題に当たってしまう。

そもそも「ちがい」とは何か？「障害とは何か？」不登校ですと言って何らかの専門機関を訪れると、すぐに「〇〇障害の疑い」などとレッテルを貼られてしまいがちであると同時に、本当に必要とする人には支援が届かないという現状があります。義務教育が終了後も必要な支援は生涯継続されて当然です。しかし学校や社会に対して一時的なアレルギー反応を起こしている子には、適切な時期に適度な復帰のための支援が行われるべきです。どうしても学校が合わない子には、フリースクールは単なる居場所としてではなく、その子にふさわしい、そして学校に勝るとも劣らぬ質の高い学習機会を提供できる場であってしかるべきだとも思います。

では、今後、ライズ学園は何を目指すべきなのでしょう。私たちは今、その答えを模索しながら、子どもたちと向かい合っています。皆さんからも、ご意見やご感想をお聞かせいただけたら、いつか一緒にお話しできたらと思います。

▶ 私にとってのライズ学園



ライズ学園 代表 小野村 哲

よく、「なぜ、ライズ学園を立ち上げようと思ったのか?」と質問されます。しかし公立中学校を辞めるときに具体的なプランがあったわけではなく、ただ「何か新しいことを…」とだけ思っていました。そんな私は「(子どもたちに)計画性がなくて困る」というのを聞く度に、「それって素晴らしいことかもしれませんよ」と言います。計画を立ててなどと言っていたら、ライズ学園はいつまでたっても立ち上げられなかったかもしれません。それを言うと多くの方は、「まあ、そうかもしれませんけど…」と、ちょっと困惑した表情をされます。そしてその表情を見ながら、私も

— そう。そうかもしれないけど — と、心の中でつぶやきます。

私自身もこの15年間、何度後悔したか知れません。The Blue Hearts の「一步も動かないで、老いぼれてくのはゴメンだ!」という歌詞に突き動かされるようにして39歳で公務員を辞めてはみたものの、家族には迷惑のかけ通しです。けれど先日はスタッフの一人から、子どもたちの話をするときの私は、「本当に楽しそうな顔をしている」と言われました。

それもまた、そうかもしれません。15周年とはいっても、胸を張れる状態ではありません。経営状態は危機的です。ただ、ライズ学園の子どもたちと一緒にいることは、単純に楽しい。

私にとって、ライズ学園の子どもたちは希望です。私と同じように、ときに私以上に不器用な面も見せる子どもたち。でも、もしかしたら彼ら彼女らこそが、次代を開くのかもしれません。いつも半分冗談などと言っていますが実は結構本気で、将来、〇〇賞とかを取る人が出たりするかもと考えています。いいえ、そんな大げさなことではなかったとしても、彼ら彼女らの一人ひとりが大切な一人であることに違いはありません。そんな子どもたちと一緒にいることが単純に楽しいからこそ、ここまで続けてこられたのだとも思います。

ライズ学園はスタッフにも恵まれています。特に事務局のスタッフは、きっと何度も「もうこの人にはついていけない」と思ったに違いありません。けれど、思いを共有できる仲間に出会えたこと、本当に感謝しています。

ライズのスタッフは、一人ひとりは大した人ではないかもしれないけれど、皆それなりに良い仕事をしています。先輩もいらっしやるのにこんな言い方は失礼かもしれませんが、ここでいう「それなり」とは「いい加減」ではなく「良い加減」です。「良い加減」でありながら、熱い思い — そこにもちょっと勘違いが含まれるかもしれませんが — を秘めている。これこそがライズ学園の魅力ではないかとも思っています。

「ライズ学園があってよかった」と言ってもらえた子どもたちや保護者の方がいらした反面で、力不足を感じさせられたこともしばしばです。そもそも「力不足」などということ自体が不孫で、自分たちとしては良くできている方かなとも思いますが後悔の念はつきません。それでも今は、前を向いて自分たちにできることをと考えています。

最後に、この場を借りて、私の家族に、そしてスタッフとその家族の皆さんに、理事の皆さんや会員の皆さん、そしてライズ学園の子ども達、卒園生とその家族の皆さんに、心からの「ありがとう」を贈らせていただきます。ありがとうございます。どうぞこれからも、よろしくお願いします。



ライズ学園での一コマ ～ボクより良くない！？～

自己主張が強すぎて、周囲とぶつかってはかりいたAさん。「それって、いやな感じだよ」とたしなめても、ついついおとなしい子をやり込めてしまうなどしていました。

ある日のこと、スタッフの一人が

「それはダメ！ それ以上やったら、ライズ学園にはいられないよ」と厳しく注意しました。

ピーンと張り詰めた雰囲気の中、中学3年生のBさんがのんびりとした口調で

「でもさあ — ボクより良くない!? だってさあ、飛び出したりしないから…」

スタッフは一瞬、ぽっかーん… そして大笑い!

「たしかにそうだ!」

けれど一番びっくりしていたのはAさん、

「えっ、ほんと? ほんとにボクよりひどかったの?」

すっかり落ち着いて、(Aさんから見れば)立派なお兄ちゃん以外の何者でもないBさんが自分よりひどかったなんて信じられなかったようです。

「そうね、Bさんはいじけてものに当たったりしてたからな」というスタッフの言葉を受けたBさんは

「まあ、ボクでもこのぐらいになるわけだから…」と、Aさんに声をかけました。

小学校時代は、雰囲気が読めないといわれていたBさんです。ピーンと張り詰めた教室の空気を、一瞬にして何とも言えない温かいものにしたその言動は偶然だったのでしょうか? いいえ、その後もBさんは、彼ならではのぬくもりで後輩たちをやさしく包み込み、またときには素晴らしいリーダーシップを発揮していました。



ライズ学園での一コマ ～原因は‘靴ひも’～

いわゆる‘キレイやすい子’がいて、その子が運動靴のかかとをつぶして履いているとしましょう。身なりにもかまわずズボンがずり落ちていたりするために、からかわれやすく、それがまた‘キレイ’ことにもつながっています。

そこで身なりを整えること、まずは運動靴をきちんと履くことを指導目標としたいと思いますが、具体的には何をしたらよいでしょう。そもそもなぜその子は、運動靴のかかとをつぶして履いているのでしょうか。

まず考えられるのは、「面倒だから」ということ。単純にそれだけの理由かもしれませんが、さらに「なぜ面倒だと感じるのか?」と考えてみましょう。するとそこに、手指が不器用で靴ひもがうまく結べないという理由が浮かび上がってくるかもしれません。

だとしたら、指導すべきは靴ひもの結び方、それが難しければ靴ひもは保護者の方に靴の脱ぎ履きが簡単にできるくらいに結んでもらい — 苦手とする子には、ここが難しいものです — 結びが解けないように接着剤などで固めてもらう、または「結ばない靴ひも」など便利なものもできているのでそれを利用するなどが考えられます。

ゴムの運動靴を履いていたら友だちにからかわれた。けれど靴ひもが解けたらどうしようと思うと不安で、イライラを重ねていたという事例もあります。ライズ学園の子ではありませんが、トイレに行くのにズボンのベルトの着脱がスムーズにできずに失敗をし、登校できなくなったという子もいます。

卷末資料

リヴォルヴ学校教育研究所のあゆみ

2000年度	代表を中心に有志が集まり研究所を発足(7月) 「ライズ学園」をつくば市谷田部で開設(11月) 茨城県知事より特定非営利活動法人として認証(3月)
2001年度	東京シュレーの青年達を招き、シンポジウム「不登校に学ぶ」を開催
2003年度	文部科学省委嘱事業「NPO等と学校教育との連携の在り方」に参画
2004年度	「もじのかたちをとらえるための ひらがなれんしゅうちょう」出版
2005年度	「改訂版ひらがなれんしゅうちょう」「ABC英語れんしゅうちょう」出版 「学校に行っていないみんなのためのマナビィネットカルチャー教室」開講
2006年度	「ひらがなえほん1」出版 NHK「おはよう日本」他、全国各紙で「ひらがなれんしゅうちょう」が取り上げられる
2008年度	学習ソフト「ひらがなの森 ver.1.0」、「英語の森 ver.1.0」販売開始
2009年度	教材販売サイト「森の教材館マナビィ」を新設
2010年度	学習ソフト「ひらがなの森 ver.2.0」販売開始
2011年度	東日本大震災後、被災地の学校支援を開始 RISE英語野線(4線)ノートを作成、被災地の中学校に届ける 学習ソフト「RISE English Course 英語カン」の作成 日本人EFL学習者の「読み書き困難」の実態調査を開始
2012年度	みんなで考える「茨城教育プラン」子育てどう(Do)?プロジェクトに取り組む
2013年度	英語教材に関する実用新案を取得 「RISE English Course 英単語カレンダー」、準拠アプリを作成 認定特定非営利活動法人として認証を受ける(3月)
2014年度	英語教材に関する特許、商標登録を取得する いばらき子ども大学県南キャンパスを運営
2015年度	教育ITソリューションEXPO及び産業交流展2015へ出展 ライズ学園15周年記念講座を実施

団体構成 (2015年11月現在)

理事 10名 監事1名 事務局スタッフ 4名

ライズ学園スタッフ 8名(内3名が事務局スタッフ兼任) 心理カウンセラー1名

会員 正会員:45名、賛助会員:41名

※ 団体概要、会計報告について詳しくは、ホームページでご紹介しています。

ライズ学園の運営状況

ライズ学園の定員は15名ですが、週に1日、2日だけ登園という子もあり、1日あたりの実際の登園者数は下記の表のようになっています。2004年以降、平均出席者数が減少している理由としては、スタッフの不足があります。希望者がいないわけではありませんが、厳しい経営状態では簡単には増員もできません。2014年度の登園者数が大幅に減少した理由としては、まず4月に何名もの生徒が高校や大学へと進学したことが挙げられます。そのような場合でもライズ学園では、新規入園生を一斉に迎えることはしません。1つには、「やっぱりライズに...」という子が出たときにも受け入れられるように、もう1つは一人ひとりをゆっくりといてねいに迎えるためです。実際に教室に入るまで、登園日数が安定するまでに時日を要する子もいます。(2014年度も登録者は定員を超えていました。)すると月謝収入が不安定になり、経営は厳しくなります。ここは頭が痛いところですが、これまでは寄付や補助金の他、教材販売などで得た収益で補てんしてきました。

《出席状況》 * 2013年度からは、8月の1ヶ月間を夏季休業としたことにより、総出席者数、開級日数が減少している。

年 度	総出席者数	開級日数	平均出席者数	備 考
2000年度	71人	18日	3.9人/日	11月～3月 週1日開級
2001年度	894人	128日	7.0人/日	週3日開級
2002年度	961人	150日	6.4人/日	11月～ 週4日開級
2003年度	1,472人	173日	8.5人/日	週4日開級
2004年度	1,855人	172日	10.8人/日	週4日開級
2005年度	1,548人	171日	9.1人/日	週4日開級
2006年度	1,668人	173日	9.6人/日	週4日開級
2007年度	1,606人	172日	9.3人/日	週4日開級
2008年度	1,119人	171日	6.5人/日	週4日開級
2009年度	1,523人	172日	8.9人/日	週4日開級
2010年度	1,260人	169日	7.5人/日	週4日開級
2011年度	1,091人	171日	6.4人/日	週4日開級
2012年度	1,268人	170日	7.5人/日	週4日開級
2013年度	951人	159日	6.0人/日	8月夏季休暇 週4日開級
2014年度	793人	161日	4.9人/日	8月夏季休暇 週4日開級

ライズ学園15周年誌
不登校の心に寄り添い 育ち・学びを支えるために
私たちが行ってきたこと
みんなで いっしょに考えたいこと
2015年11月

認定特定非営利活動法人
リヴォルヴ学校教育研究所

〒305-0047

茨城県つくば市千現1-13-3 パルスグランレジオつくば千現502号

TEL 029-856-8143

FAX 029-896-4035

E-Mail rise@cure.ocn.ne.jp URL <http://rise.gr.jp/>

本冊子は、花王ハートポケット倶楽部による助成を受けて作成されました